朝鮮の經濟開發上機宜の處置

ない、されば朝鮮の各地に於て隨時隨所に朝鮮の生產物を調査見聞するなどは、到底不可能の事にして、それ等の地方的設備を見、或は自由に窶を攫けて、活躍するまでには、前途相當の年月を經過せざる可からざるは當然だ。

されば我實業家が、實際朝鮮の生產品を調査見聞せんには、實に少なからざる勞力と費用とを費さなければならぬ、然るに寺內伯は適當の時期に於て各道の生產物を朝鮮の中心都市たる京城に蒐集して、之を博覽せしめたるは朝鮮の經濟產業開發上、實に機宜の處置であつた、今當時の施設と出品種類を示せば。

出品區別（總て十三部に分ち別に部外に參考品を設く）

第一部、農業。第二部、拓殖。第三部、林業。第四部、鑛業。第五部、水產。第六部、工業。第七部、臨時恩賜事業。第八部、敎育。第九部、土木及交通。第十部、經濟。第十一部、衛生及慈惠救濟。第十二部、警務及司獄。第十三部、美術及考古資料

何物の觀るべきものがあらうとは異口同音の吹聽

（此の他特に有益と認められたるものは、類似の分類に從ひ之を出品することを得）

事每に寺內伯の施政に反對の氣勢を擧げたる在鮮內地人は、共進會開催の發表と共に冷笑を以て迎へた、施政僅かに五年に過ぎずして、何物の觀るべきものがあらうかとは、異口同音の吹聽であつた、それは都會地にのみ集團して、足一步地方に踏み出して、產業自由競爭より齎らす新進の狀態を知らなかつた故であつた。

不肖は各道の出品準備を觀るべく、當時慶尙南北及全羅北道廳に出張して親しく其の出品の類別と、其精選せられたる生產物に就て、駭魄せざるを得なかつた、不肖は斷乎として在鮮內地人も、朝鮮人も、朝鮮經濟發展の見地に於て、一致して共進會を協贊す可きを鼓吹した、特に御用紙京城日報の當時に於ける活動は偉大なるものあり、社長阿部充家君の如きは、寢食を忘れて南船北馬、操觚界にも地方の有志にも接觸し、感情を棄て、帝國的に一致

協力すべきを力說した、其の効空しからず、協賛會は破竹の勢を以て設置せられ、內地人も朝鮮人も一致協力して、共進會を翼賛すべく奔走した、不肖は開會當日祝文を京城新聞に掲げて曰く。

朝鮮共進會を祝す

朝鮮共進會を祝す

天高くして馬肥ゆるの時、施政五年朝鮮共進會は、本月本日大々景氣を以て開會せられたり、回顧すれば昨大正三年當局が、共進會開催を世間に發表するや、世人は擧つて今は其の時期に非ずとして反對したり、何となれば現今の朝鮮は、經濟界の不振其の極に達し、在鮮日本人の思潮は極端に沈靜萎縮して、意氣の振はざること、朝鮮に日本人ありて以來未だ曾て見ざるの奇現象を呈し、加之官民相反目し一致協力を缺ぐの嫌ひあるを以て、此の際に於ける共進會は、其の失敗に終はるべきを憂慮したり

然るに、事實は世人の豫想に反せり、本年に入りて京城及各道の官民は一致協力して協賛會を設立し、我朝鮮共進會をして大成功を博せしめむこ

とに努力せり、之れ我先憂後樂の操觚者が、善良なる輿論を喚起し指導したるに因るは勿論なるも、我有志が私情を放棄して、國家的事業に全力を捧ぐるの美なる心情と、兄弟墻に鬩ぐも、外其の侮りを防ぐゆかしき思想の勃發を狂喜せずむばあらず、蓋し此の共進會の不首尾失敗に終はることあらば、朝鮮に於ける日本人の實力を權衡に試みらるべければなり、是れ朝鮮經營を雙肩に荷ふて努力奮闘しつゝある日本人の忍ぶ所ならむ哉、宜べなり、此の盛會を見たることや、當局の得意有志の面目躍如たるものあるは、吾人衷心より歡喜の情を禁ずる能はず。

それ帝國の青年が、大陸發展に於て其の地盤を培養すべき緊急問題は、朝鮮の經濟的開拓なり、韓國併合より指を屈すれば、春秋僅かに五年、此の短日月の間に於て、朝鮮產業の大進歩大整理は、一に我寺內總督が經國濟民の經綸其の宜しきを得たるに因るは、蓋し多言を要せざるなり、曾て朝鮮の產業は混沌蕪雜幼稚なるものなりき、然るに近々五年に過ぎずして

經濟的地位

其の發達生長せる程度は、吾人の實に意外とする所にして、初めて朝鮮に來り、初めて其の生產物に接するの士は、さまでに感ぜざるは勿論なるも永年朝鮮に在りて、其の進步發展の段階と程度とを、詳かに目擊しつゝある吾人は、今や現在吾人の目前に展開されたる此の生產的善美の發展に、轉だ驚嘆せざるを得ざるなり。

然れども朝鮮は、我日本內地と異なり、鐵道、交通は漸く發展の過渡期に過ぎずして、其の經濟的地位を議すれば、漸く開大活動の素地を築き得たるまでにして、是等の生產品が普ねく市場に活躍するまでには、尙幾多の年月を積まざる可からず、需用は供給と相俟ち、生產は分配を處理するこゝによりて經濟哲學あり、和光の玉は和氏に逢はざれば光りなく、千里の馬も伯樂に逢はざれば伏櫪の己むなきが如く、朝鮮無數の價値物も、我幾多慧敏なる需用者に接せざれば、土塊や糞土と擇ぶなきなり。

而も今回の共進會は、實に我朝鮮の生產が幾多天下の知己に接するの機

會にして、我幾多の實業家が、此の價値を認むるに至りて、初めて共進會最善の目的を貫徹し得たりと謂ふ可し、今や此の生產品を精察吟味せむとする珍客は日鮮內外より京城に集まりつゝあり、大會の新聞記者は朝鮮に包藏せる經濟上の實力及發展の實情を天下に紹介し果れむ、我資本家は安心して投資の覺悟を決し、我實業家は刮目して起業を志し、其の他幾十萬の觀覽者は各々其の觀る所、信ずる所によりて、或は勇進起業を策し、或は絕大なる需用者となりて、直接間接に朝鮮產業の興奮に氣勢を添へむ。

今や西歐の風雲轉だ急にして、益々日本人が鵬翼を擴け、經濟的地盤を鞏固にすべきの秋、我朝鮮共進會が官民協力して、大々人氣を京城に吸收し、而して惹て久しく沈滯鬱屈せる、我人心の奮興せむとする狀態を見て吾人は無限歡喜の情を抑ゆる能はず、茲に吾人は大白を擧げて共進會の開會を祝し、併せて朝鮮產業界の將來を祝福す（大正四年九月）。

開會の當日は、東京より河野廣中翁、後藤新平子、木內重四郎氏等を始めと

團體の觀覽者續々入京す

し、朝野の實業家、日本各地の新聞經營の主腦者一百人、支那より段祺瑞氏等出席し、朝鮮各地よりは官民有志の多數出席し、來會者無慮五萬人と註せられ、さしも廣き景福宮は人の山を築いた、當日の寺內伯は日本晴れの機嫌であつた。

團體の觀覽者は、續々內鮮各地より入京せり、而して其の出品の意外に整頓し、特に內地より來りし一百の新聞記者團は、夫々自己の主宰し經營し編輯せる新聞に特報して、共進會の盛觀を日本全國の讀者に知らしめたり、而して朝鮮の產業が容易ならざる發展を來せるを目擊して、寺內伯の武斷政治が一本調子の軍人政治に非ざるを感謝した。

爾來我政治家の意見も、實業家の意見も、朝鮮の經濟產業の開發に一致し朝鮮を我製造工業の原料地とし、資本投下の價値は充分なりと觀取された、寺內伯は爾來內地人の移住を阻止するなく、座を清め席を譲りて我資本家實

經濟學者は寺內伯に學ぶ所多かつた

業家の渡來を歡迎すと宣言された、政治家の思慮は周密だ、曩に併合當年續々渡來せし內地人を驅逐されたのは、朝鮮人が內地人と伍して、產業上の自由競爭に堪へ能はざるべきを豫想して、若干年間產業上に其の手腕を養成せしめ、活動に競爭に堪へ得る所の準備をなさしめたのだ、果して朝鮮人は產業の競爭に目覺めて來た、我が經濟學者は、朝鮮の產業的活動と競爭の原因勢力が、何れにありしかを寺內伯に學ぶ所は多かつた、之を概括して云へば先づ寺內伯の法治主義が活動して、法律秩序の整頓したること、其の第一部に於て、農藝と技術の進步したること、第二部に於て、拓殖事業の秩序正しく進展せること、第三部に於て、林業の發展、第四部に於て、鑛業の發展的趨勢を示せること、第五部に於て、水產業の發展せる狀況、第六部に於て、工業の發展的素質充分なること、第七部に於て、臨時恩賜事業の活確せること、第八部に於て、敎育の善良に發展し來りたること、第九部に於て、土木交通の意外に進展したること、第十部に於て、經濟の發展異數なること、第

十一部に於て、衛生及慈惠救濟の活動せるは文明國に劣らざること、第十二部に於て、警務及司獄事務の整頓せること、第十三部に於て、美術及考古資料の豐富なること。

共進會に於て、寺內伯が朝鮮統治の成績は、赤裸々に展開された、而して從來朝鮮に於ては、經濟學上不生產的階級と稱せらる、兩班需生に、其の生產物の多額は吸收され、實際の耕作者製作者の手中には皆無であつたが、寺內伯の統治宜しきを得たる結果は、生產的階級は自家の必要を滿たしたる上尙多額の剩餘を有するに至つた、例へば生產者が其の剩餘より得たる金を以て、其の附近に散在せし未墾の土地を開拓せむが爲めの資本に供することを得た、そして彼等は勞働者に從來より多額の高給を拂ふことを得たるを以て被傭者も容易に其の給料の大部分を貯蓄することが出來て、聽て被傭者の階級を脫して企業者の列に加はつたものもある、右の結果として生產者が生產の率は高度に上り、經濟界の奮興するのは當然の歸結であつた、世の經濟學

者等の机上の空論は、寺內伯の實際產業政策上に、學ぶ所は多大であつた。

斯くて朝鮮の經濟界の興奮した、產業上の自由競爭は益々發酵した、特に西歐大戰亂の影響は、內鮮の經濟界に好況を齎らし、農商民の生活程度は著しく向上して、朝鮮の社會は理想的に發展しつ、あつた、寺內伯の得意滿面に溢る、伯は確かに朝鮮統治の成功者だ。

第三十三篇　寺內總督去り長谷川總督來る

——天才的武斷政治家の鐵腕——

——長谷川伯不運の葬を送る晩鐘——

伯の施政に對し筆劍を以て聲援す

寺內伯の武斷政治は、不肖は之を非難すべき理由を持たなかつた、故に世論囂々たりし時に於て、不肖は獨り超然群論の外に立ち、常に伯の施政に對し筆劍を以て聲援した。

施政五年朝鮮共進會に非常の成功を博したる寺內伯は、總督を辭するであらうことは、何人も之を豫期すべき理由があつた、當時母國の政界を大觀すれば、桂公の薨後新政黨の窘縮、長閥の萎縮は大正政變の刮目すべき問題であつた、此の政變は當然寺內伯を中央政界に拉し去るであらう、當時官僚政治家中、桂公に亞いて威望隆々たる者は、實に寺內伯であつた。

幾多の宿將伯の節度を仰ぐ

然れども伯は、政治家としては最も後輩なりしのみならず、軍人としても乃木、大島、長谷川、黒木、奥、佐久間等の諸將に比して遙かに後進に屬し西南戰爭より日清戰爭前後までは、當時の故參中將と同格若くは、其の以下に數へられてゐたが、伯の手腕實力は遂に桂公に代つて、帝國陸軍の實權を掌握し、帝國軍人の中樞に座して、一人の能く抗敵し得る者無く、幾多の宿將は伯の節度を仰ぐの已むなきに至つた、蓋し其の第一の原因は、伯が純長州人なること、其の第二の原因は、長閥の本尊山縣老公の後援に因り、而して又山縣公の後繼者を以て許したること、桂公の推輓を得たるに因るは論を俟たない。

當時長閥の後繼者桂公の薨去に逢ひたる伯は、起つて其の後繼者たらざる可からざる境遇であつた、時恰かも政友會の野田卯太郎君、東洋拓殖會社副總裁と爲りて京城に在り、屢々總督官邸に寺內伯を訪問し、根氣よく伯に內閣組織を勸說した、蓋し野田總裁の意は、當時の山本內閣は增師問題に於て

陸軍側の強硬なる態度に依り、內閣の瓦解を餘儀なくさるゝであらうと考へて居つた、瓦解すれば自然反對黨に政權を奪はるゝの恐れありて、寺內伯を勸說して中間內閣を組織せしめ、寺內伯に倚りて多數黨の憲政會を蹂躙し、寺內伯より圓滿に政權を受授せむことを劃策して居つた、寺內伯も食指動かざるに非ず、遂に斷然上京し、山本內閣の瓦解に依りて、大命は寺內伯に降下するの順序となり、伯は朝鮮總督を辭して、長谷川大將を後任總督に推薦し、內閣を組織した、政友會は寺內內閣の庇護に依りて、果して多數黨の憲政會を蹂躙した。

寺內伯總督を辭し長谷川伯を推薦す

是より先、長谷川伯の朝鮮總督として來任せらるゝや、朝鮮統治の政治政策に何等かの變更を見るであらうと世人は豫期して居つた、寺內伯の武斷政治を以て、假りに朝鮮統治の第一期とせば、長谷川伯は第二期の陣頭に立ちたるものである、我朝鮮統治が徹頭徹尾武斷主義の威力を必要とするや否やは、世の識者は疑問として居つた、寺內伯は決して之を知らざりし人に非ず

只文化政治を斷行するの行程時代に於て、其の威力を必要としたのであつた若し寺內伯の武斷主義を緩めたる爲め、朝鮮人に不穩の擧あらば、軍司令部もあれば、師團も增設されてある、憲兵司令部もある、何も慮する所はない然るに長谷川伯は茫再寺內伯の武斷政治を踏襲した、而して文化の利器たる著述出版より、新聞雜誌の發行に至るまで、十把一束して之を制限禁止し、朝鮮人のみならず、內地人も餘儀なく沈默し、志士は朝鮮を去り、文士は踏晦した。

寺內伯が七年間の武斷政治は、朝鮮の社會を整理し、產業開發の秩序を完全に整へた、而して朝鮮人は羊の如く柔順にして、產業自由競爭の社會に徐々と覺醒して來た、凡そ政治の要は民をして悅服せしめ、其の正業に奮勵せしむるにある、長谷川伯は今や牧民の士に何等かの計策がなくては叶はぬ、治國平天下の政術に於て、一新の機運を迎へねばならぬ、而も伯は依然として無政策無政術であつた。

禁酒會員の說を待たずして明瞭

譬へば親が其の子を敎育せしむる爲めには、寬大のみにても宜しからず、叱る時には大に叱らなければならぬ、然れども年中叱り詰めに叱り續けば、其の結果は如何、子供の旺盛なる精神、血氣の伸びんとする靑年、時には飛びもし跳ねもすべし、之を煩はしとして叱撻のみを事とせば、滿足なる人物は到底得らるべくもない、煙草の衛生に害あることは、小學生徒も之を知て居る、酒が健康を傷ふことも、禁酒會員の說を待たずして明瞭である、煙草は衛生に害あり、故に我は汝の手より汝のパイプを奪ひて、之を拋棄せん、酒は人の健康を傷ふが故に、汝の手より汝の盃を奪ふて之を粉碎せん、之れ正義なり、之れ人道なり、汝の不平は明かに之れ不正義なり、人道に悖るものなりと云ふに至つては、何人も其の政治の單調暴戾にして、沒人情なるに驚かされるであらう。

元來天下を治むるに、司法の秋官が罪囚に臨むが如き態度を以てするは、野蠻時代の事にして、朝鮮は既に寺內伯が一氣呵成的七年の統治に依りて、

年と共に舊朝鮮に戀愛執着

文化の曙光は夙に認められて居る、長谷川伯は漫然として遂に時代を達觀することが出來なかつた、寺內伯の朝鮮統治は誠心眞劍であつた、革新と整理の迅速なること、遊惰なる鮮民は目を廻はし、經國濟民の上に光る寺內伯の目は、彼等をして努力の圈內に走らざる可からざるを餘儀なくせしめ、煙管をくわへて之を批評するの隙さへなかつた。

小人閑居して不善を爲すと、長谷川伯の無緊張にして氣慨なき統治は、地方官の倦怠と共に逆轉し始めた、朝鮮人は年と共に舊朝鮮に戀愛執着し、寺內伯が鮮民を保護し敎育し、奮勵心を喚發し來りし善政も、鮮人民心の弛緩を招きしことに於て、漸く總督政治に離反の趨勢を馴致しつゝあつた、朝鮮の統治は寺內伯の爲人に因るか、國政を統御すること僅かに七年にして、此間寺內伯は一に政治的天才を力として、朝鮮の位置を進め、廢邦と雖も四千年の舊邦、御し難き領土を組織と節度ある政治の下に鐵腕を振ひ、始終天才的武斷政治家として、此くも迅速に新日本建設の大望を實現し得たるは、軍

政治政策の玉條

事上の神算鬼謀に非ずして、新領土の建設的速度の速かりし事であつた、畳へ歸國時代に古今無類の英雄傑士の出で來りしこゝありとしても、寺內伯が經國の上に發揮したるが如き、建設的手腕と速度に優るこゝはない。

然らば朝鮮統治の成否は、總督其の人の爲人に因るのであらうか、帝國が治鮮に對する一定不動の方針、政治政策の玉條を押して行きさへすれば、朝鮮は治め得らるゝと云ふものではあるまい、長谷川總督は、寺內伯の如く天才的武斷政治家でもなく、當世政治家として立つべき手腕をも持たなかつた只漫然と總督の位置に据はりし人であつた、世事總て塞翁が馬たるを免かれず、毅然として澄渕たりし寺內伯の武斷政治は、玆に無力無能の衰態に陷りるべく儉儀なくさるゝに至つた、京城の空に高く聳へて、寺內伯の好運を送し、佛國天主教會の曉鐘は、轉て長谷川伯の不運の葬を送る晩鐘となるであらう、不幸の來るは掌を反へす如く、天が下の形勢は、今や一朝にして一變せむとするの機運を逆迎しつゝあるこゝは、無爲無策なりし長谷川伯には見

地理上の好位置

へなかつた。

地理上の位置が、人間社會の運命を左右する最大勢力たるの例は多しと雖も、最も深く其の然るを感悟せしむるものは、內鮮の地理的關係である、呼べば答へむ內鮮の聯絡は、其の比類なき好位置に依りて內鮮の利害は顯著なるを致した、而も地理上の好位置は、一變して其の効無きに至るこゝなきか日本の利害を集めたる朝鮮は、今や世界大戰の終末期に際して、物情は決して穩當ではなかつた、俄然大正八年三月の朝鮮騷擾は勃發した、不肖は此の朝鮮騷擾時代を論じて、文化政治時代の史談史論に移るであらう。

第三十四篇　朝鮮騷擾と獨立運動

——獨立宣言と騷擾の發端——

——長谷川總督武力を發揮す——

日本は地中海に遠征して聯合軍に後援

是より先、曩古の歐洲大戰亂は五箇年に亘りて、東西世界の強國は直接間接此の大戰に參加し、極東の日本帝國は日英同盟の信義を重んじ、英國を援助して獨逸に開戰せし爲め、獨逸の支那に於て占有せし青島の軍事的及經濟的地盤は、直ちに顚覆せられ、獨逸の極東に於ける勢力は其根底より破壞せられた、而して更に日本は地中海に遠征して、聯合軍に後援し、東洋は此大戰の直接慘禍を見るなくして、平和を維持し得たれるもの、之れ一に日本帝國の軍事行動其宜しきを制したるに因るは、不肖の贅論を俟たざる所である此點に於て我東洋諸民族は、日本帝國に感謝す可き理由がある。

民族自決主義と小邦の奮興

大戰既に終局に近づき、平和の曙光漸次顯著なるに當り、大正七年一月、米國大統領ウィルソン氏は、講和基礎の條件として、十四個條を提唱した、其中に殖民地問題等の主權に關する事項は、民族自決主義に從ひ之を解決する趣旨の一條項があつた、而して大正八年一月中、佛國巴里に於て講和會議は開催せられ、聯合各國の講和委員は四方より巴里に參集し、對獨講和條項を審議せり、米國大統領ウィルソン氏も亦渡佛して、自ら講和會議に列席し其主唱の徹底に努力した、而してウィルソン氏の正義人道論は、世界の強國を煙に捲き、民族自決主義の提唱は、大小戰爭に關係ありし弱邦をして興奮せしめた。

然るに此大戰に何等關係なき朝鮮人は、同しく此民族自決主義に均霑す可きものゝ如く誤解し、往年日韓併合の結果、朝鮮の獨立を失ひしに對し、平素不滿不平を懷ける、天道教主孫秉熙と其教徒の有力なるもの、及び普成高等普通學校長崔麟、天道教道師權東鎭、同吳世昌等は、巴里の講和會議が戰亂の

朝鮮獨立を講和會議の議題となし其承認を得るの手段を講ず

結果處理すると共に、永久平和の爲めに世界の改造を圖り、ウイルソン氏の提唱に係る民族自決主義は、戰亂の巷に在りたる歐洲各小邦の民族のみならず、世界一般の民族にも亦之を應用せらるゝものゝ如く、此機に乘じ朝鮮民族は蹶起し、獨立希望の熾烈なるを表示して、歐米各國の注視を惹起し、且つ米國大統領の意を動かし、朝鮮民族の獨立に關して、ウイルソン氏より之を講和會議の議題とし、其承認を得んとするの手段を講じた、殊に在外朝鮮人中已に獨立運動を試みんが爲め、佛國に渡航する者すらありて、獨立可能の風說は頻々鮮内地に傳播し、又上海在留の朝鮮人は潛かに西鮮地方に出沒して、獨立運動を宣傳した、此に至り京城其他各地の人心漸く動搖し、所在獨立運動勃發の兆を呈し始めた。

孫秉熙等は、此好機逸す可からずとなし、大正八月一月下旬、同志は數回孫秉熙の住所に會合し、朝鮮を日本帝國の羈絆より脫し、一獨立國を形成せんことを協議し、其獨立企圖の手段として、先づ同志を糾合し、朝鮮民族代

獨立請願書は崔麟之を擔當す

表者孫秉熙等の名を以て、朝鮮獨立を宣言し、其宣言書を印刷して、之を朝鮮全道に配布して民衆を煽動し、盛んに朝鮮獨立の示威運動を起し、以て朝鮮民族が如何に獨立を熱望せるかを表示し、一面帝國政府貴衆兩院議院、朝鮮總督及講和會議に列席せる各國の委員に、朝鮮獨立に關する意見書を提出し、又米國大統領ウイルソン氏に宛て、朝鮮獨立に關する盡力を乞ふ旨の請願書を提出することゝ、定め、其實行は普成高等普通學校長崔麟が之を擔當した。

崔麟は二月上旬夜、中央學校長宋鎭禹及同校教師玄相允及歷史專攻者崔南善と共に崔麟の住所に會合し、崔麟より前記の計劃を告くれば、三人は直ちに之に贊同し、其後二三日を經て、崔麟及外三人は、京城桂洞中央學校内宋鎭禹の居室に會合して、熱議したる結果、朴泳孝、尹用求、韓圭卨、金允植等、舊韓國時代の要路に在りし知名の士、及び基督教徒を說ひて同志とし、此等の者及び孫秉熙以下天道教徒中の主要なる者を以て、朝鮮民族代表者と

基督教長老派李寅煥に交渉す

し其名義を以て朝鮮獨立を宣言し、獨立請願意見書及請願書をも、其名義を以て作成せんことを協定し、朴泳孝等知名の人物に對する交渉は、崔麟、崔南善及宋鎭禹の三人之を擔當し、基督敎側に對しては、崔南善其交渉を擔當した。

爾後崔麟外二人は、尹用求等に對し各々交渉を試みたるも、要領を得ずして止んだ　崔南善は基督敎徒に同志を求めんとして、先づ其知己なる、平安北道定州郡基督敎長老派の長老李寅煥等の設立に係る五山學校經營の事に託し、同人の上京を促がし、玄相允は水下町の鄭魯湜の家に赴き、鄭魯湜に對して同人方止宿の平北定州郡の者、金道泰に情を含めて之を定州に特派することゝし、同月八日金道泰は京城を發し、翌九日定州に至れば、李寅煥は宣川に旅行し不在なるを聞知せしを以て、李寅煥の經營する五山學校の敎師朴賢煥に右の事情の傳言を依賴したれば、朴賢煥は特に宣川に急行して之を李寅煥に傳へた。

長老派牧師梁甸伯と乘じ李明龍劉如大

李寅煥は同月十一日急遽上京し、崔南善は官憲の注目を避くる爲め、自身は會見せず、宋鎭禹をして代はりて、桂洞金性洙の別宅に李寅煥と會見せしめた、宋鎭禹は同志の計劃と準備を語りて、基督敎側の參加を求め、且つ同志料合の事を託す、李寅煥は直ちに之を承諾して同志の料合を爲さんとし、即日京城を辭して平安北道宣川に赴き、同月十二日基督敎長老派牧師梁甸伯及長老派李明龍及劉如大、同牧師金秉祚等と出會して、宋鎭禹より聽取せし獨立計劃を告けて贊同を求めければ、三人共同志者たるを承諾し、獨立運動の事に關しては、萬事李寅煥に一任し、且つ必要の書類に押用す可き印章を も之を同人に托し、梁甸伯、李明龍は李寅煥の勸告に依りて、孫秉熙等の獨立運動謀議に參與する爲め上京し、李寅煥は同月十四日平壤に至りて、長老派牧師吉善寅、基督敎監理派牧師申洪植等と面會し、獨立計劃を告けて贊同を求めて之を同志とし、李寅煥の勸告に依り二人共上京し、獨立運動の謀議に參與せしめた。

南監理派牧師　吳華英、牧師　鄭春洙

李寅燁は平北、平南に於て多く同志を募り、二月十七日京城に來りて昭格洞金昇熙方に投宿し、直ちに人を遣はし宋鎭禹に來城の旨を通知した、宋鎭禹は兩度李寅燁を旅宿に訪問したるも、其態度熱心を缺ぎ、其言要領を得ず又交涉の本人たる崔南善は容易に面會せざるを以て、李寅燁は心大ひに之を疑ひ、基督敎長老派側のみにて事を爲さんと考へた。

恰かも中央靑年會幹事朴熙道に遇ひ、朝鮮獨立運動に對し基督敎側の同志と會見せんことを申込たるを以て、李寅燁は直ちに之を諾し、同月二十日夜京城需昌洞の住所に於て、基督敎南監理派牧師吳華英、同牧師鄭春洙、同北監理派監理司吳基善、並に申洪植等と獨立運動の同志者を集め、自ら其席に列して李寅熙と會合し、運動方法に就て協議を凝らし、京城及各地方に基督敎の同志者を求め、此と同時に日本政府に獨立請願書を堤出し、其同志募集に對しては、鄭春洙は元山方面を擔當し、其夜は又別に基督敎長老派咸台永の住所に於て、米國人の經營する京城南大門外セフランス病院の事務員李甲

平壤基督敎書院總務安世桓

長老派牧師玄楯

成、平壤基督敎書院總務安世桓、基督敎長老派助事吳尙根、同牧師玄楯等と同志者を會見し、其翌二月二十一日に至りて、崔南善は李寅燁を其宿舍に訪ひ、相伴ふて崔麟方に赴き、崔麟と會見した、崔麟は李寅燁に謂て曰く、前夜朴熙道方に於て基督敎徒の同志會合し、基督敎側のみにて獨立運動を爲さんとすと聞く、獨立運動は朝鮮民族全體に關する問題なれば、宗敎の異同を問はず、合同す可し貴意如何と。

運動費五千圓基督敎側に貸與せんことを求む

李寅燁は同志と協議して之を決定す可しと答へ、且つ若し合同すことせば相當の運動費を基督敎側に貸與せらる可しと、崔麟は之を諾し即日孫秉熙に對して金五千圓を基督敎側に貸與せんことを求めた、孫秉熙は之を諾し、天道敎大道主朴寅浩及同敎金融觀長盧憲容に其事情を告げ、其金額の支出を求めたれば、二人は異議なく五千圓支出の手續を了し、其翌二十二日金五千圓を崔麟に交付した、之を懷ろにして、李寅燁の宿所に到り、之を同人に交付して基督敎側の運動費とした。

是より先李寅煥は、前日崔麟と會見後、南大門外セフランス病院構内李甲成方に於て、朴熙道、吳基善、吳華永、申洪植、咸台永、京畿道水原郡女學校敎師金世煥、安世桓、玄楯等と會合し、徹宵協議の後、獨立運動に對して天道敎側と合同する可否の問題に關しては、先づ天道敎側の運動方法を確定して後、之を決定す可しと爲し、此解決は李寅煥及咸台永に一任し、獨立請願こ書堤出に對しては、同志者を多數募集して其請願書に署名捺印せしむるこゝし、李甲成を慶尙南道に、金世煥を忠淸南道に派遣し、且つ歐洲に書面を發送する準備の爲め、玄楯を上海に派遣して假政府と內通した。

玄楯を上海に派遣す

基督敎側に於ても此く運動の方法に就て協定しつゝある時、李寅煥は天道敎側より金五千圓の運動費を受取り來れるを以て、咸台永は李寅煥と共に崔麟を訪問して、獨立運動の方法に對し天道敎側の意嚮を確かめんとした、崔麟は基督敎側の計劃の如く、同志多數の連印を俟て請願書を堤出せんとするも、未た十時ならず、然れごも、獨立宣言に對しては天道、基督兩徒合同の

必要を論じ之を勸說した、李寅煥等は之に贊同して、同日吳基善、朴熙道、安世桓等こ咸台永方に會合して熟議し、遂に天道敎側の主張を容れて、獨立宣言を爲すに決し、二月二十四日李寅煥、咸台永は崔麟方に赴き、合同の承諾を正式に通告した。

獨立運動に對し合同成立

茲に於て朝鮮獨立運動に對し、天道敎徒こ基督敎徒の合同は成立し、天道敎側は崔麟を代表者こし、基督敎側は李寅煥、咸台永を代表者こし、之等代表者は數回協議を重ねたる結果、獨立宣言は李太王の國葬の前日、即ち大正八年三月一日午後二時こ定め、太王の國葬に都鄙幾十萬の參觀者の京城に集合するを利用して、獨立萬歲を唱和せしめ、大々的示威運動を開始せんこした。

期に至り孫秉熙を始め天道基督の同志は、パコタ公園に集合し、孫秉熙は獨立宣言書を朗讀するこゝし、其朗讀を了へて後ち多數の印刷物を京城市中に撒布し、又各地方の同志こ一般鮮民に分送し、京城の獨立宣言日時及宣

京城と地方同時日を以て獨立萬歲を唱和す

言書配布の次第を傳達して、京城及地方同日同時刻を以て、獨立萬歲を唱和すること〻し、其宣言書及印刷物の配布は、天道敎側基督敎側各々之を分擔し、又帝國政府及貴衆兩議院に對する書面の提出は、天道敎側之を擔任し、米國大統領及列國講和委員に對する書面の提出は、基督敎側之を擔任した、而して朝鮮民族を代表せる各書面の連名者は、天道敎側基督敎側より各十數名を撰定し、後ち佛敎團體にも獨立運動に參加を求め、其連名にも、參加した。

此くて獨立運動に關する準備は整へられた、○○兹に於て朴熙道、李甲成等は獨立運動實行に對し、學生等の力を藉るを利便こし、延禧專門學校生徒金元璧、曾成法律商業學校生徒康基

學生等の奮起を慫慂す

金元璧中學程度の學生代表者十數名を召集す

德、京城醫學專門學校生徒韓偉健等に會見し、一面孫秉熙等の獨立運動計劃を告げ、而學生等の動靜を探査して暗に其奮起を慫慂し、學生等が別に獨立宣言書を作成して、獨立宣言を爲すを知り、朴熙道は金元璧に對して曰く學生等の獨立運動は中止して、孫秉熙等の獨立運動に參加し、一團こ爲りて大ひに氣勢を擧く可きを勸告すれば、金元璧は之を可こし、康基德、韓偉健其他の學生こ相謀り、共同動作を取ることを承諾した。

此に至り金元璧等は二月二十八日、京城府勝洞禮拜堂の中學程度の代表生徒十數名を召集し、同日康基德は醫學專門學校生徒金成國の手を經て、李甲成より受取りたる獨立宣言書一千五百枚を、學生同志に分配し、翌三月一日午後二時、孫秉熙等がパコタ公園に獨立宣言を爲すに對し之に參加し、且つ同時に京城市內に獨立宣言書を配布して、公衆を煽動することを約した

連名一同は最後の會談を爲して各部署を定めんこし、二月二十八日夜、京城齊洞孫秉熙方に集會し、當夜の協議に於てパコタ公園は、多數の學生集合

獨立宣言の場所

して紛擾を來すを慮かり、急に獨立宣言の場所を京城仁寺洞明月館支店（料亭）に變更し、三月一日午後二時に至るや、獨立宣言書連名者中吉善宙、劉如大、金秉祚、鄭春洙の四名を除き、外二十九名の同志は明月館支店に會合し、獨立宣言書百枚を卓上に置きて、來會者の閲覽に供し、宣言書の朗讀は之を省略して、韓龍雲起立して口を開けば、一同は之を獨立宣言と見做し、萬歳を三唱して食卓に就いた、此報を得たる總督府官憲は、直ちに數十名の

孫秉熙以下同志逮捕

警察官を派して、之を逮捕した。

恰かも同時刻に至り、金元壁、康基德等に煽動せられたる、京城市中、中學程度の學生三四千名は、鍾路通りよりパコタ公園に參集し、一團は德壽宮大漢門前に至りて、韓國獨立萬歳を狂唱し、一團は京城郵便局前、一團は南大門停車場前、一團は義州通り佛蘭西領事館前に至り、一團は昌德宮前に至りて獨立萬歳を唱へ、一團は朝鮮步兵隊前に至りて其營門内に入らんとして禁遏せられ、一團は米國領事館前に至りて萬歳を狂唱し、一團は總督府に往

所在官憲と衝突

かんとして、警察官の爲めに本町に於て拒絶せられた、此間に於て主首魁と目せらるゝ者一百三十餘名逮捕せらるに及び、狂唱怒號の群衆は一時鎭靜に歸した。

騷擾に對し長谷川總督の諭告

爾後各地は一齊に騷擾を惹起し、所在官憲と衝突して流血の慘狀を見るに至り、我が地方の良民は往々獨立宣言の何たるを解せず、附和雷同して不側の禍ひを受けし者少くはなかつた、長谷川總督は、騷擾勃發以來、大に驚き且つ決する所あり、直ちに憲兵司令官に命じて全道を戒嚴せしめ、官憲に抵抗する暴民に對しては、武力を以て之が鎭壓を命じ、一面政府に電請して軍隊の派遣を求め、一般士民に諭告して曰く。

諭　告

曩に故大勳位李太王國葬の執行せらるゝに當り、本總督は庶民相誡め、最も靜肅に敬弔の誠意を表し、苟も輕擧騷擾すべからざる旨を諭告せり、然るに一部不逞の徒の煽動に因り、京城其の他各地に於て群衆の妄動を敢

てするものあるに至りたるは、本總督の遺憾とする所なり　之か言を爲す者或は曰く、朝鮮の獨立は佛國巴里に於ける講和豫備會議に於て、列國の承認する所となれりと、之れ全く根據なき流言にして、素より採るに足らす。

抑半島に於ける帝國の主權か確固不抜にして、永久渝ることなきは言を須るす、併合以來茲に十年、皇澤年と共に普洽し、生命財產の安固、敎育民業の發達、其の著しきものあるは內外の共に認むる所なり、然るに偶ま斯る流言を放ちて衆庶を迷惑するは、自ら爲にする所あるに過きす、之か爲學を廢し業を停め、以て狂奔熱中するが如きことあらば、必す悔を他日に貽すに至らむ、宜しく覺醒する所なかるへからす。

今や內地と朝鮮とは、渾然合體して一國を成し、民衆の大、實力の強、進みては列國と共に聯盟を形成し、以て世界の平和と人文の發展とに貢獻し、退ては隣邦の困厄を救ひ、聯合國たるの義務を完うせむとするの秋に

當り、益々內鮮人間の一致結合を鞏固にし、以て帝國の使命を遂け、中外の信望を樹つるに於て萬遺憾なきを期せさるへからす、古來密接不離の關係を有せる兩者が、晩近益融合の實を擧けつつあるは、事實にして、今回の事たる其の原因する所を究むるに、兩者の間相反目するものありて然るに非らす、彼の常に海外に在りて半島の實情を詳にせす、徒に流言を放ちて同胞を惑はし、以て帝國の靜謐を阻碍せむとする不逞なる徒輩の言說を輕信し、朝鮮と何等關係なき民族自決の語を捉へて妄想を逞しうし、無謀の言動を敢てし、以て笑を列國に招くが如きは最も誡むへき所なり。

今や政府は力を竭して之か鎭靜に努め、非違を敢てする者は一步も假借する所なく嚴重に之を處分しつつあるを以て、近く寢息に歸すへしと雖、民衆も亦能く子弟鄕黨を保導し、苟も各自の本分に違ひ、刑辟に觸るるなからむことを期すへし。（大正八年三月五日）

長谷川總督の再度警告

警告

今や半島の庶政既に緒に就き、治績漸く擧らむとするに際し、偶前月來騷擾各地に勃發して、良民爲に寧居する能はざるの不幸を見るに至りしは本總督の最遺憾とする所なり、本總督は既に二回の諭告を發して、民衆の輕擧妄動を戒め、爾來百方其誤迷を解き、覺醒を促せりと雖、今尙鎭靜に歸せざるのみならず、近時益兇暴を逞うし、或は官憲を襲撃し、或は官公署を破壞し、其の暴狀洵に恕すへからざるものあり、是れ固多數民衆の關知する所ならむや、是に於て本總督は良民の困厄を憂慮し、地方の安寧秩序を維持し、一日も速に各其の業に安せしめむことを念ひ、中央政府に電請して軍隊の派遣を求め、地方の衛戍に當らしめむとす、庶民は須らく官憲の保護に信賴して、業を勵み產を治め、以て治平の慶に浴すべし、夫れ兵を用るて治安を維持せむとするが如きは、素是れ本總督の希はざる所なりと雖、不逞の徒を根絶し、良民を不安の境より救拯せむとせば、亦止むを得ざるなり、苟も多衆聚合して不穩の行動を爲すが如き事あらば、斷乎たる手段を講ずべきを以て、庶民能く此の意を諒し、輕々しく不逞の徒と伍して不測の禍を蒙むることなく、鄕黨相戒め隣保互に謹し、誤て刑辟に觸るるが如きことなきを期すべし。（大正八年四月十日）

長谷川總督武力鎭壓を斷行す

斯くて長谷川總督は、軍隊を動かし、憲兵警察を操縱して、武力鎭壓を斷行した、事情は實に已むを得ない、全鮮に勃發して、一千五百萬の民族は、熱狂的に騷擾し、所在內地人を慘殺し驅逐しつゝあつたが、玆に至り幾何か狂暴の影は沒したが、餘燼は尙未だ濛々として毒焰を吐いて居つた。」

第十五篇　獨立思想の運行

——僧徠上海假政府の盲動——〔一〕

併合當時併合に不平の鮮人、朝鮮を去て滿洲より上海米國に移住し、久しく朝鮮の事情に遠ざかりて、新政後の朝鮮を知らず、動もすれば不逞の行爲を敢てする痴漢も無いではなかつたが、事多くは未然に發覺し、寺內伯は纖毫一擊、其の殘骸をも留めざるまでに取締つた。

然るに、世界的大戰亂後、過激不逞の思想は、疾風枯葉を捲くの勢を以て各國に傳播し、露西亞の如き大帝國一朝にして崩壞し、餘波極東を席捲せむとするの勢を示し、其の思想界は一大變調を帶び來つた、此の時に當り巴里の講和會議に於て、米國大統領ウィルソン氏の民族自決主義を唱論するや、彼等不逞の鮮人は、好機逸す可からずとなし、米國、上海、滿洲の浮浪人先

づ上海に入りて佛租界に集合し、一種の秘密結社を構成し、朝鮮內地の同志と陰謀結托し、巧妙なる手段を以て獨立運動騷擾の煽動を爲した、勿論政府と稱する程の大袈裟のものに非ざるも、彼等が宣傳の便宜上、大韓民國假政府と僭稱して、夢の如き無力無頼の人物等が、不逞の行動を爲す唯一の機關として、之を守護した、上海には當時朝鮮人の在住する者約四百人、彼等の多くは獨立の空名に眩惑せし浮浪の徒にして、宛然上海を密策の根據地とした、彼等は何故に上海に集合したか、其の第一の理由は同所は各國の居留地にして、其の租界は國際上の治外法權地たるを以て、彼等に取りては恰好の安全地帶で、第二の理由は米國在留の浮浪人と、朝鮮內地の同類者と、聯絡を保つ上に於て、最適當の地點であつたからである。

斯くて彼等は上海假政府の名を以て、朝鮮內地の同志に通謀し、騷擾の發頭人たる天道敎主孫秉熙の如き、勿論假政府と氣脈を通じたるものにして盛んに獨立新聞を發行し、又別に米國桑港に於て發行の新韓民報等に、獨立騷

援の煽動文を掲げて、巧みに之を朝鮮内地に送り、其の煽動は非常に成功して、朝鮮人は鼎の湧くが如く、萬歳騒擾は各地に勃發して、所在官憲と衝突し、學生も敎徒も農夫も商人も熱狂奔馳して、日本人を驅逐す可しと狂號し事態益々紛糾するに從ひ、上海假政府の名は、朝鮮内地に異常の雷名を與へて、朝鮮士民の崇拜心は頗る高大し、内外響應して騒擾を濃厚ならしめ以て米國政治家の同情を請ひ、一面在鮮米國宣敎師等の聲援に依り、獨立を達成せむと策動した。

米國政治家の同情を求む

而して朝鮮内地との聯絡を密接にせんとし、安東縣在住の英國人ジーエルショウの經營せし怡隆洋行内に、交通事務局なるものを設置して、交通次長鮮于赫なる者を指揮者とし、巧みに鮮内地の不逞團と聯絡して活動した、然れども彼等の自稱せる假政府は、運動資金の出所無く、窮乏困迫如何ともする能はず、遂に運動資金を朝鮮人に醵出せしむる方法として、敎國義務金なるものを先づ上海在住の朝鮮人に募集したるに、若干の募集金ありて、一時

を瀰縫したるも、之れ素より彼等の幹部の生活費に過ぎず、故に彼等は朝鮮内地の富豪を物色して、資金の賦課を命じ、若し之に應ぜざるものあるときは、脅喝銃殺等の積極手段を用ひ、所謂假政府派遣の不逞漢は、所在に出沒して富豪と良民を艱ましめ、資産階級は前門獨立萬歳を呼號して、後門豺狼の襲來に警戒せざる可からざるの滑稽なる現象を呈した。

彼等は此く部署を定めて行動したるも、其の人物を見れば牧使に非ずんば腐儒、或は舊韓國の廢兵に過ぎず、此くの如きの人物が一團と爲りて、一般朝鮮人の同情と歸向を求めんとするは、實に難しと云ばなければならぬ、故に其内部は二派三派に分れて統一を欠ぎ、加之一面には狂暴無賴の徒の集團たる鐵血團、或は救國冒險團等ありて、最初は民國長呂運亨之が團長たりしも後ち金輩根なる者之に代はり、佈租界に於て爆彈製造に着手し、外國人より其製造法を傳習して、巧みに團員を以て鮮内地に密送したるも、機敏なる警察官憲は其都度之を發見押收し、彼等をして爆彈を行使するの狂暴を逞ふ

のるを得ざらしめた。

上海の不逞團假政府の幹部に於ては、早くも朝鮮人の傳統的弊根たる、一種の系統より來る武斷黨なる積極派と、文治黨なる消極派とを生じ、相爭鬪し相軋轢するに至つた、武斷黨は國務總長李東輝及滿洲總司令官洪範道等にして、文治黨は民國長呂運亨及勞働局總辨安昌浩等にして、李東輝、洪範道等と一致の步調を取る金嘉鎭は大同團武斷黨の首領として、李東輝の國務總理と爲り、洪範道の滿洲地方に若干の勢力を扶植し、同地方の鮮人は殆んど武斷黨の勢力圈にして、洲總司令として發表するや、浦塩及露領、北滿方面より上海に集まる同士頗る多く、爲めに李東輝等の勢力は假政府を左右するの勢ひを生じて來た、文治黨の安昌浩、呂運亨等は武斷黨の專橫を憤り、其勢力を剝がんとするも、金嘉鎭と李東輝等の固き結合は、如何ともする能はず、安昌浩等は遂に文治

武斷黨なる積極派と文治黨なる消極派

李東輝の勢力は假政府を左右するの勢

黨の衰滅を防止するの手段として、武斷主義に迎合するの已むを得ざるに至つた。

武斷黨の主張

武斷黨たる李東輝、洪範道等の主張する所は、露領及北滿地方に散在せる浮浪士に檄し、或は露國過激派と結び、爆彈其他の兇器を用ひて、總督及大官を暗殺し、其の混亂に乘じて武裝の團體を鮮內地に侵入せしめ、面長郡吏を殺して一般の朝鮮人官吏を戰慄せしめ、總督府の施政を妨害し、設備を破壞し、混亂騷擾全土の民心を煽つて、排日思想を助成せしめ、以て帝國の朝鮮統治を放棄せしめんとするも能はずだ。

文治黨の主張

文治黨たる安昌浩及呂運亨等の主張する所は、新聞雜誌或は各種の印刷物を利用し、言論文章に依りて同志の結束を鞏固にし、朝鮮人の凡てに獨立思想を注入し、朝鮮人の目標は獨立に在りと覺悟せしめ、朝鮮人にして、朝鮮獨立の思想を有せざれは朝鮮人に非ずと云へる風潮を養成せしめ、若し獨立

内鮮離反の基礎

著せ動の犠牲をしずれば之を尊敬せしむるの風を助運生長め、一面朝鮮内地の鮮人に朝鮮本位の教育を奨勵して、内鮮離反の基礎を速成せしめ、徐ろに民族集團の力を以て、帝國の治鮮に反對し、米國の強大義俠に依賴して、朝鮮を日本より分離せんこ主張するもの即ち文治黨であつた。

而して文治黨の論ずる所は、日本は日清戰爭に於て支那を屈伏せしめ、日露戰爭に於て露國を驅逐し、支那は現に草澤の英雄四百餘州に割據して、國内を統一し内政を整頓する能はず、露國は殆んご崩壞に近し、極東の天地に朝鮮が獨立したりこて、日本を脅威し日本の存在を危ふするが如きは、萬々之有るの理無し、然らば朝鮮の獨立は遂に許されざる可からずこ、然るに文治黨の論する所は、輓近日本帝國に於て思想問題は險惡を極め、過激思想や社會主義は滔々こして日本の各階級に浸潤し、日本の革命は遠きに非ずして内部より將に全速力を以て崩壞するに至るであうこ、勿論日本帝國の一部に於て、破壞主義盛んに流行しつつあるも、之れ單に資本家こ勞働者この爭鬪

資本家と勞働者の爭鬪

にして、彼のマルクス一派の社會主義が一時歡迎せられたる變態的現象であつて、一旦國家皇室の問題に及べば、冷靜なる判斷を以て自ら警戒し、自ら覺醒す、之を露國過激派の跋扈より來る崩壞こ、較論せんこするに至つては日本人こ日本の國情を知らさる者の妄想である。

權力を爭ひ財力を奪占す

徹々たる夢の如き假政府武斷黨の手段は、蟷螂の斧に等しく、文治黨の手段は兒戲のみ、然れごも彼等の目標こする所は朝鮮の獨立である、然らば其計策に就ては少なくも一致の步調を以て、其の目標こする大問題に邁進せなければならぬ、而も彼等は武斷文治の兩黨に分れて、相爭鬪し、相搏擊し、權力を爭ひ財力を奪占して自黨の獨占舞臺こ爲さんこするの狀は、之を大きく警ふれば前韓の政爭史を繰り返しつゝあつた、此くの如くにして獨立を呼號するここの無意味にして、假令日本帝國が獨立を許容するここありこしても、彼等は再び朝鮮の邦　を禿にし、生民を誅求して塗炭の苦に泣かしめ、結局帝國の救濟を請ふの外無きに至るであらう、韓末の狀態を

民族的一大觀念

前後の策茫然たり

回想すれば、現在朝鮮人の父老は殆んど其の苦楚慘怛の情を知悉してゐる到底朝鮮が獨立獨歩の不可能なる所以を明瞭に了解してゐる、故に寸鐵に血塗らずして韓國は併合せられた、之れ實に朝鮮民が、前韓の國民的紊亂より見切りを着けたる、族的一大觀念であつた。

當時韓皇の詔勅に見よ。

朕菲德にして艱難なる業を承け、臨御以來今日に至る迄、維新の政令に關し函圖を備試し、力を用ゆる未た曾て　らすんはあらすと雖も、由來積弱痼を爲し、疲弊極所に至る、挽回の望無し、晝夜憂慮善後の策茫然たり茲に至り支離益々甚たしければ自ら終局收拾し　さるに至る、寧ろ大任を人に托し完全なる方法と革新を以て、功效を奏せしむるに如かず、故に懼然内に顧み、確然自ら斷し、茲に韓國の統治權を、從前より親信畏敬したる隣國大日本天皇陛下に讓與し、外東洋の平和を鞏固にし、内憊饑の民生を保全せんとす。云々

庶民備饑の慘狀は眼前に髣髴

良民を惡はし富豪を脅かす

實に韓末内政紊亂の狀と、庶民憊饑の慘狀は實に眼前に髣髴してゐるではないか、韓皇の詔勅は決して誣言ではない、一萬四千方哩の斯土、一千五百萬の庶民は擧けて之を日本天皇陛下に讓與せられた、是故に我日本天皇陛下は朝鮮の事態に鑑み『韓國を擧けて日本に併合し、以て時勢の要求に應するの己むを得さるものあるを思ひ、茲に永久に韓國を帝國に併合す』と宣せられた、爾來漸く十年、文治德化漸く其の緒に就かんとするの時、獨立の盲動を敢てして騷擾す、之れ素より前韓の虐政を知悉せる庶民の關知せさる所にして、時代の惡思想に浸潤せる青年と、韓國併合に不平の殘黨にして、今や假政府の名の下に權力と利益を爭ひ、黨を分つて相軋り豺狼饑虎の如く、遙かに不逞輩を鮮内地に派し、良民を誘惑し、富豪を脅かして誅求し、暴戾至極であつた。

此に來りて假政府の聲望は頓に鮮民に失墜し、密に運動費を貢送して彼等の遊興費を辨ずる昧者は、朝鮮に殆んど其影を絶たんとした、而して上海假

政府の内部は暗闘爭奪益々甚だしきを致し、金嘉鎭の部下たる大同團武斷派の羅昌憲は、權限爭ひに原因して、假政府内務總長の李東寧及次長李圭洪を毆打して茲に大紛擾を惹起し、假政府は警護の人員及士官生徒を簡んで大同團に押し寄せ、羅昌憲を捕縛せんとしたれども、却つて羅の一派に擊退せられた、茲に於て羅昌憲等大同團の一派は大に憤起して、上海假政府幹部の總辭職を爲さしめんとし、假政府員が運動資金を蒐集して酒色に耽り、甚だしきは一夜に數百金を散して恥ぢさる行動を指摘する印刷物を、各地の朝鮮人に配付せんとせしに、假政府は多數の警護員を派して羅昌憲を逮捕した。

假政府の大紛糾

武斷派の羅昌憲逮捕せらる

頃く僭稱假政府の内幕は、閥爭紊亂當初の氣勢を失ひ、大領領李承晩及金奎植等米國より上海に來り、其善後策に對し安昌浩と協議せしが、假政府維持費の困難なると、青年一派の既に假政府を斷念して米國に去る者多きと、武斷派の頭領李東輝及朴容萬等は吉林方面に去りて、軍政府なるものを組織し所謂親米派たる李承晩、安昌浩、呂運亨と分離し、親露派を以て假政府を改革し、露國過激派と通じて國境方面を襲撃せんとし、温和黨の親米派は何等かの方法を以て、露國過激派と通じて國境方面を襲撃せんとし、温和黨の親米派は何額勢如何とも爲すことは出來なかつた、獨立運動を繼續せんと腐心せしも額勢如何とも爲すことは出來なかつた、思ふに日本帝國の朝鮮策は一定動の方針を以て進み、正々堂々正義人道の上に立脚して、大陸半島の經綸を遂行せんとし、獅子の月明に嘯き、猛虎の深山に行くが如く、目に狐狸の躍るを許さず、一旦激怒せんか百獸の腦は當に破裂すべし、僭稱假政府の旨動の如きに至つては、兒戲に觀過して一槌を加へなかつた。

獅子の月明に嘯き猛虎の深山に行くが如し

第三十六篇　獨立思想の運行

——子爵金允植等の獨立請願——

大正八年三月一日、天道教主孫秉熙等が朝鮮獨立を宣言して騷擾し、僭稱

上海假政府は流言蜚語を放つて煽動するや、蒙昧にして時勢に暗き士民は、民族自決主義が實現して、朝鮮も眞に獨立するに非るやを信ずるものが多かつた、子爵金允植氏も確かに其の一人で當時代は經學院の大提學であつた。

三月二十五日、金允植子は前韓國學部大臣子爵李容植子と連署して、朝鮮獨立請願書を內閣總理大臣に呈し、朝鮮獨立を請願した、不肖は金允植子が年と共に耄碌し、頑冥にして時勢に通ぜざるを惆悵せざるを得ない、金允植子は曾ては併合の贊成者にして、併合は神祖の憲法なりと唱へたこともあつた、故に授爵恩命及恩賜金をも有難く之を頂戴して、聖恩の弘大に感泣したのではなかつたか、子の獨立請願文を見れば。

『○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○』

嗚呼之れ金允植、李容植二子の獨立請願文である、不肖は李朝の鴻儒朝鮮一の儒生の獨立請願文が、必らずや衆人をして驚動感心せしむべき、天下の論文なるべしと想像せしに、支離滅裂取るに足らざる愚劣の小論にして、足一歩を半島の外に出でず、眼光蹐蹴として、一萬四千方里の小乾坤に縮まる、五指交彈の迂愚なる陋態は、金允植子が聞きしに反する腐儒の態度に、大に失望せざるを得ない。

兩班の階級が快々として不平

不肖は、子の獨立請願文を左に批評する。

『政は民を安んずるに有り、政民を安ぜざるは善政に非る也、日韓併合干茲十年、利を興し弊を去り、多少の改良有りと雖も、未だ之を安民と謂ふ可からざる也』

と、安民とは何ぞや、安民の要素は生命財産の安固と、産業の自由である、總督政治以來李朝五百年の弊政は、比年驅逐改善せられ、僅かに十年に過ぎずして、半島社會に盤根錯節せし病根は、悉く芥除せられ總督治下の典章は四民の平等產業の自由、曾て風前の燈火の如くなりし、民衆、生命財產の安固は確實に保障せられたではないか、然れども朝鮮が社會の大改革、大整理大斧鉞の下に立ちたる時、士民をして一併に文明の典章に歸趨せしむるは、治民の當然にして、兩班儒生が各種の特權を失ひたるは勿論、從來犬馬の如くに虐待せられたる常民の階級が、兩班儒生と人權を平等にしたる爲め、兩班の階級が快々として不平なるは、若干時代免かれ能はざる現象にして、這

肩強附會の言論

一犬吠へて萬犬實を傳ふ

般鮮內地騷擾の原動力が、兩班儒生の子弟に多くして、常民は之に雷同した之れ實に兩班儒生が各種の誤解と、金允植子等の如き顧冥にして、時勢に通せざる思想の混和的現象にして、之を以て直ちに安民に非すと云ふは、肩強附會の言論と評せざるを得ない。

「近ごろ獨立の聲街上に一唱して萬衆同聲之に和し、旬日の內全國に波動し、婦人孺子に至る迄亦皆腕を扼して爭ひ奮ひ、前什るれば後繼ぎ死生を顧みず、此れ何故ぞや、意ふに必らず痛みを忍び寃を含み、中に鬱積せるもの有りて敢て發せざるもの、一朝氣を吐くや黃河の水の決するが如く滔々湯々一往不返の勢ひ有り、大同輿情と云ふと雖も、豈天に非ずや耶」と、獨立の聲街上に一唱して、萬衆同聲之に和せしは、之れ一犬虛に吠へて萬犬實を傳ふと同樣である、而して婦人孺子に至る迄、亦皆腕を扼して爭奮し、前什るれば後繼ぎ死生を顧みずとは、之れ實に曲筆舞文の甚だしきものにして、朝鮮の儒生が幾百千年來、誇張的形容の筆に捉はれたる病習である

政治に無理解より來る怨聲

痛みを忍び寃を含み、中に積つて發せざりしと云ふは、不肖は其何事なるを知らず、之れ恐らくは五百年の鬱屈より蘇生したる、常民の論に非ずして、五百年來各種の特權を壟斷し、座して民の膏血を絞りて生活したる、兩班階級が、政治に無理解より來る怨聲たるは瞭かである、之を大同輿情と云ふと雖も天に非す耶と論せるは、儒生の筆劍を弄して世人を欺慢せんとする罪は決して輕からず。

「群動の民其の願ふ所のものは舊有の物を復し、奴隷の恥を免かるゝを得んと欲する也」

と、云へるは老來稚氣何ぞ滿々たるやだ、其愚論笑ふ可きの甚だしきものである、苟くも事理を解して、日韓併合を翼贊したる金允植子等の恥ぢざる所なるか

「聞く逮捕相屬して囹圄充溢し、鞭笞の下鐐鎖の中、往々其死を得ず、又或は武器を使用し積屍相枕らし、情狀慘憺聞くに忍びざる有り、然り而

針小棒大の言

して、列郡騷擾愈々往て愈々甚たし』

ニ、苟くも國憲を紊亂し、治安を妨害する者は、速へて之を囹圄に置き、之を糺査するは國法の不逞を懲らし、罪惡を戒飾する所以である、武器を使用し積屍相枕らすニは、針小棒大の言にして、而も何故に其死傷を出したるや其由を窮明せず、卒然ニして之を聞かば誰か官憲の暴戾を憎まざるものがあらう、然れども此死傷を出す半面を査察せば、警察官の顱蓋骨を粉粹せられて慘殺せられ、憲兵の石に打たれて眼球露出し、警察署の破壞、憲兵派遣所の燒棄等に基因せる官民衝突の殺傷にして、此の如き塲合警官憲兵が武器を使用して持兇器の暴民を制止するは、治安保持上當然の任務にして、日本内地に於て亂民普通の暴行に於てすら、憲掠警官の力のみにて制止する能はざれば、治安の應急手段ニして、軍隊を出動せしむるニ枚擧に遑ない、此かる現象は決して日本のみでない、文明各國に於ても、治安保持上武　を使用し、持兇器の亂民を鎭撫するは決して珍らしくない、然るに金允植子は、騷

書を讀んで悉く之を信ぜば書無きに如かず

嗚呼金允植子時務を知らず

擾の徒の官吏を懲　せしを不問に措き、官吏の暴民を　傷したるをのみ數へ來りて論題ニす、之れ苟くも國事を公論せんニする者の態度であるか。

『昔は孟子齊の宣王に、謂て曰く、之を取て燕民悅べば則ち之を取り、之を取て燕民悅ばずんば則ち取る勿れ、天心の向背は之を民に驗す、民安からずして能く其疆土を保つ者は、古へより之有らざる也、僕等時艱に遭遇し老頑恥無く、既に爵を受け官を併ニ、金允植子老ひたる哉、書を讀んで悉く之を信ぜば書無きに如かず、齊の宣王は封建の諸侯である、孟子か支那大國一諸侯ニの問答を提へ來りて、之を併合の大業に比せんニするは倫に非ず、從來朝鮮の儒生が、往々獨創の意見を立つる能はずして、一に支那文學の糟粕を嘗め、形式に捕はれ章句の末に拘泥して得意ニ爲す、朝鮮文明の勃興せざる所以である、三千年前攻城野戰の諸侯に、人を見て法を說きし片言隻語を拉し來りて、之を一天萬乘聖天子治下に抗論し、騷擾より來る民心の離合集散を以て、直ちに之を分離獨立

理由と爲す、子は時務を知らずして、朝鮮の書生を再ひ困極に導かんと策した、不肖は朝鮮儒生の昏々として長へに覺醒するの機無きを憐憫に堪へないと而して朝鮮儒生の時勢に對する昏冥は、朝鮮の思想問題中、眞に不肖等憂慮に堪へざる所である。

舊思想と新思想の衝突の期

儒生の舊思想と新敎育を受けたる靑年の新思想は、久しからずして衝突の期來る可く、舊思想の儒敎の感化が、朝鮮の社會に普及浸潤せる程度の甚大なるだけ、朝鮮士民の思想の頑冥にして、形式的なるに驚くの外ない、不肖は朝鮮人社會より此かる儒敎の殘骸を掃めつゝある忌む可き思想を僕滅して少なくも新日本の新思想と、新文明に順應せしむるの施設の準備を要求し、我內鮮の言論界に此かる問題の瀕々として立論せられんことを期待するものである。

韓國亡滅の因は卽ちそれである

金允植子は「民安からずして、能く其疆土を保つ者は、古へより之有らざるなりと」云つてゐるが、之れ他事に非ず、韓國亡滅の因は卽ちそれである

又「僕等は時艱に遭ひ老頑無耻、併合の初めに既に爵を受け官を拜す、而して革面久矣」と何ぞ其言の卑屈にして、儒者の態度の醜なるやだ、日韓併合を以て極東の趨勢と日韓の情勢より論じ、不可なる點有りたらんには、何故に當時堂々論議して可否を士民に問はざるや、一進會長李容九の堂々たる合邦論ありしも、當時一人の儒生政客の併合を否とする大論を發見し得ざりしに非ずや、金允植子は李容九等及一百萬會と廷臣併合贊成の大勢に壓せられ、革面して併合を翼贊したりや、子の卑屈笑ふべきの甚だしきでないか、加之爵を受け官を拜し、剩へ數萬の恩賜金を拜領し、而して經學院大提學なる儒林最高の府に踞し、衣冠束帶翩翻として儒林の風上に往來したるは、不肖は子の卑屈にして陋劣、其の爲性にして子らしからざる態度に慊焉なき能はず。

準備して併合を翼贊したりや

案外陋劣卑屈の人物

金允植子は實に案外陋劣卑屈の人物であつた、苟くも書を讀んで鴻儒の名を荷ふ者、果して革面此の如しとせば、滔々たる朝鮮人眞に革面の士民なら

ざるはないであらう、若し之を然りとせば、帝國の總督政治は、朝鮮統治根本方針に於て、幾何の成績を擧げ與ふや否やは實に疑問であらねばならぬ、然らば不肖の內鮮人同化同榮の筆鋒は、速かに之を抛棄して、他論に轉換せざる可からざる乎、詮し來れは子の獨立請願書は、正當なる理由無きと共に何等の價値をも發見することは出來ない、小學生徒も恐らくは子の文を見て唾棄す可し、而も子は之を帝國の宰相に提出して恥ちざるに至つては、子は既に儒家的道德の魔痺して、落魄革面の眞に一朝夕に非るを知ることが出來る、帝國は斷して朝鮮の獨立を許容す可きに非ずと雖も、男子苟くも起つて國憲を侵犯し、獨立を請願すとせば、何故に堂々帝國宰相をして驚心せしむるの大論議を爲さゞるや、朝鮮士民をして首肯し快哉（クロッチー）を叫はしむるの大言論を爲さゞるや、半文の價値無き請願書を堤出して、笑柄を千載に殘し、朝鮮識者の面上に泥土を塗つた、嗚呼朝鮮儒林の大頭領、金允植の名此に來つて浮雲の如し。

儒家的道德の魔痺

半文の價値無き請願書

第三十七篇　騷擾に對する見解の相違

——原首相輿論に及ぼす影響を憂慮す——

——長谷川總督騷擾の責を負ふて辭職——

——朝鮮民族の性格に微妙の變化——

大正八年三月、朝鮮騷擾の勃發するや、我政府も朝鮮總督府も大に狼狽した、時に寺內伯は內閣總理を辭して閑地に在り、朝鮮騷擾の容易ならず、剩へ騷擾の罪を武斷政治に歸するの輿論、內鮮各地に行はるゝを見て、寺內伯は大に怒り、直ちに長谷川總督を勳ましして斷乎たる處置に出で、鯉を囘らさずして武斷主義を發揮せよと電命した。

朝鮮在住の內地人は、長谷川伯の無治主義に憂慮して居る際とて、寺內伯が再たび起て朝鮮總督の印綬を帶び、朝鮮騷擾を一氣に鎭壓せむことを希望

長谷川伯總督を訪ひ山縣政務總監優柔不斷

するの聲は、各地に徘徊した、寺内伯は當時病床に在り、鮮人の叛虐行爲と忘恩敗德の行爲に、黙なからす憤慨された、が騷擾は全鮮に蔓延し、朝鮮獨立萬歳の聲は街衢に充ちた。

朝鮮人の心理は、朝鮮人よく之を知る、前農商工部大臣宋秉畯伯も、前總理大臣李完用侯も、交々長谷川總督を訪問して、一氣に之を壓迫すべきを獻言した、然れども長谷川伯は事毎に擾宜を誤まり、山縣政務總監は優柔不斷にして、逡巡躊躇せる間に、騷擾は一瀉千里の勢を逞ふした、長谷川伯が寺内伯に促がされて、日本の出兵を要求し、斷乎たる手段に出でたるときは、既に立晩れの感があつた。

此の時に當り、四周諸外國、特に米國の視線は逸早く朝鮮騷擾に燿やき來り、殆んど監視的態度を取つた、故に我政府は歐米の輿論に及ぼす影響を憂慮して、武斷的處置に出るを好まなかつた、宋秉畯は我要路の士が、朝鮮人を治むる政術の迂闊を冷笑し、直ちに上京して原首相を訪問し、朝鮮統治に

我國權に對する侮辱

關して種々意見を交換し、最後に宋秉畯は。

「僕に政務總監の椅子を與へられたならば、一箇月を出でずして騷擾を鎭壓して御覽に入れますが、何ふでせうか」

と云へば、原首相は。

「朝鮮は今や日本帝國の一部にして、朝鮮人は日本帝國の朝鮮人である、國憲を紊亂し、國法を侵犯するは、我國權に對する侮辱である、それに對しては我法權が動くのであるから、暴徒を鎭壓するに積極的に出で、武力を發揮することは宜しくない」

と答へたので、宋秉畯は帝國の宰相必らず朝鮮を罹治に陷るべしと冷笑し、去て寺内伯を病床に見舞ひ、種々時局に對する意見を交換し、滯京一箇月にして歸鮮した、寺内伯の意見は勿論李完用侯宋秉畯伯等と一致して居る、而も原首相は、長谷川總督が武斷的の鋒鋩を發揮するを制し、官憲に反抗し、官衙を襲撃し、内地人に危害を加へたる暴徒を膺懲し、之を檢束するに止め、

米國の背任

可及的温和なる手段を以て、騷擾を鎭撫せむことを總督に電照した。

然れども、朝鮮の事情を知悉し、朝鮮の民族性を知れる識者は、何人も武斷主義の威壓を要望した、若し此の騷擾に處するに、文弱政治家の文化主義に出でむか、容易に騷擾を鎭定し能はざるのみならず、朝鮮統治の禍根を將來に殘すであらうことを極論した、當時天下の形勢を大觀すれば、歐洲大戰後、時勢は總て改造の機運を妊み、世界の人心は甚だしき不安動搖の狀を呈し來り、殊に過激思想を有する過激派の勢力は侮る可からざるものありて、既に歐洲戰亂中に其惡逆なる鋒鋩は露國に顯現し、大露帝國は疾風枯葉を掩くの勢を以て風靡せられ、一朝にして土崩瓦解した、此れ實に改造に非ずして破壞である、破壞的惡逆は人道の敵にして、文明の罪惡である、故に當時聯合諸强國は、兵力を以て之を鎭壓せんと決議し、日米兩國其選に當りて露國に出兵し、過激派を討伐して秩序治安を保ちたるも、日米の共同出兵は米國の背任撤兵に依りて權衡を失ひ、日本も遂に兵を撤し、只た在留日本人保

過激派は不平の結晶

宣傳の魔手

護の爲め、若干の兵力を駐屯せしむるに過ぎなかつたので、過激思想は西歐に蔓延し、極東に走りて破壞を逞ふしたのである。

元來露國の過激派なるものは、久しき間其專制治下に苦みたる不平の結晶にして、彼等は社會の改良を學理的に研究し、其精神は强固にして、相當學識と人格有る者之に加盟せるも、其大部分は勞働者と浪遊者にして、彼等は社會改良の美名の下に財を富者に奪ひ、中產階級を脅かした、然れども彼等の主張が、現代の社會組織に於ては、比較的下級多數の人心に入り易く、殊に朝鮮の如く思想の動搖せる社會に於ては、其騷擾に乘じて巧妙に宣傳の魔手を伸さんか、朝鮮の社會をして一層の混亂を來さしめ、我朝鮮民族の純朴なる共同生活は、其根底より破壞せられ、勞働者無資產者をして、資產家、中產階級と鬪はしめ、以て共產主義を鼓吹し、秩序を以て進步しつゝある朝鮮の文化は、直ちに蹂躙せられ、資產家、中產階級は生命財產の安固を失ひ、良民は饑餓に陷り、恰かも露國の狀態と擇ぶ無きに至るであらう。

過激思想朝鮮を窺視す

父子相欺瞞す

然るに朝鮮が獨立騷擾の混亂に乘じ、過激思想も亦　々國境を踰へて朝鮮を窺視し、勞働者浪遊者にありては、著しく此思想に浸潤せる形跡ありて、勞働者對資本家の問題は、兎角に圓滿和衷を缺ぎ、同盟罷業と爲り作業妨害と爲り、其他一般社會に於ては青年の風潮著しく惡化し、父子相欺瞞し、兄弟利を法庭に爭ひ、孝子影を沒して、貞婦窮途に泣き、階級鬪爭を必然とする「マルクス」の過激なる思想は、漸次朝鮮に波及襲來しつつあつた。

按ずるに、朝鮮は併合に依りて、新政以來改造せられたる社會である、露國の革命的改造とは同日の談ではない、朝鮮騷擾は此の意味に於て即ち破壞的惡逆だ、惡逆は人道の敵にして文明の罪惡である、文明の罪惡を膺懲せむ爲めには、日米は兵を露國に動かしたことさへある、朝鮮騷擾に對し、若干武斷主義を發揮することに何の遠慮があらう、之を極論すれば、自國內の內亂ではないか。

原首相や東京の政治家の騷擾觀は、大體に於て寺內伯が武斷政治の反感に

朝鮮統治の一大恨事

原因せりと解して居つた、東京の政治者流は、それほど朝鮮の事情に迂濶である、當時若し寺內伯健康にして、再び總督として來任ささてゐたら、伯が倭城台より睨みを利かしただけでも、騷擾は踵を回らず鎭定したであらう、斷乎として此の騷擾を鎭定した曉、若干年間を隔て、懷柔政治が行はるゝならば、朝鮮は決して難治に陷らなくとも濟む、此の機微を洞觀することは能はざりしことは、我朝鮮統治の一大恨事であらねばならぬ。

長谷川總督は、俄然窮地に陷つてしまつた、兵を動かし憲兵警察を操縱し地方官に積極臨機の處置を取れて雷命した其の墨痕乾かざるに、武斷主義の發揮は見合せよ、壓迫政治に出るなと改令した、何んと云ふブザマな話か、長谷川總督は威信を失墜することゝ夥だしい、遂に伯は騷擾の結末をも付くる能はずして、辭表を捧呈するの已むを得ざるに至つた、不肖等長谷川總督の心事を忖度すれば、實際氣の毒ではあるが、之れ伯が無治主義の禍ひにして確乎不拔の識見を以て機宜の處置を取る能はざりしことが、伯の失敗であつ

何と云ふ慘めな姿だ

た。

嗚呼寺內伯が、六七年間寢食を忘れて、孜々汲々として統治に一點の陰影を留めなかつた朝鮮は、長谷川總督に至りて一朝にして瓦礫の如くに蹂躙されてしまつた、何ぞ云ふ慘めな姿だ、此の機宜の處置を失せる朝鮮統治の政治政策は、果して如何に變更するであらうか。

之を要するに、朝鮮騷擾は最初は急激なる一時的衝動、若くは痙攣的獨立熱の浮動に過ぎざりしが、當時の帝國政府及朝鮮總督が、機宜の處置を誤まりし結果、獨立思想、祖國回復思想は、永續的に且つ恒久不變にして、朝鮮民族精神の現實なる顯著と見ることに躊躇しない、斯くて朝鮮民族の輿論は逐年祖國回復論に變更されて行く、嗚呼朝鮮民族の內面を流るゝ潮流は、愈かに全民族の性格に微妙の變化を與ゆるであらう。

第三十八篇　武斷政治結論

——遊牧的狀態の脫却と經濟的成功——

——朝鮮人生活の向上と新思潮——

——朝鮮民族智能的發展力の破壞——

顧ふに、武斷政治十年間は、恐らく朝鮮統治上最も重要なる時代であつた朝鮮は從來極度に貧弱なりし爲め、朝鮮民族の眞の進步發達を促がすことゝ能はず、其の思想も其の行爲も、悉く日常の衣食問題に吸收され、終日營々として食ふ爲に働かざる可からざる民族に、新思潮の湧生し　る道理がない、獨創的若くは高尙なる智能事業、賞揚すべき藝術上の思想をも、懷抱せんことは望み難かつた。

古へより貧乏なる遊牧的民族の社會に於て、文化に達したる實例は決して

無い、よし多少の進歩を爲し、實際の遊牧的狀態を脫却したりとするも、尙目前の衣食の途に汲々として餘力を存ぜざりし民族は、居然として進歩し發展することは出來ない、其の事實は自明にして例證するまでもないが、前韓時代の朝鮮民族は實に左樣であつた。

永久智能上に無力無能

彼等は併合前、兩班階級の壓迫と、小數貴族の富裕者が、知能的に進歩したる以外、一般の生民は地方官の苛欽と誅求に因りて萎縮し、其の荒廢せられたる經濟的地盤の上に、遊牧顚轉して生命の安處さへ記憶に保存せず、小作人や勞働者奴隷が、汗に心を勞する必要なき上流社會以外の彼等は、永久智能上に無力無能であらなければならなかつた。

按ずるに、朝鮮は古代に於て、民族的に文化を完全にした歷史がある、世の朝鮮史を讀むもの往々にして、廣大なる成功の明證に逢着するであらう、更に一歩を進めて不朽文化の古跡を觀たる旅人は、其の想像を眩遠されざるものはないであらう、是等は朝鮮史上に不朽の芳名は殘留して居るには相違

朝鮮民族が勃興の機運を失ひし所以

ないが、飜つて考ふれば此の民族の智能的成功が、經濟的進歩と甚だしく疎隔して、殆んど相伴はざるに驚かされるであらう、勃興國民の發達の歷史を觀れば、一として物質的成功の徑路に走らざるものはない。

經濟的成功を收めし諸國の勃興史は、古今皆其の軌を一にしてゐる、或は人種を異にせるも、或は時代を異にせるも、殆んど絶へず同一の現象を繰り返へしてゐる、朝鮮民族が勃興の機運を失つたのも他に種々の原因はありとしても、經濟的成功を收め得なかつたことが、有力なる原因であらねばならぬ。

寺內伯は、朝鮮を文化せむとせば、朝鮮人に經濟的成功の途を開くに如かずと考へ、先づ土地制度を確立して、土地愛護の觀念を與へ、產業上の自由競爭主義によりて、朝鮮民族を富ましめむとした、即ち寺內伯は朝鮮民族功業の中心を經濟と產業に置いた、智能的成功を後にして、物質的成功を先にせむことを經緯された、今農商殖業水產業等の實績に依りて調査すれば。

農業の整理と改善には、寺內伯の最も苦心せし所にして、大正六年度に於ける當局の農業調査に依れば、併合當年より大正六年度までに、水田に於て三十萬町步、畑地に於て約四十萬町步、合計七十萬町步を增耕し、併合當時は收穫高米の八百萬石は、大正六年度に於て、一千二百七十餘萬石を收穫し此の增收實に四百七十餘萬石である、而も此の增收は荒蕪地の開拓より出でし增收に非ずして、其の主なる原因は種子の改良、耕作法の改善等其の宜しきを得たる故である。

農事改良を促進したる原動力

而して之が改善を促進したる原動力は、當局の補助奬勵の與つて力有るべきは贅言を要ずまい、其の農事改良機關の直屬官衙としては、勸業模範場ありて、本場を京畿道水原に、支場又は出張所を數箇所に設置し、京畿道を除ける各道には種苗場を開設して、種苗を農民に供給し、農具を貸與し、試驗調査を行ひ、講習講話實地傳習を爲さしめ、或は農林學校を設け、加之公立普通學校には、成るべく簡易商業學校を附屬して、農事敎育を施さしめ、各

道府郡には專門學校技術員を配置して、指導の仕に當らしめ、各道には別に恩賜授產場を設け、東洋拓殖會社の農場等あり、彼此相俟て朝鮮農業は非常の發展を遂けた。

棉花栽培の擴大

故に從來八百萬石を出でざりし年產額は、寺內伯の在任中に於て、一千二百七十餘萬石に增收した、特に世人の注目に値するものは、棉花栽培の擴大せしことである、併合當時は年產額二百萬貫內外に過ぎざりしもの、大正五年度には約七百萬貫に達し、其の輸移出額は百七十五萬圓に上つた、日本內地に於ては、從來米棉及印度棉を輸入して、盛んに正貨を海外に流出した、而も朝鮮棉作事業の、此くの如く盛況を呈し來りしは、此の弊を妨壓するの勢ひ顯著であるのみならず、朝鮮棉の此くの如く異常の發展を爲し來りしは、帝國の國家經濟に好影響を及ぼしつゝ、あることゝ、頗る甚大なるものあることを忘却することは出來ない。

此の他煙草の年產額は、大正六年度に於て、三百五十一萬貫、作付反別一

萬三千町歩と註せられ、英米トラストを朝鮮より驅逐した、養蠶事業に於ては、併合當時までは殆むど見るべきものなかりしが、同年には既に一萬五千町歩の桑園に、七萬一千餘石の收繭あり、從來朝鮮人の輸入の巨額を出せし支那絹の輸入は、着々防遏せられ、朝鮮の經濟狀態は著しく緩和し發展した。

商品としては不利益の待遇

商業に付て之を見れば、從來朝鮮の物産は總ての種類を通じ、其の品質觀る亂雜にして、剩へ統一を缺ぎ、商品としては常に甚だしき不利益の待遇を受けつゝありしは遺憾なりしが、當局は商業上の調査に付ては、釜山、仁川元山、京城の各地を中心とし、其の商勢範圍地域の商工業調査を主とし、以て內鮮商工業者の參考に資し、其の改良發達の資料を供給し、且つ當局が產業自由競爭主義と、其の奬勵保護の結果、其の商業の進步發展と共に、販路未だ定まらざる特種物產の產出するもの、漸次增加するに伴ひ、之をして適當の販路を得せしむるに斡旋し、或は商品陳列館に陳列販賣せしめ、種々な

朝鮮產品に對する海外需用の增進

る苦心方法の下に其の發展進步を策劃した、故に大正二年輸移出貿易額二千萬圓に過ぎざりしもの、大正五年度には五千七百餘萬圓に上り、僅かに四箇年にして二千六百餘萬圓を激增した。

斯くの如きは朝鮮に於ける產業の逐年異常の發展を爲し、又物價騰貴の爲め自然通關價額の增大を來したること、素より有力なる事由たるを失はずと雖も、朝鮮產品に對する海外需用の增進、內地に於ける事業の勃興及市民の活躍、支那市場に於ける外國品の輸入減退等に依り、朝鮮產品の輸出夥しざる增加を告げた、又輸移入貿易は大正五年に於ては、總額七千四百餘萬圓に達し、大正二年に比し、二百八十七萬圓を增加するに至つた、斯くの如く輸移入貿易の增加せしは、主として戰時中內鮮財界の好況に因るは勿論なるも、一般產業の發展に依る朝鮮農工鑛業水產業等の勃興の、著しきものありしに因ること、も、蓋し明白なる事實である。

鑛業に付て之を見れば、舊韓國時代に於ては、鑛業行政に關し、何等準據

すべき法規なく、鑛業の許否を爲すべき職司も亦明確ならずして、中央又は地方官憲は任意に鑛業の許可を與へ、爲めに同一の鑛山地に對し、前後數人の權利者を生じたること、其の例稀れなりとせず、又其の事業に對し濫りに課稅し、又は擅まに許可を取消す等の爲め、鑛業經營者の權利極めて不安固にして、到底堅實なる事業の發展は望まれなかつた。

外人には鑛業權を許さず

而して外國人には、一切鑛業に關する經營を許さず、朝鮮人が若し外國人と鑛業上に付契約を爲すが如きことあれば、忽ち其の許可を取消し、且つ嚴罰を加へられたが、日淸戰後外國の要求は急にして、日英米獨の各國民に、一箇所宛の鑛山採掘權を許可し、後ち伊佛兩國人にも之を特許した、日韓新協約に依り、統監府設置後、統監伊藤公は、朝鮮の鑛業を發展せしむるには先づ鑛業行政の刷新を急務と爲し、舊韓國政府に勸告して、新に鑛業に關する法令を發布せしめ、日本人官吏を招聘して其の局に當らしめた、當時宮內府は頻りに有望なる鑛山を選擇して、帝室有と爲し、徒らに將來の收入を夢

想して、之を探堀利用するの途を講ぜず、徃々奸邪の徒有りて巧言を逞むる時は、容易に之を聽きて濫りに廣大なる特權を付與し、他年の禍根を殘すを悟らざる狀態であつた、故に明治四十年八月に至り其の全部を國有に移屬した。

寺內伯は、朝鮮鑛業の大に有望なるを認め、始政の劈頭に於て新鑛業令を制定し、一層鑛業權者の保護を確實にし、且つ其の監督を周到にし、一面地質鑛床の調査を爲さしめ、朝鮮鑛業の價値の大體を一般に闡明して、企業家の參考に資するの外、京城工業專門學校に鑛山課を新設し、又民間製鍊所の設置を奬勵し、又鑛山の經營は比較的豐富なる資本と、技能とを要するを以て引續き內地大鑛業家の經營を勸迎し、以て堅實なる鑛業の發展を期待した。

而して一面に於ては、事業開始の初年度には、平安北道の北部、平安南道の西半部、黃海道の西部、咸鏡南道の南部を、大正元年度には、平安北道南部及西部、平安南道の東半部、咸鏡南道の中部を、大正三年度には、平安北

地質及鑛床の調査

道の殘部、黃海道の東部、咸鏡南道の北部、咸鏡北道の一圓を、大正三年度には、京畿道及江原道一圓を、大正四年度には忠淸北道の大部及慶尙北道一圓を、大正五年度には忠淸北道の殘部、慶尙南道及全羅北道一圓の調査を爲し、以て朝鮮全道の概査を終了し、而して大正六年度には、一部調査未了の地方及調査後新に發見せられたる重要鑛床に就き、補足調査を行つた。

斯くの如く當局は、銳意熱心地質及鑛床の調査を終了し、之を發表したる結果、朝鮮の鑛業は大正七八年に至りて俄然として勃興し、驚くべき勢を以て發展した、鑛業經濟の發展は、寺內伯が其の準備として六箇年に亘りて、地質と鑛床を調査し得たる、大なる賜であらねばならぬ。

水產業に就て之を見れば、朝鮮は沿海線の延長約六千餘里に達し　其の間魚介海藻に富むと雖も、水產業は尙幼稚の域を脫せざりしを以て、併合後當局は其の發展を圖らむ爲め、先づ漁業の秩序を維持し、水產物の蕃殖保護を圖る目的を以て、それに關する必要の法規を設け、之と同時に漁具、漁船及

水產關係機關の設置

漁法の改良進步を圖り、漁業者の智識技能を發達せしめ、水產に關する調査及試驗を行ふて其の開發に努め、內鮮人漁業者間の統一融和及漁村の維持發達を圖り、水產業者の副業及貯金を奬勵する等、諸般の施設經營に力を盡した。

其の結果併合當時に於て、內鮮人の漁獲高七百二十餘萬圓に過ぎざりしもの、大正五年度には一千六百萬圓の巨額に達し、僅か六年に過ぎずして九百萬圓の增額を見るに至りたるは、水產界異常の發展にして、實に特筆に値ひするものがある。

此の他官營事業に於ける蠶業、製塩、平壤鑛業所、營林廠等の事業も、大に整理發展を爲し、特に交通及通信の豫備發展と相待て、朝鮮の經濟的成功を史論するの資料は豐富であつた、斯くの如く寺內伯が行政方針を經濟產業方面に傾注したるの結果、曾て外人の評せし貧弱にして遊牧的民族は、著し

く經濟文化を促進し、百花爛熳の觀を呈した。

茲に來つて朝鮮人は富めり、併合前の貧弱なりし朝鮮人は、僅かに六七年に過ぎずして、經濟的に異常の成功を實らした、農業者、商業者、鑛業者、水產業者等の懷中は、暖爐の如くに暖まつた、而して遊悠閑居せる兩班儒生の階級を除ける是等實業者は、其の殖息の荒きこと夥だしく、經濟上の餘力綽々、或は起業に或は遊興に出金し散財するの狀態は、頗る活潑にして、朝鮮人社會經濟上の小成功に因りて、生活の向上、社交の發展は、未だ曾て見ざる盛觀を呈した。

寺內伯が、朝鮮の產業開發朝鮮人の經濟的成功に如何に苦心したるか、極度の荒廢貧乏の社會に於て、先づパンを與ふるの途を講じ、衣食足て禮節を知るの域に進みて、精神的經營、眞の文化政治に邁進せむことしたる寺內伯の準備は識者の朝鮮の事情に精通せる者の何人も首肯する所である、大正八年三月騷擾の勃發するや、農業者も、商業者も、水產業者も、鑛業者も、殆んど騷擾の渦中に沒頭し、熱狂し、奔馳して、自己の業務を忘れ、或は拋棄して、或は官衙を襲擊し、或は內地人官民を惨殺し、恰かも敵國と對戰の態度を取り來りて、總督政治を妨害じ、內地人を朝鮮より驅逐して、朝鮮の獨立を要求し、總督政治の庇護により經濟的に成功し、富裕の生活に馴れたる實業者は、巧みに上海假政府に軍資金を調達し、其の他騷擾の幹部又は運動者と稱する者に出金援助したる總額は、決して少なくはなかつた。

朝鮮人社會經濟上の小成功

朝鮮人境遇の一進化

彼等が五百年來生命財產の不安なりし社會より、政治上經濟上一躍して、文明の典章と、聖恩に浴し、鼓腹擊壤人間としての境遇に一進化を見て、生活上に安心し、騷擾を起し、獨立を宣言し、或は要求し請願するの元氣を得るに至りたる時に當り、經濟上安全なる籠絡を利用して、不逞を援助し出資し、政治上經濟上好むで文明の生活圈より去て、昔日の誅求壓迫混沌の貧弱なる社會に逆轉せむとする、朝鮮實業者の處世方針の誤まれるを憫れまざるを得ない、けれども此の時よりして、朝鮮民族に謂はゆる新思潮なるものが

地方市場は治安維持の爲め休場

發生した。

而して其の騷擾より來る獨立思想の運行と發展が、如何に圓滿に整理し、急進的に發展しつゝありし朝鮮の經濟界が、無殘にも攪亂せられ、打擊を與へられたるは想像以上てあつた、例へば朝鮮人の商工業者は、中央も地方も殆んど閉店休業し、米麥日用雜貨其の他の商工品は、內地人との取引を中止し、地方市場は治安維持の爲め休場を命ぜられ、單に內鮮人の取引が中止されたるのみならず、朝鮮變互間の貿買も頓に減少し、市況活躍して金融活氣を失ひ、各地の銀行業者も著しく其の影響を受けて、商民支拂の遲延と、手形の不渡を生ずる者もあつた。

而して又一面に於ては、朝鮮人は內地人經營の銀行より一番に預金を引出し、悉く之を朝鮮人經營の銀行に預金を轉換する者增加したるを以て、內地人の銀行は預金俄かに減退し、爲めに中央及地方共經濟界は著しく變調を來し、爲めに經濟界の壓迫打擊は甚大にして、加之農商業者が久しき間騷擾と

朝鮮民族智能的發展力の破壞

宣傳と、遊惰に其の經濟的勢力を徒消したることに依りて、其の經濟界の打擊は、決して之を短日月に恢復することは出來まい、朝鮮の經濟產業は、此の時よりして慥かに發展の進路に躓いた。

思ふに彼等は、革新せられたる產業によりて、武斷政治數年間に比類なき物質利を博し得たるに拘はらず、彼等は騷擾と祖國回復思想の活動に因りて更に貴ぶべき向上心を失脚した、洵に朝鮮民族智能的發展力の破壞にして、此の破壞の原因は、慥かに經濟產業發展の進路に躓いたからだ、總督政治の獨みも蓋し此にあらねばならぬ。（前篇完）

總督政治史論（前篇）終

總督政治史論……後篇……

◎文化政治時代（齋藤總督時代）

第一篇　文化政治の旗幟

——慘憺たる哉文化政治の發途——

——齋藤子の政治的手腕を拜見せむ——

朝鮮騷擾は、言ひ換ふれば、朝鮮民族が一種の革命的暴動であり、叛逆的思想の表はれであつた、即ち敎育文化の進むに從ひ、祖國回復思想鬱勃として釀成し來り、帝國より分離して獨立せむとするの意思表示を明白にしたる政治上の重大なる騷擾であつた。

是より先、一般の朝鮮人は、騷擾に依りて大壓迫の來るべきを豫想し、戰々恟々として安堵し能はざる狀態であつた、朝鮮獨立なる空谷の跫音に驚喜

せし鮮民は、月を經るに從ひ其の內情の暴露に依り、失望落膽と恐怖とは濃厚となつた、中には文明政治に對し忘恩的叛虐を悔ひ、官憲に哀告する者さへあつた、我政府及總督府が此の際に於ける機宜の措置を誤まらずむば、朝鮮が騷擾前の狀態に復歸することは、決して難事ではなかつた。

齋藤實氏を望を負ふて總督に親任

然るに、長谷川總督は、騷擾の責を一身に負ふて辭表を捧呈し、前海軍大臣齋藤實氏は、衆望を負ふて朝鮮總督に親任し、文化主義を標榜して、內地延長主義を把持し、一視同仁なる大施を弱して、朝鮮に來任された、即ち從來の武斷政治が朝鮮騷擾を招くに至りしを、不言の裡に承認したと云ふことに歸着する、不肖等は此の案外の政策變更に呆然たらざるを得なかつた、世の朝鮮を知り朝鮮人を知れる識者は、此の騷擾の際に處し、我政府が微溫的態度に出でむことは、何人も之を豫想せなかつた、蓋し東京の輿論は、文化主義を標榜し、一視同仁の大施を押し立て、進めば、朝鮮騷擾は閉塞せしめ、朝鮮人を濟度することは、至難に非ずと考へたのであらう。

日本政府も總督府も輿みし易しと見た

故に東京大阪の大新聞と政論者は、武斷政治を一擊の下に粉碎したる餘力を以て、盛んに齋藤總督の人格にふさはしき德政論を唱へ、內鮮人の差別待遇撤廢論を唱へ、或は在鮮內地人の橫暴を唱へ、齋藤總督の朝鮮本位の政治を行ふことを報道し、朝鮮人は實に案外の感に打たれた、日本政府も總督府も輿みし易しと見たのも無理はない、彼等は文化主義にも德政論にも斷じて耳を傾けず、齋藤總督、水野政務總監一行が釜山に足一步を踏み入るゝや、無數の暗殺團は釜山に潛入し、大邱に潛伏し、南大門に待受けて、齋藤總督を暗殺せむと企てた、此の陰謀は警務官憲に於て探知し、充分の警戒を加へたるも、遂に南大門驛頭の爆彈事變ありし、幸に總督及政務總監は無事なりしも、驛前歡迎の內鮮人二十餘名は重輕傷を負ふた。

是より先我政府は、騷擾以來朝鮮總督府官制を改正して、併合以來十年、朝鮮の治安に功勞淺からず、寺內伯が理想的治安の機關として創造したる憲兵制度は、無造作に撤廢せられ、朝鮮人に寬仁の標榜を示しつゝ、ある間、南

大門驛頭の悲劇に、文化政治の警備は夥だしく識者の誹謗を受けた、不逞鮮人は總督府の政變改造、警備不充實の機に乘じ、南北滿洲、上海、北米方面より續々朝鮮に潛入し、鮮内地の不逞妄動者と氣脈を通じ、相呼應し共謀して政治を妨害し、騷擾を煽動し、或は面吏を殺し、或は地方官廳に爆彈を投じ、種々の惡手段を講じて、統治に屈せざる一種の示威運動を爲し、國境方面は宛然戰闘時代を現出し、齋藤總督の文化主義も、朝鮮人本位の總政主義も、彼等の滿足を買ふことは出來なかつた。

政治に服せざる一種の示威運動

思ふに、彼等の滿足は、朝鮮が日本帝國より分離して獨立することにある彼等は祖國を回復して、朝鮮は朝鮮人が政治せむとして、騷擾し劃策するのだ、我齋藤總督が文化政策を以て彼等に臨みしも、それは彼等の要望ではなかつた、故に彼等は獨立運動に熱狂奔馳し、我朝鮮統治を斷念せしめ、朝鮮を抛棄せしめむと猛り狂ふのであつた、經學院大提學金允植子の如きすら、獨立の請願を爲す當時だ、其の他の朝鮮人押して知る可しである。

光風霽月の境地に轉回するか

思ふに文化政治が時代の要求とは言へ、確かに一二年は早かつた、騷擾の際に若し當局が、從來の政治政策を固持し、毅然として憲兵警察を操縱し、騷擾を徹底的に鎭壓して、而して後文化政治の温情寛大を示したならば、惡思想の運行は決して今日の如く蔓延してはゐなかつた、兎に角慘憺たる文化政治の發途哉、齋藤總督は如何にして此の難局を切つて廻はし、光風霽月の境地に轉回するであらうか。

思ふに、朝鮮人中當時世界の大勢に通曉し、相當の見識有る者もあつた、是等の人々は或は文筆を以て、或は辯舌を以て、之を戒告する者も出で來りしも、一般朝鮮人は之を逆賊視し、或は多勢を以て之を壓迫し、邪論橫行して、正論は妨害せられ、ウイルソン氏の所謂民族自決主義は、朝鮮人の期待を沒却して、朝鮮人に些の光明を與へず、朝鮮人より米國に請願せし獨立請願書の如き、朝鮮人が世界の大勢に通ぜざる愚然の情は、一變して冷笑の種と爲りたるより、朝鮮人のウイルソン氏崇拜熱は稍冷却したるも、事情を知

悉せざる一千六百萬士民の最大部分は、遂夢未だ覺めず、或は國體の名義を以て、或は個人の名義にて、ウィルソン氏に哀訴し。

「亞米利加人の正義と自由と、博愛任俠とに賴りて、朝鮮獨立を成就せむ」

と云ひ、或は。

「亞米利加人は何れの時如何なる場合に於ても、斷じて食言者ならざるを信じ、吾等は當に多大の期待を以てして、亞米利加人に接せり」

なと、朝鮮一流の小策と阿諛とを以てした、二千年來朝鮮人が、事大主義に養はれたる卑屈なる思想は、大正の聖代に傳統して、遺憾なく之を發揮して來た、蟷蚌を爭はしめて、漁夫の利を獲むとするは、前韓外交の失敗だ、朝鮮人の事大思想は、併合せられたる朝日本に於ても、矢張蠢動を續ける、此の思想の改竄は蓋し容易の事に非ずして、將來と雖も臨機應變に此の思想の動きが見らる、であらう。

斯くて齋藤子の文化政治は、益々其の旗幟を鮮明にしたるも、朝鮮人の米國人に依賴せる事大思想は、殘夢未だ覺めず、朝鮮の獨立は遂には認容せらるゝの時機來るべしと爲し、煽動誘惑一般民心を混亂せしめ、或は要路の大官を暗殺せむと蠢動せる不逞漢は、朝鮮各地に出沒し、警察警備の縄張は何の用をもなさずして、滔滔上海より來る不逞鮮人は巧みに不逞思想を朝鮮内地の鮮人に植へ付けた。

顧ふに、巴里の講和會議以來、聯盟各國に於ては、大戰亂より來る獨逸の責任と、世界の改造は既に決定せられ、民族自決主義も委任統治も亦確定案となりて、着々實行せられたるも、一般朝鮮人の期待したる第一回國際聯盟會議には、更に民族自決主義問題が議案と爲りて、結局は朝鮮も均霑するであらうと夢想せしに、大正九年十二月の聯盟會議は、豫定の如く開會せられたるも、遂に何等の提案も見ずして終了した、茲に來りて民族自決主義に對する朝鮮人の觀念は、死灰の如くに冷却してしまつた。

朝鮮統治の成績は一瞬にして逆轉

併しながら、一般朝鮮人の獨立思想、祖國回復思想は、文化政治の行程時代大正八年より、九年十年に亘りて不逞鮮人に依りて傳播せられた、而して一面に於て鮮内地の識者は、盛んに教育機關の普及を當局に迫り、或は各地を遊說して、一般鮮人に文化と武化の實力を養成して、遠大の計劃を建つべきを吹聽した、斯くて滔々たる朝鮮人の大目標は、祖國回復に轉換された、我政府が騷擾に處するの機宜を誤まりし結果朝鮮統治の成績は、一瞬にして逆轉された、功業の難きは天に登るが如く、覆墜の易きは毛を燒くが如し、寺内伯が孜々屹々として築き上げたる朝鮮統治の成案は、朝鮮學に暗冥なる政治家に依りて、無造作に顚覆されむとして居る、齋藤總督は果して之を如何に收拾し、如何に彌縫し、如何に展開せむとするのであらうか。

愚按ずるに、寺内伯の武斷政治も、齋藤總督の文化政治も、我朝鮮統治の大方針に就ては、毫も異なる所はない、即ち朝鮮の非文化を文化にし、愛憐慈悲同情の美德を以て、之が化育に從ひ、内鮮一視同仁の下に同治の實績を

府縣制を布き市町村制を實施せむ理想

擧げむとするは、我が韓國併合の大精神にして、武斷政治と云ひ、文化政治と云ひ、決して統治の精神が變更されたのではあるまい、齋藤總督は時代の趨向と併合以來、十年の武斷政治の結果に視て、統治の政策を變更されたのであらう、齋藤總督は内地延長主義の文化政治に依りて朝鮮を開發整理し、十年二十年と過ぎ去る年月の間に於て、朝鮮社會の開風鮮人文化の向上が、日本内地の府縣郡と同一程度に達するを待て、府縣制を布き、市町村制を實施せむと理想せられたるは、勿論であらう

既に朝鮮を以て、日本内地の延長したるものとの觀念を世人に與へ、内地延長主義を發揮せられむとするならば、日本内地と朝鮮とを同一制度の下に置くの施設に出づることは、文化政治の原則であらねばならぬ、然れども朝鮮は日本内地と非常に文化の程度を異にして居る、即ち教育の上に產業の上に、頓と比較にはならない程軒輊がある、經濟社會の狀態は山と海との高低がある、朝鮮人は騷擾と祖國回復思想の動きに因て、頓挫したる經濟狀態よ

り逸脱することが、焦眉の急務である、衣食足て礼節を知るの境地に進化するまでには、其の前途は遼遠だ、精神文化の如きは経済文化の後に来るべき問題にして、先づ何を措いても一本立して飯を食ふことを考へなければならぬ。

齋藤總督は、來任の劈頭に於て、一般鮮民に諭告して曰く。

諭　告

不肖玆に朝鮮統治の任に就くに方り、朝鮮總督府の官制改正せらる、乃ち一言以て民衆に告ぐ。

朝鮮統治の方針たる、一視同仁の大義に遵ひ、民衆の福利を増進し、東洋の平和を確保するに在るは、宏謨の夙に定まる所にして、累代統治の任に膺れる者、克く此の意を體して斯土の開發に從ひ、國民亦拮据其の業に勵み、以て今日の發達を致したるは中外の齊しく認むる所なり、然れども百

般の施設は、之を民度に徴し、時世に攷へ、以て其の宜を制し、人心の適歸を愆らしめざるべきは固より言を俟たず、今や時運の推移文物の進歩亦曩日の比に非ず、加ふるに歐洲の戰亂新に熄み、世態人心の變遷特に著しきものあり、是に於てか政府は官制を改革して、總督任用の範圍を擴張し警察制度を改正し、以て時代の進運に順應して、施政の簡捷と治化の普及とを圖れり。

不肖大命を奉じ任に就くに當り、亦偏に宏謨を紹述し、併合の精神を發揚せむことを期し、自今部下を督勵して益々公明正大の政治を施し、形式に拘泥することなく、輿衆の便益と民意の暢達とを圖り、朝鮮人の任用待遇等に關し、亦考慮を加へて各其の所を得しめ、又朝鮮の文明及舊慣にして苟も採るべきものあれば、之れを採りて統治の資に供し、更に各般の行政に刷新を加へ、且將來機を見て地方自治制度を實施し、以て國民の生活を安定し、一般の福利を增進せむことを期す、冀くは官民互に胸襟を披き

總督の訓示

訓　示

道　知　事

茲に道知事會議を召集し、朝鮮統治の方針に關し親しく各位に告ぐる所あり、且各位の意見を聽取するを得るは予の頗る欣幸とする所なり、前月就任の初に當り、予は一視同仁の聖意を遵奉して、文明的政治の確立を期し、爰に訓示を發し本府及所屬官署の職員に告ぐる所ありたるは、既に各位の諒知せらるゝが如し、爾來總督府内に於ても鋭意各要項の實現に努力しつゝあり各位に於ても或は既に之を實施し、或は近く實施せむことを計畫し、予と心を一にして部下を督勵しつつあることを信じて疑はず、冀くて協力一致朝鮮の文化を向上せしめ、文明的政治の基礎を確立し、以て聖明に奉答せむことを、若し濫に不逞の言動を爲して人心を惑亂し、公安を阻害することあるが如き者あらむか、將に法に照して寸毫も假借する所なからむとす、一般民衆其れ之れを諒せよ。（大正八年九月十日）

は將來參訓示の精神を擴充して、施政の改善を圖らむことを、其の具體的方針竝施設に至りては、別に政務總監より訓示する所あるべし、各位は宜しく之に準據して庶政を刷新し、着々實績を擧げむことを期すべし。

警察機關を整備し、治安の維持を計るは目下喫緊の要務に屬す、然れども時恰も憲兵と更迭の過渡期に際し、警察官の補充頗る容易ならず、各種警察の設備も亦未だ完きを見るに至らざるを以て、此間に處する各位の苦心は之を諒とせざるを得ずと雖、各位は克く關係官署と圓滿なる協調を保持し、最善の方法を講じて不逞者を鎭壓し、以て地方の寧謐を確保し、民衆をして深く當局に依賴する所あらしめむことを期せよ、中部以北に於ける今歲の旱害は、近年其の比を見ざる所にして、秋收減少し、人民の窮乏殊に甚し、之が賑恤に關しては既に旱害救濟委員會を開きて、其の大綱の決定を見るに至りたり、各位は之に基き更に地方の狀況に應じて適切なる措置を講じ、罹災地方民の生活を安定するに於て遺憾なきを期すべし。

半島統治の新生面

今や世界の思潮は、歐洲戰爭の影響を受けて、動搖不定の情勢に在り、此の秋に際し我が國民をして輕擧妄動を愼み、平靜其の業に精勵し、以て秩序ある進歩を圖らしむるは、即ち國家をして健全なる發達を得せしむる所以にして、洵に刻下の緊急事たり、特に朝鮮に於ては本年三月以降騷擾發し、流言蜚語徒に傳へられて、民心未だ安靜を見るに至らず、各位は特に意を民心の綏撫と善導とに致されむことを望む。

希くは各位、益部下を率ゐて奮勵努力し、時勢の進運に順應して、半島統治の上に新生面を開かむことを（大正八年十月十三日）

如何に齋藤總督が、騷擾心、祖國回復心の運行に、精神を艱ましつつあつたかは、此の詔告と訓令に依り察知することが出來る、嗚呼祖國回復思想の傳播は、水の低きに流るゝが如く、經綸として全朝鮮民族を蠱ほさむとするのだ。

史を按ずるに、露國の彼得大帝は、國内の改革整理を急ぎて、歐化主義に

失敗し、彼得三世の後繼者カタリナ二世（女帝）は、農業奴隷の解放に志して失敗し、人民は帝の西歐文明を嫌惡或は輕侮するの念を生ずるに至り、治者は精神的方面に於て著しく失敗した、朝鮮を治むるは今や小鮮を煮るが如しだ、不肖は暫らく齋藤總督の政治的手腕を拜見するであらう。

第二篇　朝鮮統治の大政變

——政治は民族心理の寫眞なり——

——角を矯めむとして牛を殺す勿れ——

朝鮮統治の政治條件

政治は現代の活事業だ、其の人存すれば其の政舉り、其の人亡すれば其の政息む、ニは古人の金言である、朝鮮統治の政治條件は、明治天皇の併合詔勅を原則上より演繹し來れば、何人でも政治は行ひ得るニ云ふものではない不肖が前篇にも言つた如く、矢張總督の爲人に依るニは勿論であらう。

寺内總督去て以來、長谷川總督は朝鮮統治の具體的條件を見出すニニが出來なかつた、政治は民族心理の寫眞である、如何なる形式の政治でも、總て民族心理の積極若くは消極の表現ならざるものはない、朝鮮の民族心理は、導きやうでは發達もすれば變化もする、が朝鮮の統治に就ては如何なる總督

經濟狀態は日々に變動す

でも、朝鮮民族の心理は四千年の歴史上の遺傳が、其の根柢ニ爲つて居るニニを忘れてはならない

朝鮮の歴史中、我れの韓國併合位ひ政治變動の劇しかつたニニはない、其の社會組織は兩班制度や、奴隷制度の破壞ニ、新らしき貴族階級の成立、土地制度の確立に至るまで、舊時代より新時代への變遷期には相當に波瀾起伏があつた、而して朝鮮ニしては未だ曾て遭遇せしニニなかりし社會組織を以て進み來り、經濟狀態は日々に變動し、人口は異常の力を以て增加し、交通は著しく頻繁ニ爲り、商工業は長足の進歩發達を爲し、大都市は漸次成立し內鮮民族は大混合の狀勢を呈し來らむニニして、朝鮮民族は均勢の保持に努力しつゝある。

此の時に當りて、當局は民意暢達なる美名を弄し、從來の統治政策が實情に適切ならず、民族文化の向上を全からしむるに缺ぐる所ありニして、先づ官民意思の疏通に努力し、相互の理解をして常に缺ぐる所なからしめむニし

齋藤新總督は、地方先覺者を通じて一般の諒解に資し、併せて政變改革の趣旨を貫徹せむ爲め、大正八年九月二十日より一週間に亘り、各道の有力者竝望家及新智識を有する者、五十一名を京城に召集した、齋藤總督、水野總監の此の微温的態度に、當時の鮮人思想界は燦爛たる光彩を放ち、非常に活潑の光景を呈したことは勿論である。

水野政務總監のハイカラ政治

此の召集には、一人殘らず應じて上京した、水野政務總監以下各局部長、民間篤志者等に於て、總督の施政方針に關する說明及講演を爲し、之と同時に參集者よりは、民情竝統治に關する意見を徵したりして、水野政務總監はハイカラ政治の本能を發揮し、此の如き會合は總督政治以來嚆矢とする所にして、相互の諒解聯絡に資する所は多かつたと悅に入つた有樣に、不肖等は實に苦笑せざるを得なかつた、朝鮮の民族性は古へより以來、對手の弱はり目と謂はり音に向ては、猛然と反撥して來る、此の時よりして朝鮮人の一切の議論は總て政治に醉宿するの態度に變遷し來つた、而して過去の統治制度

や、統治狀態は瓦礫の如くに粉碎されてしまつた、武斷政治十年の統治思想は全く玆に盡きて、朝鮮の民族性をも知らず、民度をも御承知なき水野政務總監に依りて、朝鮮人の思想界は百度以上の高熱度に昇り詰めた。

民意の暢達上遺憾少なからず

而して朝鮮內に於ては、新聞の發行を制限し、新規の發行は容易に許されなかつたが、言論の自由を制限することは、民意の暢達上遺憾少なからずと云ふ名の下に、京城に於ては大正八年十二月より、同九年一月に亘り、新に朝鮮人に時事新聞、朝鮮日報、東亞日報等の發刊の認可を與へられ、是等の諸新聞は朝鮮諺文を用ひ、三月乃至四月より發行した、而し此の諺文新聞中東亞日報、朝鮮日報は一瀉千里の勢を以て各地に配付され　其の經營者執筆者の意見と抱負とは、民族的自覺を煽り、祖國回復思想を誘發し、而して盛んに內地人との對抗心を煽り養成すべく努力した、階級制度は逸早く消滅して朝鮮民族は二千萬民平等にて結束した、而して祖國回復は正當の權利なりと唱導するに至つた、文化政治の當局が、被治者に勸めて其の輿論を採用せ

むこして許せし諺文新聞機關は、實に當局が意想外なる輿論を堤供して來る之れは何ふだ、之れでもかこ云ふ工合に打込むで來る、當局は言論の自由を認めながら、矢張之を拘束せざる可からざる破目に陷入つて、其の發行を停止する、其の發賣を禁止する、何が何やらさつぱり分らない。

民族心理の寫眞

不肖等は、朝鮮人の政治思想は諺文新聞に依て之を研究することが出來る朝鮮民族心理の寫眞は朝鮮の諺文新聞だ、朝鮮の民族心理は文化政治にも滿足はせない、諺文新聞の社說は、一粒の木の實の如き小さいものでも、朝鮮民族の心中に播植されれば、年一年こ成長して、遂には鬱然たる大樹こなるのだ、驅逐に驚いた內閣總理大臣原敬氏は、朝鮮施政の革新に依て、文化政治を布き、朝鮮をして遠かに文化にし、內地の延長たる實を擧げむこ聲明し齋藤總督も勿論原首相の同論者である、が文化政治を布き、文治主義が發展すればする程、朝鮮民族の思想は眞の自覺の域を離れてしまつて、祖國回復思想が芽ざして來る、齋藤總督は大正八年より、本府に監察官こ云ふものを

行政官中堅實なる思想

置て、八年より九年に亘り、各道に之を派遣し、親しく地方有力者、故老、有識者等に面接せしめて、從來の施設に對する批評、感想、竝將來の施設に對する希望等に付隔意なき意見を徵し、且つ地方官憲に就き、施設の實績を調査して其の適否を考察し、併せて改革の趣意を一般に說明さした。

然し本府に於て本務を有する事務官の臨時出張、即ち片手間の仕事では、民情視察上十分なる効果を擧ぐることは覺束なしこし、大正十年二月朝に專任視察に從事する內鮮人事務官五名を特置し、朝鮮人は行政官中堅實なる思想こ、行政的手腕こを併有する者を拔擢して之に任命した、是等の監察官は常に地方を巡歷して民情を視察し、穩健なる思想を鼓吹するのが其の任務である、筋は違へご韓國時代の喑行御史其の儘だ、何んこ吞氣な話ではないかしかして一面に於ては民間より二三の人物を情報委員こして囑託し、地方に放つて民情を視察せしめ、監察官ご相俟つて水野政務總監に一束して之を報告する、或は文書を以てするものもあれば、或は口頭を以てするものもあり、

日本の隆盛は六十年奮闘の結果だ

或は集合して政務總監に報告することもあつた、日本内地では德川時代に徃々斯樣な事が行はれてゐたが、明治大正の朝時代に、斯んな兒戲に類する話は聞いた事がない、之も過去の歷史朝鮮なればこそだ、朝鮮の社會相は說明を俟たずして明瞭ではないか。

按ずるに、日本の隆盛天に沖するが如き時代を迎ふるには、我國民は六十年間上下心を一にして、文化と武化に奮闘したる結果だ、朝鮮が武斷政治僅かに十年にして、其の荒廢せし社會が整理の緒に就き、其の民族が漸く長夜の惰眠より覺め來つたが、一本立には未だ歩けない時代とは、其の實質に於て格段の相違がある、日本人は既に大人の服を着けて居るが、朝鮮人は小兒にして小兒の服を着けて居る、敎育の上に於て、產業の上に於て、伍格で歩行しやうと云ふ時代ではなかつた、今日でもさうだ。

勿論朝鮮人は帝國の臣民として、内地人と何等の差別の設けらるべきでないが、言語習俗の同じからざると、文化に於て半百年間遲れて發足したると

大人は大人小供は小供

は統治上百般の施設が其の軌を一にする能はざるは當然にして、其の制を異にするものあるも亦免かる能はざる境遇であらねばならぬ、然るに文化政治の當局は、差別撤廢とか、内鮮文政の統一聯結と云ふことは、餘りに早計ではないか、大體に於て内鮮人は差別ありてこそ平等だ、大人は大人、小供は小供として見ることが、平等であらねばならぬ、一部の人は進むで居るかも知らぬが或る種の階級は富むで居るかも知らぬが、一千七八百萬の民族を平均すれば、其の文化の程度、其の經濟力に於て個人個人の能力に於て、直ちに差別撤廢の施設を要求することは無理であらねばならぬ。

權利を主張すれば、自から義務も負はなければならぬ、内地人は國家に對し經濟的義務の外に、血稅を拂つて自から帝國を防禦する所の道德を發揮して居る、然らば朝鮮人もそれを負擔しやうと云て見た所で、朝鮮人が眞に自覺して、日本臣民としての精神的表情が見出されない以上は、其の貴とき血稅を負擔して貰ふことは眞平御免だ、齋藤總督の文化政治に伴ふ朝鮮統治の

大政變、制度の大改革は内地と朝鮮と、將又内地人と朝鮮人とは、劃一制度の下に立ちて、均しく皇化に霑はむとするの急進的改革とでも云はうか、實に案外の大政變、大改革ではある、角を矯めむとして牛を殺さぬやう、御用心は勘要であらねばならぬ。

朝鮮の社會組織は内地と同樣ではない

思ふに、水野政務總監は、齋藤總督に勸めて被治者の輿論を採用せしめむと努めし民衆政治家であつた、民衆政治の價値を朝鮮當時の時代に認めむとするは尚早だ、朝鮮人の社會組織は、内地人と同樣ではない、朝鮮の交接する環境は、内地人と同樣ではない、朝鮮人の解決せむとする問題は、内地人と同樣ではない、されば騷擾を控へて彼等の要求を聽取し、民意の暢達を圖るとて言て見た所で、齋藤總督や水野總監に何の用意もない筈だ、寺内伯は何の爲に孜として朝鮮を研究し、其の民族性を調査されたか、不肖等は何の爲に多年朝鮮の思想研究に從事して居るのであらうか、總督總監の一令一行は多少なりと朝鮮を研究し、朝鮮の事情を調査したる後ならなくてはならぬ、

而して其の具體的に政治條件の發表は、相當に時間と空間の制限を受くるのが當然だ。

微温的政術を弄せられたるは遺憾である

不肖をして此の大政變大改革を一言にして評せしむるならば、政治の研究には朝鮮民族心理の研究が必要であり、其の改革には、民族心理の根本的改革が行はれてからの事だ、騷擾と獨立思想、祖國回復思想の著しき運行を眺めながら、卒爾として其の政治政策を變更し、而して微温的政術を弄せられたことは、不肖等の實に遺憾禁ぜざりし所のものであつた。

第三篇　未整頓の警察時代

——文治主義の警察制度に轉換——

——憲兵制度の撤廢は尚早だ——

治安に功勞淺からざりし憲兵制度

憲兵制度に依れる憲兵警察合一制度が、併合の偉業に參加して、朝鮮の治安を維持し、朝鮮の安寧秩序は完全に保たれ、十年に亘りて武斷政治下の治安に功勞淺からざりしことは、前篇武斷政治時代に之を述べたり、不肖は寺内伯が理想的治安の創造として之を謳歌した。

之れ勿論變形制度たるには相違なきも、朝鮮が當時野蠻未開の域を脫せず況んや併合不平の徒は中央及地方に橫行して、物情恟々、殆んど軍國時代に異ならざる時に於て、普通警察制度に依りて、完全に治安を保持せむことは到底想像だも出來ざりしことは、世の識者は夙に之を諒としたる所であつて

朝鮮人は安堵して生業に奮勵す

寺内伯が制度創設以前に於ても、伊藤統監時代明治四十一年、朝鮮財政の負擔の下に、四千七百人の憲兵補助員があつたが、制度創設によりて更に二千六百人の憲兵を增員し、從來韓國政府が、其の治安を憲兵と警察とに依りたるものを、寺内伯が之を合同統一したる變形制度に過ぎなかつた

此の變形制度は、嚴然たる寺内伯の節制に依りて、曩に物を探るが如く縱橫自在に動いて居つた、故に當時内鮮人の治安は完全に保たれ、暴徒草賊夜盜の類は影を沒し、朝鮮人は安堵して生業に奮勵し、内地人は草深き朝鮮内地に侵入して、或は商業に從事し、窓は開く儘、戸は押す儘に任せて、生民は夢穩やかなりしこと十年、洵に天下太平の中に於て、朝鮮の産業は理想的に開發整理されつゝあつた。

然るに東京の政治家は、朝鮮の騷擾を武斷政治の罪と誤認し、齋藤子の文化政治を標榜して來任せらるゝに及び、文治主義の政治下に、此の變形の憲兵制度を存置するを許さず、憲兵制度は齋藤子の赴任前大正八年八月東京に

於て改制の宣言を發表せられ、憲兵制度を廢して普通警察に轉換することゝなつた、朝鮮統治上恐らく斯くの如き大なる改革はない、九月來任せられた齋藤總督は、何を措いても先づ警察制度を確立せなければならなかつた。

當時は極東の好景氣時代だ、內地より朝に數千人の巡査を募集せなければならぬ、當時內地の巡査千五百名を朝鮮に移管することになつた、憲兵の一部を巡査に移す、朝鮮人の巡査補を引上げて巡査にする、憲兵補助員を巡査に引直す等、一時に一萬人以上の朝巡査を作るので、制服、制帽が到底急場の間に合はぬ、況んや帶劍に於てをやだ、當時世間では朝鮮の警察は百鬼夜行の醜態だとまで酷評された位いであつた、騷擾と不逞の言動とを目前に控へての制度改正には、當局は容易ならぬ困難を感じたであらうが、僅かに四箇月ならずして、普通警察の組織は完成された、當時の警務當局が寢食を忘れて、如何に活動せしかは文化政治史上に嶄然として光彩を放つべきである。

憲兵補助員を巡査に引直す

此の朝鮮統治の大政變に際し、國境警備の要緩に乘じて、不逞鮮人は滿洲上海方面より續々として、朝鮮內地に侵入し、大正八年十一月より華盛頓に於て開催さるゝ第一回國際聯盟會議には、愈々朝鮮問題が論議されて國際聯盟に依つて、朝鮮は獨立を承認されるのであるとの吹聽し、上海假政府に於ては其の國際聯盟會議の開かるゝまでに、今一度大騷擾を朝鮮に惹起し、朝鮮人が如何にしても、日本の統治に滿足せざる旨を、世界的に宣傳するの必要ありとし、此の朝鮮統治の大政變を機とし、九月より十月に至り最も熱心に煽動した。

上海假政府の言動

當時は朝鮮より、上海假政府に莫大の金が送られた、假政府は上海佛國租界に堂々たる三層樓の建築物を借りて、宛然政府然たる事務を執つて居つた假政府より發給する辭令は、烏の子の立派なる厚紙に各大臣の印を押し、此の辭令は將來本政府を京城に樹立したる曉は、或は警察使とし爲り、或は郡守とし爲り、其の他地位名望ある役人とし爲り得ることを信じさしたのであつた、

朝鮮農民上海假政府に租稅を納む

朝鮮内地に於ても此の辭令を貰つた者は澤山にあつた、斯樣な風で假政府に送られし金は多額に上り、假政府の朝鮮人に對する威望は隆々たるものがあつた、而して一面上海よりは、假政府の暗行御史見たやうな者が入り込むで將來日本帝國に租稅を納むる義務はない、假政府が設置されたる以上は、租稅は假政府に納めよと云ふ宣告を地方民に與へた。

地方農民は依々諾々として假政府の租稅徵收員に、租稅として金品を納めて居つた。

然るに豫定の如く、國際聯盟會議は開かれたが、曾て民族自決を唱へし米國大統領ウイルソン氏は、已に失脚して信望地に墜ち、亞米利加自身が國際聯盟に參同せず、會議に於て論ぜし所は、只各國の勞働問題に過ぎざりしこと、漸次朝鮮人にも明瞭になり、而して朝鮮問題なぞは、何人も論題にする者が無かつたことに、朝鮮人は少なからず落膽した、併しながら此の時よりして、朝鮮人には、新思潮が流れ始めた、當時未整頓の狀態にありし警察

假政府の弧遣員强盜に變形す

が、此の取締に機敏と大膽とを缺ぎし結果、假政府の軍資金募集員、租稅徵收員等は、巧みに鮮内地に出沒して集金し、或は反日本熱を煽りしが、警察の整頓するに從ひ、漸次不逞鮮人の檢擧取締は徹底し來り、一面朝鮮人は漸く假政府に不信任の態度を表示し來り、爲めに軍資金の送付は激減した。

假政府も金が無くては何事も出來ない、第二期に入りし彼等の派遣員は、朝鮮人富豪より强奪の態度に出た、まう脅かして取るより方策は無くなつた彼等は遂に漸次强盜の形式に變はつて來て、大正八年末より九年に亘りて、全鮮到る處に於て、短銃を持つた强盜となり、假政府の命に依り派遣せられた鮮令書を示して、出金を脅迫するものが續出した、京城に於て、地方に於て、頻々として脅迫事件が起つた、假政府は獨立に名を藉りて、强盜を働かすのであると云ふので、鮮内の民心を失墜してしまつた。

鮮内の民心を失ひ、軍資金の出處を失はむとする假政府は、極端に窮乏に陷つた、假政府の沒落も遠くはあるまいと想像されたが、なか〳〵容易に沒

落しさうもない、朝鮮人の大部は假政府に諦めを付けたが、まだ〳〵頑冥にして時世に通ぜざる地方人は、依然として假政府に軍資金を提供して居つたさりながら少數少額の軍資金では、假政府を維持するに足らずして、朝鮮に多數の煽動者を侵入さすことは出來ない、故に强盜脅迫は益々烈しくなつたが、此の時代に處する警察は大に整頓して、彼等に對する警戒は、最善の努力が致されつゝあつた、もう彼等も手も足も出ない程警察官は訓練された、茲に於て假政府は、最後の手段として鮮内民心を動搖せしめて、朝鮮統治を妨害せむと策し、上海方面に於て印刷したる不穩文書を續々朝鮮に發送した。

警察官漸く訓練さる

それは獨立思想を鼓吹するの檄文であり、官公吏を總辭職せしむるの檄文であり、租稅を不納せしむるの檄文であり、富豪を說て資金を强要するの檄文であり、青年學生に罷休を勸むるの檄文であり、各種の不穩文書は雨の如く朝鮮に亂發された、此の檄文は多く効果を見ることは出來なかつたが、獨

暗殺隊と爆彈投下

立思想、祖國回復思想は慥かに全朝鮮に植へ付けられた。

上海假政府は、此の宣傳煽動が餘りに鮮内地の民心に手答へなしと見て、更に大正九年三月頃より暗殺隊を組織し、國境義州に於ては義州警察署の巡査殺害せられ、宣川に於ては面長が殺害された、而して一面武力を備へた不逞の徒は四十人一隊を成して、咸北道の茂山地方に侵入した、が少數の警察官に擊退された、五月頃には爆彈投下と變じ、或は新義州の停車場に於て、或は宣川の警察官署に於て、平安南道警察部に於て、或は南鮮の釜山及密陽警察署に於て、各地に爆彈は投下されたが、負傷したものは少なかつた。

此の時代に於て、内地人の朝鮮内地に在住して、或は農業に、或は商業に從事せしものは、朝鮮經營の爲め、朝鮮の農商工業發展の爲め、蓋し一大恨事であらねばならぬ、而して朝鮮民族が聽援と獨立運動に熱狂奔馳しつゝ二箇年の日子を空費せし間に、經濟界は滔々として不景氣を迎へ、朝鮮の實業者は

好景氣中數年來孜々汲々として、働らき得たる蓄積は空しく獨立運動者に提供し、赤裸々と爲りて、徒來悲慘の境涯に沈淪せざる可からざるの已むを得ざるに至つた、朝鮮の實業者は騷擾と不景氣とに捲かれて、當分浮ぶ瀬はあるまい。

顧ふに憲兵制度の撤廢は尚早であつた、不肖等は大正八年八月制度撤廢の東電に接して、盛んに撤廢尚早を唱論したが、齋藤子の文化政治は騎虎の勢を以て文治主義に轉換され、不肖等の尚早論は、時代晩れの議論として唾棄せられてしまつた、が併し不肖等は其の儘一二箇年間、朝鮮の治安に熱練と經驗ありし憲兵制度を存續せしことに於て、朝鮮の騷擾が案外速かに鎭定し上海假政府が無人の境を徃くが如き、煽動と非行とは遑ふし得られなかつたらうと考ゆる、徐ろに政變當時を回想するとき、今尚感慨深きを覺ゆるのである。

不肖は憲兵制度撤廢尚早を唱へた

第四篇　獨立思想の運行

〔一〕

——大同團總裁に金嘉鎭を擡ぐ——

——前農商工部大臣金東農の末路——

騷擾は表面に於て鎭定したが、上海假府政の不逞妄動は、大正九年中猛烈に繼續された、而して朝鮮獨立、祖國回復と云ふことは、何人が何ふ言ても朝鮮上下を擧けて保持する所の新らしき思潮と爲つた、然れども朝鮮人は已に獨立は朝鮮人の力に依らざる可からざるを自覺するの時代と爲つて來た。二千萬の民族を個々に調査研究すれば、其の文化の程度、其の經濟力に於て、其の智能的事　に於て、單に獨立を要求し祖國を回復しやうと云つた所で、到底獨立を支持することの不可能なるは分り切つた話である、今假りに我帝國が朝鮮の分離を許して、獨立せよと云つて見た所で、獨立國としてそ

文化促進産業開發より來る實力の養成

れを維持することが出來るであらうか、それは朝鮮人の宇内の趨向と、東亞の現勢に通曉するの士は、何人も之を否定するであらう、故に直ちに獨立の出來ざるを諦めたる朝鮮人は、文化の促進、産業の發達を要求し、之を實現することが、朝鮮獨立、祖國回復の目的を達成する所以なるを自覺し、矢次早に種々の要求を文治主義の當局に持込むことになつた。

此の文化速進、産業開發より來る實力の養成と云ふ思潮が、深く朝鮮人の頭腦に侵潤した、此の現はれが即ち今日の向學心の勃興である、文化の速進には其の基礎たる教育の發達を期せなければならぬのは當然の歸結である、而して眞の文化を達成するには、朝鮮民族が富裕になることである、其の富裕を得るには産業を開發發展させなければならぬ、と云ふ所から、産業熱が勃興しつゝあるのである、此の二つの方面に於て、朝鮮人の要求が強く爲り落着いて來た。

然れども、舊時代の頑冥なる朝鮮識者は、斯くの如き新思潮にまだ觸れて

全協祖國回復を協議す

ゐない、上海假政府が資金の窮乏と、鮮内地に有力なる同志の聲援に乏しきを憂ひつゝありしとき、朝鮮に大同團と稱する秘密結社が起つた、其の主領は全協なる者にして、彼は京城兩班の家に生れ、十四歳にして科擧に應じ、二十一歳にして農商工部主事と爲り、後十二年にして辭職し、明治三十七年李容九の創立せし一進會に入りて、李容九の信用を受け、遂に一進會の評議員及總務員に擧げられ、三十八年には京畿道富平郡守に任ぜられ、四十年辭職し、四十二年秋忠清道天安郡出身の張某外一名と共に、西間島に移住したるが、歐洲大戰の終結後、巴里の講和會議に於て、米國大統領の民族自決主義を唱論するや、彼は此の機會を利用して、祖國を回復せむと協議し、京城に來りて劃策し、米國に渡航して排日主領李承晩に謀議せむとし、金策に着手したが意の如くならず、遂に上海に渡航した。

大正八年二月、全協は再び京城に來りて形勢を觀望せしに、三月一日に至り天道教主孫秉熙等の、突如獨立宣言書を發布し、所在騷擾するや、全協は

元一進會員にして、忠清道の浮浪士崔益煥と協力し、朝鮮獨立の目的を達成せむとし、全協は其の主領と爲りて不逞團の一味を以て、大同團を組織したのであつた、全協私かに思へらく、社會に相當の地位と名望有る者を擧て總裁と爲さずむは、團の信用を中外に顯揚する能はずとし、四月上旬密かに之を男爵金嘉鎭に勸說した。

金嘉鎭は、併合の當時男爵を授けられたるが、併合前には大韓協會の顧問と爲り、極力併合に反對したるものにして、併合以來快々として樂まず、玆に至り全協の勸說を容れて總裁たるを諾し、京城舟橋町なる崔益煥の借家に於て、謄寫版を使用して、宣言書と題する大同團の趣意書四十通、機關方略と題して大同團活動機關の構成及其の活動方法を規定し、朝鮮獨立の目的を遂行せむとする文字を記述するもの四千通、陳情書と題して併合の不法なる事由を痛論し、朝鮮の獨立を公認せられむことを希望する旨を記述し、且つ之を米國及巴里講和會議に發送する旨を附記したるもの二千通、布告と題し

て冒頭先づ中華民國代表は、朝鮮獨立を承認して、巴里の講和會議に請囑せるを以て、朝鮮民族は其の同情を永久に感謝し、益々奮勵する旨を附記し、且つ韓國の併合せられたるは、延て滿蒙支那本國を危殆ならしむる旨を記述せるもの、五千通を印刷した。

紹へて五月中旬、金嘉鎭及全協、崔益煥は、鐘路五丁目楊濟殷の家に於て毛筆版を用ひて學生諸君に告ぐと題し、朝鮮學生は敢然として同盟し、祖國の爲めに獨立運動に努力せよと煽動せる文書六千通、活版を利用し、宣言と題して、前記謄寫版と同趣意の印刷宣言書二千枚、謄寫版を利用して、親望清談の諸子に警告すと題して、併合前後我帝國の對韓政策を誣誘し、一般朝鮮人に奮起を求むるの趣旨に依り、煽動文を揭載したるもの一千枚、日本國民に告ぐと題して、日本國民は速かに朝鮮の獨立を承認せざる可からずと反覆詳論せるもの四百枚を印刷した。

斯くて大同團は、金嘉鎭の智慧を絞り、適當時期に於て此の印刷物は、朝

大同團の活動に資する運動費

鮮人一般及內地人に頒布し、一層大同團の擴張と、一般朝鮮人に對して獨立運動に奮起すべく、煽動に資せむとし、着々諸般の計劃中五月末に至りて、團員崔益煥及權泰錫は、此の事實發覺して先づ逮捕された、是より先、全協は崔益煥の紹介に依りて、鄭南容なる者と相識り、全協は之を金嘉鎭に紹介し、彼等は續々多數の同志を集合し、金嘉鎭の指揮下に於て、大同團の活動に資する運動費の調達に着手した、而して此の運動資金の募集には、有力なる團員を得るを急務と爲し、李堈公外數名の貴族及宗教家を、上海方面に誘出し、因て內外鮮人の思想を刺戟し、其の機に乘じて不穩印刷物を頒布し、示威運動を起して、朝鮮の人心を攪亂せむと企圖し、崔益煥の逮捕せられし後は、專ら鄭南容が印刷出版の任務を擔當した。

金嘉鎭及全協は、更に皇族、縉紳團、儒林、宗教團、教育團、青年團、軍人團、商工團、勞働團其の他地方各組合等の團體代表者を撰拔勸誘し、諸團體を結合統一せむと密議し、團員揚植は商工團を總代し、舊褓負商を結合し

上海と朝鮮內地と呼應して大煽動

て大同團の爲に印刷物を全鮮に配付し、通信聯絡の責任に當り、斯くて大同團の部署は較や整ひ來りたるを以て、金嘉鎭は七月下旬密かに大同新報と題する新聞一萬枚を印刷して、之を京城及地方に撒布し、以て愈々具体的に煽動を開始し、又一面團員を上海に特派して假政府と氣脈を通じ、京城を獨立運動の本部とし、地方に支部を設置し、上海と朝鮮內地と相呼應して、大煽動に便せむとした。

時に金嘉鎭及全協は、運動資金の調達及同志糾合の上に於ても、大同團本部を上海に移轉するを安全とし、假政府國務總理安昌浩に書を寄せて、上海に赴き假政府に投ぜむ意志あるを告げた、安昌浩は大に悅び、同志一人を京城に送り來りて、金嘉鎭、全協等と密謀し、更に〇〇〇を誘出せむとし、金嘉鎭は〇〇〇に面して利害を說くこと詳密であつた、〇〇〇の意動きたるを見て、金嘉鎭は歸家後一書を公に與へて曰く。

「小人今往上海計〇〇〇〇〇」云々と。

金嘉鎭は漢城政界の傑物

金嘉鎭は、極めて○○○こ親密にして、○の庶女は金嘉鎭の子に嫁するを約してある、金嘉鎭は更に○○○金春基を介して、○に上海行を慫慂したるに、十萬圓を準備せば之を決行せむこの回答を得たるを以て、金嘉鎭は之を全協に告け、○○○誘出の運動は悉く之を全協に托し、金嘉鎭は大正八年十月上旬、其の子義漢及李鍾郁、姜錦花を伴ひ、京城より京義線一山驛に出で、遂に上海に密走した。

金嘉鎭は、韓國時代には漢城政界に明星の如くに輝いた傑物であつた、明治二十八年の朴定陽內閣の時には、擢んでられて農商工部大臣こ爲り、二十九年には中樞院一等議官に遷り、三十年五月には黃海道觀察使に任ぜられ、三十三年には中樞院議長に轉じ、三十五年には宮內府特進官に任じ、三十九年には忠淸南道觀察使に任じ、四十年十一月には奎章閣提學に任ぜられ、併合當時には大韓協會顧問こして併合に反對し、併合後は男爵を授けられたるも快々こして樂まず、京城白雲洞の自邸に閉居して、逕蕩度無く、一時に數

金嘉鎭の家庭

人の妾を蓄へ、又曾て黃海道觀察使たりし時、海州より伴ひ歸りし一賤婦蘭葉こ云へる美妾に溺愛し、家庭の紛亂絕へず、長男金重漢は父を諫めて自殺を企てたるも遂げず、翌年遂に頓死した。

斯くて金嘉鎭の家庭は、蘭葉の爲に紊亂し、大正五年白雲洞の邸は、借金の爲に抛棄して、證府洞の一小家屋に移轉せし頃は、老骨憔悴顧慶せる籠に秋風落漠の感を深からしめ、愛人蘭葉は彼れが斯く零落せるこ見て、何れにか遁亡した、爾來彼は鬱々こして貧處し、書を記し畵を賣て辛ふして糊口し同族間に於ても彼れが極度の窮乏に對し、救濟する者一人も無かりしは、之れ自業自得なりこ評して居つた。

男爵家を弊の如くに棄てて、上海假政府に投ずるや、假政府の幹部は、憂國の士こし先輩こして彼れを歡迎した、彼は詳かに併合後の事情を語り、幹部に當時の朝鮮智識を注入した、大正九年三月彼は假政府の別動隊こして

大同團本部を上海に組織し、盛んに鮮內地に向つて煽動の布告文を發し、獨立運動の資金の調達には、鮮內各種資產家の人物を物色し、極力運動資金を徵發した、而して一面新聞及各種の印刷物を利用して、靑年の氣勢を煽り、基督敎の牧師を使嗾して敎徒を煽動し、假政府に對する一般朝鮮人の信用を增大せむとするこゝに於ては、彼は總ての智腦と手段とを投盡した、されば政府に取りては、彼は老ひたりと雖も唯一無二の顧問的地位に立ち、鶴首して○○○の來るを待つた。

金嘉鎭の思想に古ひてしまつた

思ふに、金嘉鎭の智腦は旣に古びてしまつて、昔日の金嘉鎭ではない、二歩も三歩も時代に晩れて居る、彼は徒らに朝鮮の凡ゆる階級を煽つて、朝鮮人を衰弱死滅に導かむとするのだ、漢城政界に於て曾ては朝鮮稀有の思想家として知られたる東農先生、今は痩せ飢へたる虎狼の如く、右手に佩を求め左手に不還を煽動するの狀、世人は寧ろ彼れの末路に一滴潛然の淚を禁じ得なかつた、嗚呼流水去て淙々、靑人去て滔々、朝鮮の靑人は唐に背き、明に

背き、淸に背いて、遂に日本に併合された、而して復た恩義と文明政治に反いて、果して何を爲さむとするのであらうか。

第五篇　獨立思想の運行　〔二〕

——假政府○○○を擁して號令せむとす——

——昔も今も他力本願の朝鮮人——

金嘉鎭が上海に奔りし後、全協は○○○の誘出に寢食を忘れて運動を開始した、是より先大正八年九月下旬、假政府より派遣の一員、上海より來りて○○○○內の附屬家屋內に於て、○○○○金春基と會見し、上海の形勢を說きて○○○○を假政府に擁立し、朝鮮貴族及重望有る紳士を誘出して、同地に脫走し、獨立運動に威勢を張らば、朝鮮の獨立は疑ひなかる可しと、金春基は大に之を信じ、直ちに○○○に之を勸告すれば、○は資金を調達して吳れ

昔も今も他力本願の朝鮮人

るならば此の際に應ぜむ意思を表示された、之を聞知したる全協は、莫大なる資金の調達が突差に出來得べからざるを自覺し、遂に意を決して陰謀を廻らし、巧みに○○○を誘出せむこと欲し、警務總監部囑託たりし鄭雲復を利用して、誘出の陰謀を決行せむことした。

全協思へらく、慶尙南道に○○○の漁基有り、詭計を用ひ漁業權に憑藉せば、○○○は必らず心を動かさむ、又鄭雲復は○○○の信用を得たるを以て鄭雲復を利用せば謀計容易に成就す可しこなし、全協は李在浩をして、鄭雲復を支那料理店に誘出し、鄭をして○○○に漁業權を賃貸せば、三萬圓を金主より納上せしむるの交渉を爲さしむるを約束した。

李在浩は、舊兩班にして、韓國政府時代には技師こ爲り、又宮中に出仕して侍從たりしこともあつたが、不幸にして辭職し、稍來遊惰こして爲すなく衣食に窮して浮浪士こ交を結び、騷擾以來陰に不逞の行動があつた、鄭雲復は素こ李在浩こは相識の間柄である、依て容易に在浩の言を信じ、遂に數回

書面を以て○○○に交渉せしに、○○○の意は動いた、元來○○○の漁塲は釜山在住の內地人香椎源太郎之を賃借せるが、該漁塲の收益多大なるを以て慶南沿岸の朝鮮人は、常に香椎を排して其の賃借權を獲得せむこし、往々上京して○○○○事務所に請願し、或は人を介して直接○○○に請願せしめ、此の間に於て一種の不正事件は絕へず仲介人こ請願者この間に行はれて居つた、然れごも○○○は、香椎この契約期間滿了後賃貸を約諾すこの條件にて此の際金主より三萬圓を借用せむこ申込まれた。

金主は富豪韓參判（錫東）こ稱し、全く架空の人物にして、全協は其の代理人李敏河こ詐稱して居つた、鄭雲復は、○○○の意を受け漁塲を捂當こして借金せむには、洵に易々たる問題ではあるが、此くては○○○○○○○の連署を要する等事は面倒なるを以て、漁塲賃貸問題は別關係こして借用し、香椎の賃借期間滿了後は必らず正式の契約書を交換して、金主に賃貸すべきを李敏河なる全協に通知すれば、全協は素より○○○誘出の謀計に過

ぎさるを以て、此かる煩瑣の手續を要せずして、借金の依頼に應ずる旨を答へ、且つ鄭雲復には周旋料として一萬五千圓を支給する約束を爲し、韓參判なる全協は一回○○○に面會して、其の確答を得其の席に於て三萬圓を交付すべしと巧みに胡魔化した、鄭雲復は之を信じ、大正八年十一月八日書を○○に送り、明九日夜某所に於て、金主韓參判等直接面議せむことを約した李晩公は直ちに之を諾し、指定の場所に參會すべきを回答された。

鄭雲復は○○○の回答を韓參判の代理人と稱する李敏河なる全協に通ずれば、全協は直ちに李在浩、鄭南容、韓基東、楊植等の團員と協議し、○○○の來會せば之を脅迫して、上海に出奔すべく決議した、鄭雲復は約に依り、九日午後八時頃公平洞三番地に至れば、○○○未だ來らず、當夜○○○は密かに邸宅を脱して里門洞在住の○○○の妾なる金貞宅の家に往き、其の妾宅に於て金圓を受授せむと通ぜられた、茲に於て鄭雲復は再三往復し遂に午後十一時に至り、○○○は車夫金三福を隨へ來會された。

全協及李在浩等は酒色を準備し、○○○及鄭雲復を雲應した、是より先○○○の未だ來會せざる前、全協等は大に鄭雲復を優遇し、朝鮮獨立に關する意見を問へば、鄭雲復は懇切に其の不可能なる所以を力說した、○○○の來るに及び、全協は鄭雲復を別室に誘ひ其の本心を語り、且つ潛伏せしめたる鄭南容及二名を其の室内に入れ、其の内一名は短銃を擬して脅迫し、鄭雲復に其の同意を求めた、鄭雲復は愕然として色を失ひ、僅かに意を決して○○○の室に歸り、○に對して「○○○○○」と勸言し、戰慄囁嚅其の意を盡すこと能はず、全協は遂に進み出でて、○○○を擁立して上海に逸走せむとする陰謀を打明くれば、○○○は遂に已むなく承諾された。

此の時短銃を持て○の室に入り來りし者あり、全協は小鞄を開きて紙幣を示し、○に告けて曰く、此の金總額四萬五千圓あり、此れ漁業權に投ずるに非ずして、獨立運動に使用するものである、更に薫昌律なる者を呼むで、金千圓を鄭雲復の家に送り屆くべきを命じた、蓋し此等の金額は皆虚僞にして

全協の所有せし金額は、僅かに四百圓餘に過ぎなかつた。

全協等は、〇〇〇の應諾を得て、直ちに公を人車に乘せ、又全協の指揮下に鄭雲復を縛せしめ、其の口に猿轡を箝めて人車に乘せ、羅昌憲、金中玉之を護送し、鄭南用は〇〇〇の從者金三福を監視し、徒歩して之に從ひ彰義門に至りて鄭雲復を下車せしめ、之を北門外に伴ひ、〇〇〇全協の一行と合し翌十日午前三時京畿道高陽郡恩平面舊亭里七十三番地の山中一軒家に至りて之を幽閉し、交々之を監視した。

〇〇〇は此の夜全協に謂て曰く、余は既に上海に赴くに決したるを以て、修仁洞居住の金興仁及看護婦崔孝信を同伴し、且つ李太王が外國人に受取るべき債權證書一百二十萬圓、其の他の秘密書類を革鞄に放置せるを以て、興仁をして之を携帶せしめよと、又李在浩に一書を與へて曰く、碑洞金春基（〇〇〇〇）の使と稱し、〇〇に此の書狀を呈せよと、李在浩は即時に其の書狀を携帶出發したるも、同夜は〇〇〇〇に赴かずして、自宅に潛伏し、翌

金興仁及看護婦を上海に同行せむとす

十日午前八時頃に至りて、鄭南容は李在浩を訪ひ、〇〇〇の切に妾金興仁の來るを待てりと告ぐれば、李在浩は諫洞に至り、車夫をして其の旨を金興仁に傳ふれば、興仁は豫め保管せる革鞄及旅行用の革鞄を携帶して、金春基及崔孝信と共に諫洞に至り、李在浩に面會せしに、李在浩は金春基の同行を拒絶し、興仁及孝信を伴ひ、恩平面の山家に歸り去つた。

〇〇〇は、金興仁及看護婦を、上海に同行せむとして呼び寄せたるも、全協は多人數を帶同せば發覺の虞れあるを力說せしを以て、〇〇〇は已むを得ず、二百圓を全協より受取り、内百三十圓を興仁等に交付し、興仁等は即時京城に歸つた、金春基は〇〇〇の彰義門外の山中に在りと聞き、大に狼狽し同志一人と共に、門外洗劍亭に急行せしに、鄭南容及李在浩は大に怒て曰く故に我等の計劃を妨害するやと、互に激論を始めた。

金春基は事態容易ならずと見て取り、恐怖して京城に歸つた、而して其の

逃走途中の警戒

日午後五時頃鄭南容、韓基東外一名は、〇〇〇と共に徒歩して京義線水色驛に至り、其の着用せる外套を脱して弊衣を纏ひ、翌十一日午前十一時三等列車に塔乘し、又同志の一人宋世浩は官憲の捜査警戒の狀況を探らむ爲め、南大門驛より乘車し、道中〇〇〇を監視隨行し、韓基東は〇〇〇の出發狀況を全協に復命する爲め、開城驛に於て下車し、宋世浩は平壤にて官憲の警戒狀況を調査する爲め下車して、次便の列車に塔乘し、鄭南用及李乙奎の二人李堈公を監視しながら、翌十二日午前十一時安東縣停車場に到着した。

是より先、〇〇〇の自邸を脫走するや、官憲は大に驚き、各地に電報して警戒探索せしめた、警報平安北道に達すれば、警察署は即時自働車を命じて署員を召集し、新義州警察署米山警部は、直ちに安東行列車に塔乘し、汽車國境を出でて安東驛に着すれば、米山警部は一々下車人の擧動を探査し、其の〇〇〇の一行を發見して、鄭南容は直ちに逮捕せられ、李乙奎は遁走し、〇〇〇は警官に保護せられて、京城に還り來つた。

　○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

嗚呼朝鮮の獨立思想は、上下を擧げての思潮なるか、國際聯盟の力に依て獨立しやうとか、亞米利加の同情と力に依て朝鮮の獨立を齎らさうとか、雲を攫むが如きことを考へて、朝鮮の識者も不識者も、種々の運動を繼續して見たが、此等の運動は總て駄目であつた、他力本position尊の朝鮮人は、昔も今も其の踏むべき道を誤まつて、而してもがき逝くのであらうか。

第六篇　齋藤子の德政と天道教

——世人擧つて當局の天道教解散を要望す——

——余は天經正義を論じて天道教を解剖す——

——齋藤子の天道教を活かすは德政の第一歩——

孫秉熙以下四十八名の發頭人の審理

是より先、大正八年三月一日、朝鮮獨立を宣言して、全朝鮮を騒擾せしめたる原動力たる、天道教主孫秉熙一味四十七名と、其の他數百人の騒擾關係者は、其の筋に檢擧せられて、京城地方法院に廻送せられ、直ちに豫審に附せられたるが、此の間審理に五箇月を費やし、同年八月一日豫審終結して、孫秉熙以下四十八名の發頭人は、內亂罪として一件書類は高等法院の特別刑事部に廻送され、爾後更に六箇月に亘りて審理は續行せられた、大正九年三月二十二日豫審終結の結果、本件は內亂罪は構成せず、從つて高等法院の特別權限外のものにして、普通保安法又は出版法違反を以て論ずべきものとし何れも「京城地方法院を本件の管轄裁判所と指定す」と決定されたので、再び一件書類は、地方法院に廻付せられ、結局同年九月三十日、天道教主孫秉熙、天道教道師吳世昌、天道教道師權東鎭外五名は懲役三年に處せられ、老齡の孫秉熙は獄中に病を得、歸家治療を許されたるも、久しからずして死亡した。

孫秉熙の死亡

當時天道教なるものに就て、當局は深く調査し研究する所はなかつた、天道教は宗教類似のものであるが、其の發端に溯つて之を論ずれば、一種の政治團體である、其の元祖は即ち東學黨だ、東學黨は韓末李朝の失政に因る產物であつた、之を政治團體と見做して之に解散を命ずるか、之を宗教團體と見做して不問に附するかは、長谷川前總督は研究と調査を下僚に命ぜられたが、結局伯の在任中には何れとも其の處置は決定せなかつた。

按ずるに天道教は、儒佛仙の三教を混化せる一種變態の宗教である、此の

宗教類似の道學

變態の宗教が、朝鮮人に如何なる感化を與へつゝあるかは、今玆には之を述べない、只朝鮮驅逐の發頭人たる天道教主孫秉熙と天道教に就て論述し、多年排日を鼓吹したる結果が、驕援の一瀉千里の勢を以て蔓延したる所以であるを、不肖は其の當局の依囑に依りて、天道教を調査論議したる一節を今玆に取捨記述して本篇を綴ることゝする

今を距ること六十年、我孝明天皇嘉永年間（李朝哲宗王の末年）慶尙北道慶州に崔濟愚と云へる人があつた、彼は新羅の鴻儒崔致遠の後裔と稱し、多少の學識を以て州人に重んぜられた、彼は李朝朋黨の國爭より來る、國運の衰微に乘じ、一種の野心を抱持して、大ひに爲すあらんとし、儒佛仙の敎道を打て一丸とせる、宗敎類似の道學を發表して東學と云ひ、我は道を天に享けたりと稱して、之を天道敎と名づけた、而して彼は韓末儒佛二敎の頽廢に乘じ、特に儒敎に抗對して、自由と民權を唱論したる結果、地方の常民は俄然として一種の信仰力を發揮し、對兩班の國爭的機運張り來つた、後は遂に

亂世の律

此機運に乘じ、此變體の宗敎を以て徒黨を參合し、名けて東學黨と云ひ、世を惑はし民を誣ゆるを以て、時の地方官は捕縛して之を慶尙北道觀察府に押送した、觀察使は之を韓廷に讓し、廷議之を法に處せんと決した、是れ即ち天道敎第一敎主にして、第三敎主孫秉熙は第二敎主崔時亨の法弟であつた。

崔濟愚の法に處せられんとするや、其敎黨崔時亨等稱するに儒法を以てし濟愚の寃を伸べんと請ふたが、廷議之を許さず、遂世惑民の名の下に亂世の律に中てられ、大邱に斷首せられて龍潭に葬むられた、時に年四十二歲、死に臨み彼は一詩を賦して曰く「龍潭水流四海源、龜岳春回一時花」と崔時亨は海月と號す、其の後を繼ぎて大道主と稱し、濟愚の遺志を繼承して、第二世敎主と爲つた。

明治二十七年（李太王三十年）崔時亨及孫秉熙は、全羅の豪傑全奉準と相呼應して、兵を全北古阜に起し、城を築き旗を樹て、遠近の徒相響應し、其の勢ひ十萬と號す、所在有司を殺し、官衙を毀ち兵器を奪ひ、倉廩を發き、官兵

を敗り、勢ひ風雨の如く、韓廷大に驚き屢々京兵を發して之を勦討せんこしたれごも、連戰連敗、東學黨勝に乘じて、全州の重鎭を陷れ、官兵降を乞ふ者多く、氣勢は大ひに振ふた、衆望全奉準に歸し王號を稱す、戰後東學黨の勢ひ散亂するや、天道敎は各種に分派し、或は侍天敎こ爲り、太乙敎こ爲り安心敎こ爲り、近年に至りては中心敎こ爲り、中心侍天こ爲り、濟世敎こ爲り濟愚敎こ爲り、靑林敎こ爲り、龍潭敎こ爲つた。

天道敎の分派

此く各種に分派し來りたるは、亂後天道敎徒の散亂に乘じて、各地方に敎徒を收拾して、之が小敎主たらんこする野心家の出現したからである、是より先、東學黨蜂起の後崔時亨は金演局、孫秉熙、孫天民の法弟の、敎徒間に於ける聲望隆々こして、各々相下らず、他日必らずや大ひなる衝突を來すの機有らんここを恐れ、金演局には龜菴、孫秉熙には義菴、孫天民には松菴の號を與へ、且つ三人列座の前にて孫天民に『荷蒙薰陶傳鉢之恩、守心薰陶傳鉢之恩』こ書せしめ、而して他日三人中の一人に敎統を繼がしめ、敎主たら

金演局孫秉熙孫天民

しむるの意を示し、之れ私意に非ずして天意なり、汝等三人相鬪ぐ勿れこ訓誡した。

變物せる一種の思想

亂後崔時亨は江原道に奔竄したれごも、明治三十一年夏(光武二年)遂に捕へられ、孫天民も亦續ひて捕へられ、同じく京獄に絞殺された、孫秉熙等も禍の身に及ばんここを恐れて上海に亡命し、續ひて日本に亡命した、孫秉熙の東京に在るや、姓名を李祥憲こ變じ、其生活の豪奢王侯に異ならず、在鮮の敎徒は一時其影を潛めたるも、彼等の變物せる一種の思想は、絶へず彼等の社會に流通して居つた、而して彼等の敎徒は穩密に巨額の金を集めて、孫秉熙の豪奢なる生活費を悅んで提供してゐた。

日露戰爭勃發するに及び、韓政界は親日派こ親露派こに中斷せられ、又別に米國派の有志は親米主義を標持し、大戰の結果に依りて、此三派は其親しむ所に走りて、一大勃興を爲すべき運命を荷つて居つた、日露戰爭は、日本の優勝に終り、親日派は俄然興起して、親露派は木の葉の散るが如くに露國

に亡命した、日韓保護條約成り、統監府の設立せらるゝや、明治三十九年一月、孫秉熙は李容九、宋秉畯等と相前後して、京城に歸り來り、天道敎は玆に公然京城に本據を築き、孫秉熙は自ら東學天道の正系を以て任じ、敎祖崔濟愚の得道したる四月五日を以て、天日紀念日とし、第二世海月崔時亨が敎統を繼ぎたる八月十四日を、地日紀念日とし、孫秉熙は正系第三世と稱した。

孫秉熙は正系第三世と稱す

天道敎の三分鼎立

玆に於て金演局等平かならず、宋秉畯は侍天敎本部を京城に置き、金演局は侍天敎總部を京城に置き、侍天の二派と天道敎とは、盛んに競爭し、天道敎は主として平安南北道及咸鏡道に勢力を有し、侍天敎總部は忠淸、全羅に勢力を有し、侍天敎本部は黃海、平安、江原に勢力を張つた。

此く天道敎は三分せられ、敎徒は各々其好む所の人物に奔つた、李容九密かに思へらく、三分鼎立此くの如くんば、天道東學の威令行はれず、宜しく他道を踏むに如かずとなし、宋秉畯と議して政敎混同の一進會を組織し、親

日韓併合は一進會の主唱

日主義を標榜して起つに及び、侍天敎徒及天道敎徒の一部は、李容九の下に走りて一進會員となり、宋秉畯は一進會顧問となり、諸派の中に嶄然として頭角を顯はし、半島を縱斷した、伊藤統監は、一進會長李容九を懷柔して一進會を操縱し、統監政治の味方たらしめた。

一進會は統監の信認厚く、庶民の畏敬する所となり、幷年ならずして全道の會員一百萬と稱し、前古未だ曾て見ざるの大同團結を成した、之れ實に敎祖崔濟愚の唱道せし天道の禦拜者にして、子孫父の論を守れる東學黨の殘黨と、李朝の政治に不平の常民であつた、彼等黨類敎徒は李朝兩班の壓迫と虐虐に堪へずして、一進會の羽翼の下に集まり來り、寧ろ統監政治の力に賴りて、民權を伸張し、生命財產の安固を得んとした、故に後年の併合は、一進會の主唱に依りて容易に成就したのであつた

併合後、併合に不平の親露派殘黨及び親米派は、滿洲及露領に奔り、上海及米國に奔り、親日派の獨占天下となり、或は榮爵を授けられ、或は榮職に

座した、左れごも一進會幹部の多くご會員は其處を得ず、寺內總督は明石將軍（時の警務總長）を介して、一進會の解散には數十萬圓の巨額を支出したるも一進會の某巨頭は之を獨占し、獨り李容九は潔白して、若干金を會員に配與したるも、多數の幹部員及會員は殆んご徒手空拳にして、村閭に歸り去つた而して狡兎死して良狗煮らるの評話は、數年京城及地方に徘徊した。

一進會員は孫秉熙の下に復す

此くて一進會員の大部は、孫秉熙の下に復歸して天道敎徒ご爲り、一部は金演局の下に奔りて侍天敎徒ご爲り、而して天道敎は第一世敎主崔濟愚以來第三世敎主孫秉熙に至り、連綿ごして直系的に緣續せる關係上非常の勢を以て發展し、昔日志を得ざりし一進會の幹部にして、孫秉熙の袖下に集まる者もあつた、彼等は頻りに活躍して、爾來十年に過ぎざるに一百萬の敎徒を集團した、一進會なる政治團は夙に其影を沒したるも、天道敎なる宗敎團は即ち政治團の變形ご爲りて別名を成し、機を見て彼等は朝鮮を代表して一大演劇を爲し得るの素地を築成しつゝあつた、孫秉熙は大名を渴望せる人物だ、

往年東學黨蜂起し國王宣諭使を派遣せし時、崔時亨、金演局等は解散して改制を見んご主張したるも、孫秉熙は頑ごして應ぜず、既に兵を擧けて此に至る大名を擧ぐるに如かずご云つたこごがある、彼れは徹頭徹尾大名に死せんこごを願つた人物だ。

豹は死して皮を留め人は死して名を残す

豹は死して皮を留め、人は死して名を残すは男子の本領である、孫秉熙は草澤の怪傑にして時世に迂濶なるも、朝鮮人は之を偉丈夫ごし、敎徒は之を神の如くに敬慕した、故に彼が一たび手を擧ぐれば、其敎徒は事の善惡邪正を判ずる遑なく、先づ彼れの願使に奔馳するのであつた。

天道敎に關する私見

往年の親露派は、露領滿洲方面に齒牙を磨けり、親米派の一部は米國に去り、其大部は鮮內地に留まりて米國宣敎使の袖下に隱れ、基督敎徒ご爲つたされば、之等の黨派をして不穩の言行を壓せしめんこせば、勢ひ天道敎徒を操縱せなければならぬ、余は大正四年天道敎に關する私見ご題して、寺內伯に長文の建議を爲したこごがある、然れごも寺內總督は斷じて之を眼中に置

かなかつた、孫秉熙は日に月に教線を擴張し教徒を結束し、而して教徒の淨財に依りて、京城に豫算二十萬圓の教會堂大建築に着手した。

不肖は元一進會幹部の一人に故ありて親交があつた、一日不肖は寛談して天道教主孫秉熙の志容易ならざるを知り、直ちに、前田憲兵司令官（時の高等課長）を官邸に訪ひ、天道教の現狀を語りて、孫秉熙を懐柔するか或は天道教を解散せしむるかの二策を獻議した、時大正七年五月獨立騷擾勃發の約十箇月前であつた、然れども前田少將も天道教を頗る輕視し、不肖の獻議を問題にせなかつた、不肖は去て朝鮮通の鮎貝房之進君を訪ふて所思を述ぶれば君も不肖と同感であつた、不肖は更に中樞院參議李謙濟君（元一進會領袖）と會して立策し、結局天道教を切り崩す事とし、計は密なりしも余輩の微力にては之を如何ともするこゝは出來なかつた。

余の獻議は問題と爲らなかつた

天道教を論ず（天經正義の價値）

騷擾勃發直後不肖は蜀に依り、天道教の教義の如何なるものなるを知らん

天經正義の價値

と欲し、當時天經正義を讀む、其論學文（原漢文）に曰く。

「按ずるに敎祖の遠祖、新羅の文昌侯致遠は、道德文章を以て一世に著名なりしが、其の遺偈に曰く、我が東の道氣が淵綸長存し、後世には必ず至德の者興るこゝ有るべしこゝ云ひたれば、是れが文獻の宗こ爲り、爾來其學を世傳して、敎祖の父近菴に至り（崔濟愚の父を云ふ）林泉に逍遙して後學を訓進せり、敎祖は幼時より家庭傳來の學を得、長成するに及び、一世の道德將に泯亡せんこするを見て、慨然こして之を挽回するの志有り降世三十八年冬、湖南に遊びて南原の閼寂菴に至れり、是時に僧徒齊集し佛法を演揚し居りたるが、敎祖は心に留めて之を聽きしに、釋迦世尊の示寂の身が、宛然復見するが如き心地せり、乃ち悠然こして喜び一室に淨居逕に論學文を作りて曠感の意を寓せり、東洋の人は五帝の言を以て儒仙の敎を傳へ、又釋氏の言を以て佛敎を傳へ、而して西洋人は耶蘇の言を以て

論學文を作りて曠感の意を寓す

天主教を傳へて之を奉ず、是れ東西古今の世人の學ふ所のものなり、今夫れ論學文は世人の學ふ所を概論し、又吾が道の古今無比なる大法を言ひ、以て之を來學の者に示して其心を明かにし、其理を察して自得する者なり學者此に於て其條理を翫味して之を解すべし。

夫、天道者、如無形而有迹、地理者、如廣大而有方者也

註釋曰、天道とは無上に無窮なる進化を有するを言ふなり、無形の如くにして迹有りとは、太虛の間に經緯の度と赤　黃道有りて是れ皆な無形なるが如きも、日月星辰其の上に行き、以て萬物變遷の迹を成すを言ふなり地理とは即ち大塊にして無限なる境界を有するを言ふなり、廣大の如くにして方有りとは、大塊の面に南北の輕炎凉の帶ありて、是れ皆な廣大なるが如きも、水火木土に位し、以て五行の方を成すを言ふなり。

天なるものは無上の尊稱にして、道なるものは無窮の代名也、太虛は經緯有りて三百六十度と爲し、緯橫は百八十度を有し、赤道は中帶の圈を爲し、其外に南北の兩黃道の圈を有し、又其外に南北の兩黑道の圈有り、是れ皆な無形の象なれども、日月星辰其の上を行きて、萬物變遷の迹を成す此れ乃ち天道學の所以なり、地なるものは一撮土の多きものなり、理なる者は無限の境界たるものなり、大塊は南北の輕を有し、中は熱帶を爲し、其外に南北の兩溫帶有りて、又其外には南北の兩寒帶を有す、是れ皆な廣大の面にして水火金木土が其上に位し五行當王の方を成す、此れ乃ち地理學の所以なり」とぞ。

天道とは無窮なる進化を有するを言ふ

萬物變遷の迹を成す此れ天道學の所以也

故、天有九星、以應九州、地有八方、以應八卦

註釋曰、天に九星有りて以て九州に應するとは、天に二十八宿と紫微等の星象有りて、地方の分野に應するを言ふなり、地に八方有りて以て八卦に應すとは、地に子午卯酉辰戌丑未等の方面有りて卦に應するを言ふなり。

按するに、天に二十八宿及紫微等の星象有りて、其の分野を各定し、氏

周の文王は後天の數を說き以て八卦の位を定む

房、心は東方の分野を爲し、尾、箕、斗、牛は東北方の分野を爲し、女、虛、危は北方の分野を爲し、室、壁、奎、婁は北西方の分野を爲し、胃、昴、畢は西方の分野を爲し、觜、參、井、鬼は西南方の分野を爲し、柳、星、張は南方の分野を爲し、翼、軫、角、亢は南東方の分野を爲し、紫微は中に居る、此れ星象の地方に應するの說也、又按するに、伏羲は先天の八卦を始劃し、周の文王は後天の數を說き、以て八卦の位を定め、北方を坎宮と爲し、南方を離宮と爲し、東方を震宮と爲し、西方を兌宮と爲し、西北方を乾宮と爲し、西南方を坤宮と爲し、東北方を長宮と爲す、此れ地方易卦に應するの說也。

而有盈虛迭代之數、無動靜變易之理、陰陽相均

註釋曰、而有盈虛迭代之數とは、既に盈ちたるが將に虛しからんとし、既に虛しきが將に盈つらんとして、明暗相繼ぎ、炎涼互に生するの數を有するを言ふなり、無動靜變易之理とは、乾は動き坤は靜まりて、乾は靜に

天に星象ありて地方に應ず

變することなく、坤は動に變することなき理を言ふなり、陰陽相均とは、一陰一陽互に中和するを言ふなり。

夫れ天に星象ありて、以て地方に應するが故に、地は經緯緯橫の數を有して、而して光浪其上に流れ、秤に盈ちて進みて晝夜相繼き、冬夏互に至る、是れ乃ち盈虛迭代の數なり、且つ地に方位有りて以て易卦に應するが故に、卦は乾動坤靜の理を有して、乾は父と爲り、坤は母と爲り、震は長男と爲り、巽は長女と爲り、坎は中男と爲り、離は中女と爲り、艮は少男と爲り、兌は少女と爲る、是れ乃ち動靜不變の理にして、即ち一陰一陽之れ道と謂ふものなり」と。

之れ實に、天道の正義を語れる論學文の一節である、天なるものは無上の尊稱にして、道なるものは無窮の代名也、天道教第一教主崔濟愚は、天主より此無上の尊稱無窮の道を得たりと稱し、其の天經正義なる一冊は、易を根據として、陰陽の法、動靜の理を語り、以て儒佛を混合して一種高遠の理想を

儒佛を混合して一種高遠の理想を說く

說き、遂に天靈崔濟愚の躬に降臨し賜へりと、是れ乃ち人間の維新、天道循環の大運也と歸納し、以て巧みに敎徒に說法の綱領を組織せるものにして、人間の衆愚は之を欺く可けんも、苟くも易を讀み、儒學に志せる、格物致知の有識は、誰か之を讀んで苦笑せざるものあらむや、然れども沒識を說くの方便としては、不肖は決して之を幼學とは爲さない。

寧ろ彼が、李朝排佛の結果、生民の精神海に、大いなる波紋を起しつゝある時代の趨勢を觀取し、邊僻の群類を一種變體の宗敎に依りて結束し、以て暴政の下に隱忍したる磊魂を發揚し、人心を一代に收攬して、乾坤一擲の事業を試みんとせし儒流の一遊俠たりしを多とするものである、人間の弱點と蒙昧に乘じて事を成さむとする者は、多くの場合に於て成功する、眞宗本願寺は常に財政紊亂して、醜體百出せるも、敎徒の信仰力は絕へず淨財を喜捨して、整理を促がしつゝある、敎徒の信仰は絕體的のものである、絕體的の前には名譽も黃金も塵埃の如しだ、而して天靈なるもの敎主崔濟愚に降臨した

人間の蒙昧と弱點に乘して事を成す者は成功す

敎主の最も苦心せし所

るを信せる敎徒は、喜んで一身を提供し、黃金を提供した、此くて後年の天道敎主孫秉熙は、此點に着眼して人心を繫きつゝあつた。

彼は宗敎類似の一種變態思想を標榜し、科學に非ず道德に非ず、佛敎も基督敎も、天道より視れば何れも枝葉にして其內に包括し、或は超越せる絕大にして無窮の道なりと絕叫し、而して其の信仰の力に依りて、人間の自由を得、苦痛を醫し、煩悶を押へ、病魔を治するを得べしと爲し、如何にして天靈と合致せる敎主を信仰せしめんかに就ては、彼れ敎主の最も苦心せし所であらう、昧者が此天靈を崇拜して、敎主を信仰するに至れば、事餘の群小問題は、破竹の勢を以て解決せらるゝ、人間の道德以外に宇宙の根元を爲せる天道が存在して、人間の爲し能はざる所の無上の天靈無窮の道を得て、高遠絕大なる天地の理を說きて、遂に昧者の心を收攬し、其の然らざる者も一の好奇心に驅られて、敎徒と化するに至つて、彼れは私かに我事成れりと微笑しながら、月に年に集まり來る敎徒の有力なる者を道使として之を操縱し、

何等の發見無く何等の創造無し

余は天道敎の本體に少なからず侮蔑の念を禁じ能はず

天道の凡ての敎義に超越して有難きを唱道せしめた。

彼れが凡ての物に超越したりと稱する天道論學文なるものを詳讀するに、彼れ敎主には何等の發見無く、何等の創造無く、一に先儒の糟粕を嘗めたる儒道と仙道の殘骸を捉へて敷衍せるに過ぎざるを觀るに及んで、不肖は天道敎の本體に少なからず侮蔑の念を禁じ能はない。

此くて彼れ敎主は、政治上一種の野心を包藏したる證跡を顯現した、彼の變體の宗敎は、徐々と其臀尾を動かし始めた、李朝當局の漸く彼れの言動に注目するや、彼れは一面に其の活路と遁路とを拵へ、從來天道の高遠にして無窮を說ける舌根未だ乾かざるに、彼れは驚くべき破格の一歌を創造し、之をして敎徒に傳へしめ、當局に媚びんとした、彼れは朝鮮民族の日本に對する舊怨を敎徒に提唱した、舊怨を提論せば元寇麗寇其の曲果して何れにありや、彼れ自ら宗敎家と稱し、天道敎主と稱せる濟民の士が、民族の舊怨を敎徒に新たにす、之れ果して似而非天道敎主に非ずして何ぞや、彼れが創造せ

排日の鼓吹歌

天道敎の矛盾

し歌は、安心歌と稱するものにして、排日の鼓吹歌である、今其の一節を龍潭遺詞より揭載すれば。

（前　略）

嗚呼危險なる哉我國の、前途の運命危險なる、犬に等しき彼の倭奴、我が國民の讐敵ぞ、既往の壬辰其の時も、鰲城漢陰無かりせば、玉璽の保存奈何せん、誰か其任に當る可き、吾れ亦天の命を受け、玉璽を保ち奉らん、そも我が國の衰運や、猶いつ迄ぞ續くなる、犬に等しき彼の倭奴譬へ方無き仇なるぞ、神の御命に隨つて、天時と地利を利用せば、犬に等しき倭奴をば、一劍をもて殲滅し、大報壇に祭りして、無窮の幸福享く可けれ。

（後　略）

之れ何等の矛盾ぞや、天道の無窮を說て、高遠の理想を鼓吹せるかと思へば、忽ちにして卑劣にして醜惡なる排日歌と化す、敎主の人物の小にして、其の天道の絕叫の大なるだけ、却つて滑稽の感を深ふするではないか。

二世三世彼等の敎主と敎徒は、明治大正聖代の下、隆々たる日本國運の總督政治下に於て、此くの如き不埒極まる唱歌を口吟し、自ら文明の化育と、親誼の友より遠かり、好んで時代と逆行し、遂に彼は大正八年三月親米派の浮浪士と通じ、基督敎徒と相呼應して、朝鮮の獨立を絶叫し、敎徒は之に唱和して、全朝鮮を騷擾喧囂の社會と化せしめた。

天道敎は撲滅す可き乎、否々撲滅するを要せず、不肖は天道敎の敎理の價値無く、其天道敎の本體に少なからず侮蔑の念を禁し能はずと雖も、こは格物致知の識者に對する論明にして、衆庶を傳導する方便としては、孔子の所謂天人合一の思想と一致し、儒佛仙の三敎を統一融和せる、東洋趣味の宗敎の組織を成し、佛敎を經として其主成分とし、儒敎の倫理道德を緯として、仙道を加味し、李朝の儒佛衰頽の因襲を悟脫せる點に於て、取て傳導に値ひするもの無しとは謂はない、不肖は只だ彼が宗敎の美名に隱れて、政治上に容喙し、政敎を混同したる布敎の形式を取り、特に排日を鼓吹したるか如き

治安の妨害者たり、獨立思想、祖國回復思想の鼓吹者と爲りて、一般朝鮮人の進むべき善良の道を踏み迷はしむるに懶爲し、騷擾の當時當局に獻言して此の機會に天道敎なる政敎團の解散を主張したるも、世は齋藤新總督の文化政治と爲り、一視同仁の政治は、一夫も其の處を得せしめむとし、天道敎は幾だびか當局の論題に上りたるも、齋藤總督は、天道敎が若し將來政治上に容喙して、何等治安を妨害するなく、眞に一種の宗敎と云ふ見地に立て、哀々たる朝鮮の庶民を傳導し、天道の德を天下に布き、其の敎理の告ぐる所の安心正義の域に達せしむるに努力し、改過遷善の美德を發揮せば、必らずしも之を解散せしむるを要せずとの見地に於て不問に附せられ、天道敎は危機一髮其の解散を免かれた。

眞に君子の德は風の如く、小人の德は草の如しだ、天道敎は齋藤子の德政に涵育せられて、爾來朝鮮人の踏むべき道を步みつゝある、實に齋藤子が、文化政治の壇上に立て、德政主義を朝鮮に行ふの第一步であつた。

第七篇　民度に超越せる教育制度

——朝鮮人教育と同化の惱み——
——大學の設置などは尚早だ——
——新教育制度の豫算膨脹す——

朝鮮教育制度改革

齋藤總督は、從來の朝鮮教育制度をも、之を改革せむとするの意有り、特にハイカラ政治家永野政務總監は、教育制度に大革新の必要有るを認むと揚言した。

成る程武斷政治十年間は、其の社會と其の民度とに應じて、簡易實益を主とするの趣旨に因りて、教育の機關は施設されたのであつた、即ち普通教育を主とする公立普通學校以外には、實業專門の學校が施設され、後ち民度の漸年發展するに從ひ、高等普通學校が京城に設置されて居つた、文化政治の

文政統一の根本問題

當局は新に師範教育及大學教育を加べ、且つ普通教育、實業教並專門教育の程度を進め、內鮮共通の精神に基きて、同一制度の下に其の施設の完整を期せやうとするのである。

此の改革の趣旨に對しては、不肖は敢て異論したくはないが、其の文政統一の根本問題に就ては大に議論がある、之は實に我朝鮮統治上重大なる問題にして、寺內總督時代に於ては、當に懸案と爲つて研究されつゝあつたやうに考ゑる、文化政治の當局は愼重なる研究と調査とを積むだ結果であらうか只內地延長主義だの文化主義などと云ふ美名に騙られて、漫然と改易施設するものであらば、それは噬臍の悔ひを殘すことを免かれない、不肖が文政統一の根本問題と云ふのは、文政の統一は即ち內鮮人同化の積極的事業と見ねばならぬ、朝鮮の民度は突飛にも內政文政を統一する程度には、斷じて進步してゐない、のみならず積極的同化政策を採るまでに、朝鮮人の思想は平靜ではない、騷擾後の朝鮮人は、上下共に反日本、祖國回復思想が旺盛なる時

臨時教育調査委員會

期ではないか、不肖は此の教育制度の改革、内鮮文政の聯結なる點に對しても、當時は決して其の時期に非ずと反對の議論を發表した。

然れども當局は遂に臨時教育調査委員會を設くることゝし、大正九年十二月同會の規程を發布した、而して同會は總督の諮問に應じ、朝鮮教育に關する重要なる事項を調査審議するの機關とし、水野政務總監其の委員長と爲り其の他の委員は總督府の高等官中より任命するの外、内地及朝鮮に於ける教育に關し學識經驗ある内鮮人に囑託し、大正十年一月既に第一回會議を開き愼重審議の上初等、中等、專門、大學其の他の各教育系統に就き、當局の提示したる原案に對し左の決議を爲した、大體それは當局の意見だ。

一、朝鮮教育制度は事情の許す限り内地の教育制度に準據すること。

二、朝鮮人教育に關し特別の制度を設くる場合と雖も各制度の下に内鮮人を合同教育するを妨げざること。

三、内地朝鮮間の學校聯絡を一層密ならむること。

教育制度の特例

四、向學心を尊重し事情の許す限り之に應ずる施設を爲すこと。

更に大正十年五月、第二回委員會を開催し、教育系統の前記大綱の實施に關する當局提出の具體的成案を審議し、一二字句の修正を加へたる上、大要左の如く決定した。

一、朝鮮の教育制度は内地の制度に準據す但し左の特例を設く。

（イ）普通學校は内地の尋常小學校（修業年限六年）に高等普通學校は内地の中學校（修業年限五年）に女子高等普通學校は内地の高等女學校修業年限五年に準ずるも、各校共に均しく教科目に從來の如く朝鮮語を加へ日本歴史及地理に於ては特に朝鮮に關する事項を詳かならしむ。

尚普通學校に在りては、土地の事情に依り修業年限を四年若くは五年に短縮することを得せしめ内地の高等小學校に準じ修業年限の高等科を置くことを得せしむ。

（ロ）實業學校は内地の實業學校に準じ其の種別に依り修業年限を定め

特に學科目に朝鮮語を加ふ。

（八）專門學校、大學豫科及大學は内地の制度に據る。

（ニ）師範學校は大體内地の制度に準ずるも教科目に朝鮮語及漢文を加へ歷史地理に於て朝鮮に關する事項を詳設す。

二、實業學校、師範學校、大學豫科及大學に於ては内鮮人の共學を行ふ。

三、居住内地人系統又は朝鮮人系統の普通教育機關は希望に依り朝鮮人又は内地人を交互に入學せしむることを得せしむ。

四、私立學校に對しては内地の制度に依る。

之は眞に朝鮮教育制度の改革既定案だ、此の改革位ひ總督政治の大變革は先づあるまいと思ふ、憲兵制度の撤廢されて、普通警察に改正されることは、單純なる治安問題に過ぎないが、教育の改革は精神上の問題だ、思想も民情も民度も民族性も十把一束して、内鮮人を一律並行の文政下に統一せむとするや、俄然朝鮮人は何故に朝鮮語を以て

教育の根本ぢせないかぢ呼び出した、難澁なる日本語を以て兒童を教育するのは生徒の能率を害し、教育の効果を減殺する所以なりとし、甚だしきは朝鮮人教育を統治の政策に利用するものなりぢ認叫した、朝鮮人が其處に出るのは當然だ、當局は朝鮮教育界の偉大なる進歩なりぢ宣言せしも、朝鮮人の思想界は、當局の施政施設ぢは大分遠き隔りがある、朝鮮民族は朝鮮人本位の教育を要求するのだ、而して其の要求の聲は朝鮮人が民族的自覺の進むに從ひ、輿論の聲ぢなつた。

茲に於て當局は、普通學校、高等普通學校、實業學校等の教科用圖書の編纂に關する審議案を提出し、委員會は幾多の審議を重ねて、大要左の如く決定した。

一、教科書用國語假名遣諺文綴字法國文朝鮮文の併記及朝鮮諺文の作成等に關しては別に委員を設けて調査すること。

二、教科用圖書の材料は一層生徒の性情趣味に適するものを選ぶこと。

教育制度の延長

而して國語を常用する者即ち內地人は小學校、中學校又は高等女學校に入學するこさを得るこさし、朝鮮語を常用する朝鮮人は、普通學校、高等普通學校女子高等普通學校に入學するこさを得るこさに定め、當局は大に手加減を用ゐるの已むを得ざるに至つた、帝國の教育制度は朝鮮教育　に依りて、內地より朝鮮に延長したこさは云ふものゝ、言語風俗を異にし、特殊の事情ありこして、普通教育に於ては國語を常用する內地人こ、否らざる朝鮮人こに依りて學校の名稱系統を區別し、內地人は小學校、中學校又は高等女學校に於て教育し教育し、朝鮮人は普通學校、高等普通學校、女子高等普通學校に於て教育し前者には小學校令、中學校令、高等女學校令を引用し、後者に對しては別に夫々規程を設けた、普通教育機關は斯くの如く、兩者其の名稱系統を異にして出發した。

朝鮮人は、朝鮮教育を統治の國策に利用するこさは怪しからぬこ云ふが、我帝國が韓國を併合せし精神を顧みるこき、日本人こ朝鮮人を打て一丸こす

國語の對立は兩民族の對立を誘引養成す

る所の內鮮同化が、朝鮮統治の大方針であるならば、朝鮮人教育が我國策より出發せねばならぬこさは當然だ、寺內伯は『朝鮮人同化が、我れに有利なれば同化する、不利なれば同化せざるまでぢや』こ云はれたが、慥かに其の通り、文化政治の當局が既に內鮮文政を統一するこさは、同化達成の根本政策を此に發見せむこしたのであらう、然らば日本人本位の教育を以て朝鮮を覆はなければ駄目だ、グイこ踏み込むで話をすれば、國語を用ひたり朝鮮語を用ひたりして兒童を教育するこさは、兩語の對立兩民族の對立を誘引發成するこさ云ふものだ、迂散にも同化主義なこ云ふものが當局の頭に無ければ存外單簡明瞭だか、苟くも內鮮同化を親の仇でも取るやうに徹底させやうこするならば、教育の根本に於て、教科書に於て、純日本主義で朝鮮を獲ふ可しである、何も暫らくの不自由だ、朝鮮人普通學校に其の兒童を教育するに於て、國語のみを以て教育するの惱みは、言語に絕するこさが有るであらうが、それは內鮮同化の根本より論じて仕方のない事だ、性年獨逸が白耳義を

朝鮮教育の結果は混血兒同然

占領して、獨逸語の教科書に依りて白耳義子弟を教化せむと策したことも、同化策の積極的現はれだ、其處まで徹底せなければ、內鮮教化も同化も斷じて行はれはせない、然しながら不肖は尙問題がある、一體當局は本當に內鮮人同化を達成する積りなのか、此の分限を明白にせずむば、內地人も朝鮮人も將來一大苦境に沈淪せざるを得まい。

同化不同化が問題でなければ、朝鮮教育は朝鮮人本位であつて宜しい、同化が最大目的であるならば、勿論日本人本位の教育、教科書でなければならない、言語や風俗を異にし、特別の事情有りとして之を認むるならば、朝鮮教育の結果は混血兒同然ではないか、而して尙當局は『教科圖書の材料は一層生徒の性情趣味に適するものを選ぶこと』何ぞ矛盾不徹底の甚だしきや、朝鮮の民族性を改鑄し、低級醜惡なる趣味を革新するは、當局が同化主義より出發する、教育の任務ではないか、三つ兒の魂百までと云ふ諺有り、兒童の柔軟にして鋭敏なる頭腦の發育時代に於て、日本的に教化することが必要

羅馬撞頭の機有らば羅馬語の賜だ

して、普通教育時代に之を改鑄教化することを敢てせぬならば、高等學校大學時代に於ては、到底朝鮮民族性を抛たしむることは不可能である。

斯かる不徹底なる朝鮮教育令に因りて、育て上げらるゝ內鮮兩民族は、遂に對等に發育する內鮮兩語の發展に因りて、對抗心對立心は彌が上にも發達せざるを得まいではないか、羅馬は夙に亡びても羅馬語は蔓こつてゐる、羅馬語の蔓延する所、羅馬の精神は殘留してゐる、羅馬擡頭の機有らばそれは羅馬語の賜だ、我帝國は朝鮮及朝鮮人を併合したが、其の朝鮮語を併合する能はざる所に、大なる惱みが潛むでゐるのだ。

斯くの如くにして、朝鮮教育令に因りて動いて居る、官立大學が出來ると云ふことに宣告されれば、朝鮮人は全道を擧けて熱狂的に民立大學期成準備會と云ふものを設けて、朝鮮人は純朝鮮人本位の大學を私立にすることにして、一千萬圓の金を民間で集むると騷ぎ立て、全道の有識階級は氣焰を擧けて見たが、其の實行は出來なかつた、朝

に鮮の民度はまだ〳〵決して少數の有識階級が想像するが如き民度ではない學齢に達した兒童にした所で、漸く二割五分位ひの程度が就學し得るに過ぎない狀態ではないか、そこに以て來て當局が內鮮文政を統一して、內地同樣の敎育程度と學校とを設置せむとすることが、既に間違つてゐる、官立にせよ、民立にせよ多額の費を拋つて大學設置などは沙汰の限りではないか。

大學設置などは沙汰の限り

凡そ朝鮮の政治は、其の民族性を究め、民度を知り、其の民族心の動く機微を察せなければならぬ、我朝鮮統治の大方針と云ふものは、一定にして不動のもしである、併しながら其の統治政策なるものは、機に臨み變に應じて動きもせなければ躍りもせなければならぬが、其の動き其の躍ることは、民族心の機微を察して之を民度に照らし善處する所の方策がなければならぬ、而して其の方策は治者たる我帝國を本位とせなければならぬ、被治者たる朝鮮本位と云ふことが有らう筈がない、總て朝鮮の統治は帝國の有利であるか、不利であるかに基調して其の政策は動き躍らなければならぬ、文化政治の當

局者が口癖のやうに、朝鮮本位朝鮮人本位の政治を布くと唱導するのは、一體何ふ云ふ譯であらうか、朝鮮人本位の政治政策で動くならば、何の爲めに朝鮮を併合したかと云ひたくなる。

日本帝國の朝鮮ではないか

屢々言ふやうだが寺內伯は『同化我れに有利ならば同化する、我れに不利なれば同化せないまでぢや』と言はれたが、其の見識有りて始めて併合の價値がある、朝鮮人本位で政治するならば、不肖が往年併合に反對したことで決して無意味ではなつた、苟くも併合した以上は朝鮮は日本帝國の朝鮮ではないか、而して文化政治の政治政策を內地延長主義と銘打つ以上、內地本位の延長ではないか、內地本位の延長ならば朝鮮本位と云ふことは矛盾であらねばならぬ、總て內地主義で押し延し、一視同仁で押し延さねばなるまい、曖昧な言ひ分をしたり、被治者に媚ぶる樣な其の場遁れの政治は、結局朝鮮人を五里霧中に彷徨せしむるに過ぎずして、何の得る所はあるまい、須らく日本帝國主義で統治せなければ、朝鮮統治の結着は見ることが出來ない、文

政を統一するまでに進むだ以上は、朝鮮教育は日本主義で覆ふがよい、日本語を用ひたり朝鮮語を用ひたりすることは既に野暮の骨頂だ。

朝鮮教育制度が、東京の教育家と當局の智腦を集めて、衆議した結果のものとしては、不肖等は實に心外千萬だ、前にも述ぶる如く、總じて帝國の延長したる帝國内に、日本語と朝鮮語の二語を對立せしめて、内鮮兒童を保育することは、決して同化を達成する所以でない、朝鮮人は騒擾以來滔々祖國回復志想が養成せられつゝありて、今や擧島一致の民族思想ではないか、而して朝鮮民族は此新教育制度に因りて、益々不生産的高等遊民を養成し、思想界は年を逐ふて奮興するであらう、一體朝鮮の民度と社會狀態に於て、大學などを朝鮮に拵へ、法科や醫科や農科などに學生を養成して、何ふする積りか、大學教育でも受けやうと云ふ者は、東京大學でも九州大學でも、遊學の地は呼べば答へむ近距離にあるではないか。

朝鮮の現狀は、突飛にも内鮮文政を統一したり、大學などを創立せずとも

同化を達成する所以に非ず

普通教育に專門教育に一機軸を出せばよい、當局は此の新教育制度の豫算膨脹に因りて、普通教育にも專門の教育にも、羽翼を伸ばすことは出來まい、而して久しからずして教育行詰りの悲境に搔き苦むであらう。

教育行詰りの悲境

第八篇　産業革命の範圍

一、農業の進歩時代

政治的革新と經濟的革新

朝鮮の社會整理は、武斷政治十年間に於て、大體に其の目鼻が着いた、政治的革新と經濟的革新とに因りて、朝鮮は著しく整理し發達の機運を催むだ、然るに武斷政治の終末期より、文化政治時代に、政治上の意味に於ける朝鮮騷擾に因りて、産業發展の機運を阻碍されたことは著しかつた。

武斷政治時代の産業革命は、政治的に産業的に顯發したる朝鮮民族が、原始的時代より人間の自由的權利を樂まむとする所に於て、革命が行はれつゝあつたが、文化政治時代に於ては、朝鮮民族が自由民權を樂むことが出來る社會に於て、産業界の原始時代乃ち自然界を征伏しやうと云ふやうな力が利用されむとする趨勢を迎へ、實業者が奮起しつゝあることに因りて、朝鮮産

電大にして記臆すべき事件

業界は玆に第二の革命時代に遭遇したことも評することが出來る

朝鮮産業の大宗は農業である、朝鮮の農業は總ての他の産業を支へ得る所の最も大切なる産業である、武斷政治時代寺内伯が、土地制度を確立し、農業制度や土地經濟が起つて、迅速に增加したる米穀を以て、國民的需用に應ずることが出來たことは、極めて重大にして記憶すべき事件であつた、朝鮮騷擾に因りて、一時朝鮮農業は再び暗黑時代を現出しはすまいかと考へてゐたが、農業を抛棄してまで彼等は騷擾の渦中には沒頭せなかつた、一年位ひは土地を休ませても構はない、休ませて租稅を納めまいと私議したと云ふことも傳へられたが、農耕を休むやうのことはなかつた。

而して文化政治の逐年普及するに從ひ、農民の勞力を省くべき農具は續々内地より移入せられ、農民は土地を奇麗にし、又肥料に依て地力を恢復することの効能を切實に感ずるやうになり、農家の副業は奬勵せられ、道廳よりは、牧畜に或は家禽飼養上に便宜を與へられ、朝農業法とも云ふべき現代の

朝鮮農業は、肥料の供給を副業に仰がざる可からざる有樣なるを以て、牧畜事業は益々盛大ニ爲り、養蠶業は隆盛ニ爲り、家禽飼養も相當に發展して來て、農業界の進歩は刮目に値する。

農業の進歩に費やせし人事と經濟力

斯く朝鮮の農業が進歩發達し來るに從ひ、農地に資本を投ずるこニ益々多きに至り、當局が設置せし金融機關は、土地を擔保ニして低利の金融を爲して農民に便宜を與へ、或は耕作法の進歩を圖らしむる等當局が農業の進歩に費やせる人事ニ經濟力ニは、洵に多大である。

二、工業の進歩時代

農業上の面目が一新し、産業革命に伴ふ生産の方法改良せられて、生産物の增加を見るに至りし爲め、工業組織の變更を必要ニするの時代が迎へられた、當局は夙に之が改良發達を促進せむこニし、各道地方費に國庫補助を交付し、恩賜授産事業ニ相俟て、或は各地の工業傳習事業、又は有望なる工業に

工業に關する教育機關

對し、金品を交付して經濟上の便宜を與へ、又は技術員を派遣して技術上の指導を爲さしめ、或は諸般の工業傳習又は講習事業を直營せしむる等、各道の實況に應じて適切なる施設を爲さしめた。

而して一面京城に中央試驗所を設置して、工業に關する諸般の調査試驗及分析の結果を公表せしめて營業上の參考に資し、又一面漸次工業に關する敎育機關の設備及課程を改善し、又工業專門學校を開設し以て工業智識の普及ニ技工の養成に努めた、之は武斷政治時代よりの工業政策であるが、文化政治は此の工業政策を踏襲して、着々其の改善進歩を促がし、或は蒸氣力や、機械力を使用するの域に達せむこニし、爲めに製造事業並に製造品は、全く從來ニ其の面目を一新せむこニし、隨つて工業經濟は今や一變して、發展して來た。

朝鮮人工業の主なるものニしては織物業である、綿布は各地到る處產出せざるなく、就中慶尙北道、平安南北道、黃海道及京畿道は其の產出最も多く、

農家婦女子の副業的産物にして、棉花を手紡し、居織機にて製織してゐたが近年改良織機の「ハツタン」又は足踏織機を以て製織するものが漸次增加して來た。

朝鮮紬の著名なる產地

絹織物は、江原道平安南道及慶尙北道に產出し、多くは明紬と稱する平絹の類にして、平安南道成川、寧邊、熙川、德川の紬、江原道鐵原紬、咸鏡南道永興紬は最も著名である、是等は皆織り上げの後、灰を以て精練し且つ染色して男女の衣料に供するものである、麻織物は忠淸南道、慶尙南北道、咸鏡南北道、江原道も產出多く、重要なる產物の一つである、何れも白無地のものにして、之を製織するには豫め麻を淸水に浸し、日光に晒して自然漂白をなし、纖維を割きて細糸として居織機に依りて製織し、夏の衣料、喪服、帆、袋などに使用されて居る。

此の他鑛業、製紙業、金屬、竹細工、釀造業等も大に發展し、朝鮮の市場に於ては獨占的に活躍し、交通機關の發達に伴ひ製造工業の發展は、將來益々刮目すべきものがあらう

三、商業貿易の膨脹時代

內地式を加味して進むだ產業

朝鮮產業の革命は、農業を中心として商工業に迅速なる發達を促がした、而して文化政治時代に入りて最も此時代最も發達したる產業は、何れも新に起つた產業と言はうか、內地式を加味して進むだここが、產業發達の上に好都合であつた、乃ち當局の奬勵は悉く嶄新なる施設にして、舊時代の朝鮮には色々の習慣や法律の束縛があつて、に其の發展を妨げられたのであつたが、新らしき產業は自由に發達することが出來たからである

朝鮮現代に於ける商業上の自由は、現代に於ける科學と機械の力と共に發達し發達しつゝあるのである、特に歐洲より東亞の一角まで襲れ廻はつた長い戰爭は、大に朝鮮の生產物の需用を增加し、之が爲めに朝鮮の市場も大に

影響を受けて活氣を帶びて來た、文化政治時代に入りて產業上各方面に其の發展を促がしたのは、慥かに其の惰力であつた、日本の商船は戰時中非常の速力を以て發達した、素より戰爭の爲め一時商船の發達が妨けられたに相違ないが、然し歐洲戰爭の爲め我が貿易の舞臺が一層廣くなつたことは事實である、即ち日本は戰爭の爲め南洋の委任統治權を獲て、大に殖民地を擴張したるのみならず、南洋各方面に向つて海上の商權を握ることが出來たのだから如何なる市場も日本との貿易を拒絕する譯にはゆかなくなつた。

南洋方面に向て海上の商權を握る

朝鮮は產業上既に內地と同化の域に進歩しつゝある、新產業組織の地盤は既に昔日の比ではない、即ち製造場は勃々として起り、職工勞働者は善く訓練せられ、需用は頓に增加し、朝鮮人の生活は追々新らしき組織の上に立ち又は立たむとして居る、技術上の方面から云ふと各道の指導と奬勵に依りて非常に進歩し、生產の額から言ても既往の歷史に於て其の類例を見ざる所である、又之ほど重大な產業上の變化が之れほど迅速に行はれ、之れほど永久

的なる効果を持つたことも、古來未だ曾て見ざるの現象である、此の產業上の發達が如何に著しきものであるかは、之を貿易財政等の統計に依て知ることが出來る。

貿易額は五倍強の增加

試みに武斷政治時代大正六年の貿易額を示せば、金銀を除き輸移出八千三百七十七萬圓、輸移入一億二百八十八萬圓、合計一億八千六百六十六萬圓なるが、大正十四年に於ては、歐洲大戰後不景氣の襲來したるにも拘はらず、輸移出は三億四千百餘萬圓、輸移入は三億四千餘萬圓、合計六億八千百餘萬圓に激增し、實に五倍強の增勢を示して居る、斯くの如く朝鮮の經濟は膨脹した、一言にして云へば富が增加した、富が增加して生活が豐かになり、人口が異常の力を以て增加して來た、併合當時には朝鮮の全人口は一千二百萬人を出でなかつたが、大正八年には一千七百萬人、現今では二千萬人に激增した。

四、勞働者の革命時代

朝鮮の富が漸く增加しつゝある半面に於て、從來奴隷階級と細民の多くが勞働者と爲りて生活上非常の安定を得つゝありしとき、玆に勞働者が憐れむべき實狀に陷るの已むを得ざる現象が惹起した、それは支那苦力の侵入であつた。

支那苦力は、支那第一革命當時より、鴨綠江を踰へて朝鮮に侵入し始めたが、寺內伯か總督たりし時代には、朝鮮勞働者を保護せむことして、巧みに之を壓迫して其の侵入を防禦した、憲兵は鴨綠江の橋上に立て、汝等朝鮮に來る勿れと叱責した、故に朝鮮の勞働者は極端に保護されたが、文化政治以來國際關係を憂慮し、其の來るに放任せし結果、支那苦力は或は陸路より、或は海路より仁川に上陸し、低廉なる賃銀を以て朝鮮各道に侵入し勞働を始めた、能率の點に於て、賃銀の點に於て、朝鮮勞働者は支那苦力の敵ではない

支那苦力朝鮮に侵入す

土と資本と勞働との三つに區別

殊に近年に至りては鐵道工事などに多數の支那苦力の使役せらるゝに及び、朝鮮勞働者は言語道斷の窮地に陷落した。

而して朝鮮産業革命は、日に月に具體化し來りて、手の働が機械の働きに變じ、家の內の小さな仕事が大仕掛の工場制度と化し、手工と機械との生存競爭となり、從來は生產の諸要素が、明かに分化してゐなかつたのが、近年は土地と資本と勞働との三つに判然と區別さるゝ事となり、武陵桃源の原始生活より、都會の激烈なる競爭生活に移動しつゝある、而して朝鮮の社會整理に依りて、働らき口の多からむことを想像して、支那苦力は益々增加する加之露國の革命以來露西亞人の勞働者さへぼつ〳〵入り込むで來た、朝鮮の勞働者は賃銀の低下の反對に、物價騰貴の爲めに貧乏勞働者の數は非常に增加し、遂に是等は一團と爲り次から次と日本內地に働らきに出掛けつゝあるが、機械時代科學時代の內地工業界に於て、續々として侵入する勞働者を何ふするこゝも出來ない、內口縣警察部よりは頻々と總警府に交涉して、朝鮮

勞働者の侵入を防がむとするも、其の効果は更に無い。

朝鮮が産業の革命に依りて、其の富は增加し、其人口は增加しつゝある一面に於て、社會の半面には斯くの如く苦痛を與へつゝある、貧乏なる勞働者階級と下層民は、今や最大の苦痛悲慘を嘗めむとして居る、今後朝鮮の凡ゆる工業が科學工業に轉換するに從ひ、朝鮮從來の機織業者も、製紙業者も、各種手藝手工業者も、都會工場に出でゝ、生存競爭の立場に於て、生活問題に沒頭せなければなるまい、從來農家の副業として、婦女子などは糸紡ぎや手藝に依て、若干の賃銀を得てゐたが、是等も遂には都會の工場に集まらざるを得なくなるであらう、然らば聽て來る所のものは農村の革命であらねばならぬ。

凡ゆる工業は科學工業に轉換

之を要するに、朝鮮の産業革命が朝鮮に富を齎らす半面に於て、朝鮮の下層民勞働者階級は、人口の增加と物價の騰貴と、支那苦力との賃銀競爭に打ち負けて悲慘なる生活狀態を續けねばなるまい、文化政治の當局者は、之を

如何に見て居るであらうか、面して之を如何にして善處せむとするのであらうか。

第九篇　文化の變遷と文學の革命

——德教と人格養成に貢獻したる儒學——
——藝術的の小說と美術の發達——

物質文明全民族を風靡す

按ずるに、我日本民族が今日の文化を大成したるは、東洋諸民族に卒先して、西洋文化を吸收したるにあり、即ち東洋の儒學教育を弊履の如くに棄て、、西洋の科學を普及したるにあり、故に我精神文明先づ亡びて、物質文明は海內全民族を風靡した。

我維新後の政治家は何故に儒教を捨ててしまつたのか、それは儒教の短處のみを見て、その長處を見なかつたのであらう、例へは論語を讀むで見ても唯だ人間社會の道德の事を語るのみで、それ以上に伸びてゐないやうに考へらる、が、儒教の道德は直ちに政治經濟に應用が出來る所の廣汎なる意味に

西洋道德の博愛主義

於ける、政治學經濟學であつて、西洋の自然科學と少しも撞着する所はない基督教でも佛教でも無數の迷信を伴つて、科學と撞着するの面倒が起つて來るのであるが、儒教は決して怪力亂神を語らざる所に、顯著なる長處を發見することが出來るのである。

而して西洋道德の博愛主義は、東洋道德の仁である、乃ち人道である、基督教なぞでは出世間の教に偏して、或は國家を無視し、世間的の道德を侮るやうなことがあるが、儒教に國家を無視するやうな教材は一つも無い、故に儒教は新教育と相提携して發達して往くことが出來るのである、唯だ儒教には哲學的論理的思想に乏しいのと、人權とか國權とかの概念や、總ての權利思想に缺くる所あるのが一大短處で、それが直ちに新教育の圈外に拉し去られた所以であらう。

然しながら、儒教の人格的教育は、人間社會に強き志の人格を養成しつ、あつたことは見逃がすことの出來ない特長で、三軍の帥は奪ふ可きも、匹夫

儒教の精神文化を戀慕す

も其の志は奪ふ可からずの概があつて、我大和魂が此の人格教育に負ふ所は實に絶大であらねばならぬ、我歴史上の人物は悉く此の儒教の人格教育にありて、清香馥郁たる花を咲かしてゐる、近代の英傑伊藤博文公でも、副島種臣先生でも、人格教育の大ひなる產物ではあるまいか、近年に至り我有志に儒教復活論が勃々と唱へられて來たのは、何ふ云ふ譯であらうか、我先優後樂の政治家、學者が、物質文化の弊を自覺し、迂散なる人物の輩出に堪へずして、儒教の精神文化を戀慕し來るの證左であらう。

不肖は曾て我儒教復興の必要を論じ、朝鮮の儒教を論じて、日本人と朝鮮人とは、儒學の德教によりて一致せざる可からずと論じたことがある、之れ日本民族の發展史上、最も有益なる內鮮國家的道德の立脚點より、內鮮融合を斷定せむとせるものにして、古へ以來內鮮の學者間に見解の區々たる史的事實を超越して、適かに豁大にして理由ある一箇の見識を發揮せむとしたることに於て、僭越の譏は勿論辭する所ではなかつた。

朝鮮の德教と人格養成に貢獻

又按ずるに、日本に於ては、德川幕府の勞頭に於て、彼の林羅山が朱子學を以て、我帝國の教育主義となし來りし以來、貝原益軒の如き、山崎闇齋の如き、佐藤一齋の如き、水戸光圀の如き、元田東野の如き、副島種臣の如き日本に於ける朱子學の泰斗が、德川三百年間より、明治初年に活躍したる功績は、我經國濟民の上に赫々たるものがある、朝鮮に於ても麗末の鄭夢周、李穡、李朝に於ては李退溪、宋尤菴、李栗谷等の朱子學者が、朝鮮の德教と人格養成に貢獻したるの分量と功績とは眞に絶大なるものがある。

殊に李栗谷の如きは、少壯にして佛門に在りしが、一旦佛教を擲つて朱子學に化宗し、佛の生前死後に關する奇怪なる古傳說に目を閉ぢて、出世間的の佛學より、世間的の儒學によりて、政治に經濟に世俗を導化したるは眞に偉大なる功績とせねばならぬ、特に宋尤菴の如きに至りては、儒教の天と云ふものを敷衍して、太極論を試みたことなどに至つては、明かに西洋の自然科學と一致せる達學に驚かされるのである、此の点に於ては日本の儒學者は

遠く朝鮮の學者には及ばなかつた。

然しながら、日本に於ける朱子學は、猛烈に大義名分を正してゐる、そして君臣の義、父子の倫、長幼の序、と云ふやうなことが朱子學の骨子となつて發展したが、朝鮮に於ては大義名分論は餘りに朱子學の精神が徹底してゐなかつた、德育と禮節とが朱子學の基本となつて居つたやうであるが、日本の樣な幕政の暴慢は之有るなく、王政乃ち專政の表面は、矢張り德政主義で始終した、たゞ時の政府の役人が苛斂誅求を敢てして、朝鮮王の德政主義を隱蔽したことは、宛かも我幕府が聖天子の政權を壟斷して、虐政を行つたのと一軌だ、而も朱子學の精神は、內鮮人共に共通的に其の澤を同ふして居る故に內鮮兩民族の德敎の上に於ては、兄たり難く、弟たり難して發展しつゝあつた。

德政主義で始終した

朱子學派の倫理說は、眞面目の人格を製造することに於て、日本も朝鮮も同樣だ、經世濟民の業に於て、儒敎は最もよく組織だてられて居る所に、日

本と朝鮮との倫理の連鎖が行はれて居る、乃ち日本と朝鮮とは、學問の系統を同ふしながら、日本は大義名分に生きて、維新の風雲を捲き、朝鮮は德育と禮節の理に縮まつて、併合の餘儀なきに至つて居るが、滔々たる朝鮮の儒生が、西洋理想派の倫理說に對抗して、一機軸を出さんと煩悶し、其の孤壘を墨守して動かざる所に、朝鮮人の德育に一種の强みが殘存して居る。

內鮮の德敎に照同の威光

此の狀態に於て、而して近頃日本の有志に於て、儒敎復活の機運の崩し來れるに乘じ、我經國の士が毅然として內鮮の德敎に照同の威光を示さば、我朝鮮統治の德政主義と調和して、政治上大ひなる產物か獲られるであらうことを期待せざるを得ない、實際現代の日本は、物質文化に沈醉して、精神文化は地を拂ひ、世道人心は日に月に腐敗と墮落に陷り、思想界は前代未聞の混亂を極めて居る、我政治家なごは、思想界は混亂しても、德敎は廢れても國運は隆々として發展して居るので、國礎は毅然たるものだと云て居るが、それは、佞辨と云ふものだ、現狀を以て散焉として時代と推し移らば、國礎

の搖らぎ出すのは目に見へてゐる。

日本の儒教主義は、明治の維新と共に廢滅し、朝鮮の儒教主義は併合によりて衰弱した、そして文化政治の壇上に立て、德政主義を行つた前齋藤總督は、朝鮮統治の上に於ては教育事業を以て、最も重大なる要件なりとし、多大の教育費を投じて普通學校を増設し、高等普通學校を創設し、大學を創設した。

汗牛充棟も啻ならざる母國の文學

朝鮮の舊文學者等は、今後は汗牛充棟も啻ならざる母國の文學に依りて、儒教主義は遮蔽せられ、其の光りは太陽の前の燭火の如くに薄らぎ往くであらう、現に總督府は儒教主義の鄕校私塾にも科學の新材料を供給しつゝあるを以て、儒生等は其の智力と共に漸次新學問に研究の歩を進め來るべく、又美術に於ても朝鮮人は日本人の繪畫彫刻を見る毎に、朝鮮の舊文明に比すれば遙かに後代の子孫なることを感ぜずには居られまい。

果せる哉近年朝鮮は勃々として、文學上に大革命が行はれて來た、新文學

の普及と新著作の續立とが促がされて來た、特に小說の方面に於ては、比較的低級なる民衆の需用に應ずべき小說の著作が既に出來て來た、一時は日本の小說の飜譯や、模倣が行はれたこともあつたが、近頃は生命ある眞の小說が現はれて來た、玆に初めて文學としての小說が朝鮮に生れ出づるやうになつた、人間の生活や境遇なごを、小說の上で說き明かすことは、過去の日本小說家の特長である、そして其の小說は放逸なる男子の爲めに出來て居るか若くは女性の墮落の爲めに出來て居るかを疑はる、小說のみにして、一般教化の爲めには餘り効能が無く、人道的教化の力が缺乏して居つた、朝鮮人の小說も其の範圍を出でない狀態だ。

人道的教力化の缺乏

然も日本に於ては、晩近漸く識見と文才ある小說家出で來りて、公平なる基礎の上に人生に關する小說を書いて、人間生活の各方面に涉れる公平なる觀察を語ることが出來た、そして小說の調子を一層高くしたばかりでなく、實に眞正の文學的才幹を揮ひつゝあるのである、朝鮮の小說家も一層小說の

調子を高くして、小說の目的を度外視するなく、或は天稟の才幹により或は教育により、人間の生活と境遇思想を、此の文學の中に現はすことに努めねばならぬ。

例へば朝鮮の家族制度が、時勢の進運に相應せず又伴はざるものありことしても、先人の遺業たる道德的美俗は之を維持し、大に之を發揚することを期せなければならぬ、朝鮮に於ては親權は從來異常なる働きを爲し、先進文明國の夢想だもせざる所にして、我維新前の狀態其の儘である、然るに現代の新教育によりて、儒教の道德教育の基礎據搖せられて以來、我家族制度は大に破壞せられ、朝鮮も殆んど同樣の狀態に變遷して來つゝあり、民權は徒らに伸張して、法治主義が活躍して法律の條文のみを以て解決せむとするの時代と爲り、親は子を訴へ、子は親と爭ひ、道德上の修羅場を法庭に覗くことは珍らしくない。

茲に來つて我朝鮮の文學者小說家は、大に深思熟慮する所がなくてはならぬ、而して藝術的高調の小說に於て善良なる教訓を美俗の上に與ふることに注意せなければならない、小說が斯かる方面に一種の藝術として、文學として影響を與へ得るに至れば、それは慥かに朝鮮文學の革命であつて、文學上の力を道德上に發揮することが出來るのである、繪畫の方でも朝鮮人の美術思想は晩近大に發達し、毎年當局が開催する美術展覽會は、盛んに美術思想を誘發し來りて、從來疎拙にして美的文學の不足の爲め、動もすれば殺風景なる社會を形成せしもの、今や慥かに朝鮮民族の品性を鎔冶せむことするまでに進み來つたことに依て、朝鮮文學と藝術の革命は斯くて頻々と行はるゝであらう。

第十篇　植民的同化新論

——齋藤子の內鮮雜婚政策評——

——民族的偉力を用ゆる同化策——

——精神的に難治の境遇に迷ふ——

【一】

齋藤總督が政治政策の主義

齋藤前總督は、一視同仁の內地延長主義下に、其の政治政策の主力を內鮮人同化に置かれた、即ち改革されたる朝鮮敎育制度は、同化政策の上に築かれたる所の制度である、寺內伯は熱心に朝鮮の民族性を研究し、其の舊慣、其の風俗の調査に數年の日子を費やされた、而も尙具體的に同化を宣明せられなかつたことは、寺內伯の方寸には、民族性を異にし、其の舊慣、其の風俗人情を異にせる、兩個の魂が果して同化し得るであらうか、大和魂と朝鮮魂とは同化は出來まいと多寡を括つて居られたのではあるまいか。

齋藤總督の聲明

然しながら、內鮮人同化が帝國治鮮の大方針たる以上、寺內伯も其の大方針を沒にする積りではなかつたらうが、伯は少なくも同化事業に付ては、思案に餘りしことは想像し得らるゝ、否伯は朝鮮を去られし後に於ても、長谷川總督に引繼ぐに、研究中なるを以てせられたであらう、然しながら齋藤子は、當時帝國の宰相として、政治家として、人も許し自らも任せし原敬氏との意見善良に合致し、同化政策を確定して之を具體的に宣明するを、治鮮の便宜とせられ、來任の劈頭に朝鮮民族に謨告された、其の文に曰く。

謨　告

（前略）抑も併合の目的たる、內地人及朝鮮人をして、互に相倚り相扶け打て一丸となり、以て東洋平和の基礎を確立するに在り、朝鮮は即ち帝國の版圖にして其の屬邦に非ず、朝鮮人は即ち帝國の臣民にして、內地人と何等の差別あるに非ず、隨て朝鮮の統治亦夙に同化の方針に基き、一視同仁の大義に則り、敢て偏私なきを期せり、唯言語習俗の同じからざるあり

同化政策を天下に宣告す

文化亦一日の先後あり、是を以て百般の施設全然其の軌を一にする能はず時ミして其の制を異にするありミ雖も、是れ過渡時代に於て已むを得ざるに出づるのみ固より孰れを重しミ孰れを輕しミ爲さむや、他日同化の績擧がるに至らば、內地ミ朝鮮ミ將又內地人ミ朝鮮人ミは、劃一制度の下に立ちて、均しく皇化に霑被せむは、言を俟たざる所なり、本總督の大命を奉じて、夙夜朝鮮の開發に汲勵する所以亦畢竟朝鮮をして、一日も早く此の期に達せしめむミするに在り（下略）

齋藤總督は、卒直に帝國治鮮の政策が同化に在るミを天下に宣告された、而して朝鮮敎育制度をも、其の趣旨の下に改革せられたる以上は、內鮮人同化に基調せる治鮮の政策に就ては、不肖等は異論するミは好まぬ、其の大方針に默從するのみである、而して更に齋藤子は同化の速達方便ミして、內鮮人の雜婚政策を採り、盛んに之を慫慂された、苟くも同化政策を具體化する以上、此處まで進むで來るのは、蓋し當然であらう。

內地人と同化する如きは夢にも考へて居らぬ

さりながら、朝鮮民族は帝國治鮮の大方針たる、總督の內鮮同化政策なるものを、何ふ見て居るか乃至同化を迎合するであらうか何ふかミ云ふミは總督ミしては微細に研究もし、調査もせられなければならぬミは勿論である對手は何ふでもあつてもよい、我れの決心さへ付けばミし〳〵之を斷行するまでぢや、ミ云ふやうな事は、物質的事業ならば兎も角、精神的事業に於ては、左樣に單純のものではない、前編にも屢々論ずる如く、朝鮮人の目的は朝鮮獨立に在る、祖國回復に在る、內地人に同化する如きは夢にも考へて居らぬこミは朝鮮識者の告白だ、それは恐らく內地人に於ても左樣であるかも知れぬ、神經過敏にして重箱の隅を楊子でつゝくやうな內地人が、何ふして朝鮮人を同化し得るであらうか、敎育に因り社交に因りて民族性の融合が出來、其の感情其の人情が合格せなければ、斷じて內鮮人同化は達成せらるゝものではない。

齋藤子は如何なる自信があれば、同化政策を敎育の上に置き雜婚の上に置

かる、であらうか、齋藤子は、雜婚政策を奬勵して曰く。

『併合したる今日にては、內鮮人の同化は我治鮮の終局の目的なるを以て此の目的を完成するには、將來內鮮人結婚を奬勵し、彼我異身同體と爲らざる可からず、同一心は同一の血と肉とに宿るを原則とす、斯く云へば結婚を政略的に利用するが如きも、我現在民族は亞細亞に於ける、各民族の寄合と云ふも不可なきまでに各種が代表されて居ることを人類學者も公認せり、就中朝鮮人は馬來人種よりも、支那韃靼人種よりも、又アイヌ系統よりも、比較的多數を占め居るが如し、日本內地に於て金とか高とか或は洪とか名乘れる家族を尋ぬれば、大抵朝鮮より渡來せるものにして、其の家其の人が何等の相違もなく、立派なる日本人と爲りて、混血見と云ふ痕跡は毫も認め得られざるなり、蓋し其の容貌骨格血淚までも、其の源は同一にして、少なくとも頗る同化し易き自然の　賦に由るものたるは疑ひを容れざる所、生理學上結婚政策が果して優秀なるや、劣惡なるやは一律に

斷定し難きも、我帝國は歐洲諸國と異なり、家族制度の國柄なるを以て、社會的結合の結果として、親と爲り、子と爲り、親戚同族と爲る所に、國家の基礎は据へられたり云々』

齋藤子は內鮮人同化を、敎育の力と血と肉との混結に因りて達成せむと理想せられて居つた、政治家の苦心も玆に來つて實に尋常でない、不肖は敢て內鮮同化を否定して、齋藤子の同化策を誹論するものではないが、齋藤子八箇年間の文化政治に於て、讀者は此の現象を明瞭に目擊されたであらう、不肖が本篇及前篇に於て執念にも同化問題を繰り返す所のものは、之れが我朝鮮統治の癌であるとを考ゆるからだ、此の問題さへ破竹の如くならば、朝鮮統治上不肖等は何の憂慮する所はない。

思ふに朝鮮人同化は、兩民族の自覺に俟たなければならぬ、之を敎育に求め、之を結婚の結果に求めむとするは迂闊である、朝鮮人同化は日本人の民族的に偉力が動かなければ、到底出來るものではない、然らば其の民族的偉